

第5回

幼児の生活アンケート



ベネッセ教育総合研究所

目次

本調査の特徴 3
 調査概要 4
 分析の枠組みとサンプル構成 6
 基本属性 10



第1章 幼児の生活



第1節 生活リズム（高岡 純子） 14
 第2節 習い事（田村 徳子） 18
 第3節 家にあるもの（高岡 純子） 23
 第4節 メディアとのかかわり（高岡 純子） 26
 第5節 幼児の遊び（高岡 純子） 29
 第6節 幼児の発達状況（荒牧 美佐子） 32

第2章 母親の教育・子育てに関する意識

第1節 母親の子育て観（真田 美恵子） 37
 第2節 今、子育てで力を入れていること（真田 美恵子） 41
 第3節 子どもの進学に対する期待（真田 美恵子） 44
 第4節 教育費（田村 徳子） 46
 第5節 母親の子育て意識（荒牧 美佐子） 51
 第6節 しつけや教育の情報源（田村 徳子） 54
 第7節 幼稚園・保育園への要望（真田 美恵子） 57



第3章 父親のかかわりと子育て支援



第1節 支援する人・機関・サービス（田村 徳子） 60
 第2節 夫婦の家事・子育て分担（田村 徳子） 63

本調査の特徴



本調査は、乳幼児の生活の様子、保護者の子育てに関する意識と実態をとらえることを目的に実施している。同じ目的で実施した過去4回の調査（1995年、2000年、2005年、2010年）と経年での比較ができるように配慮して、今回の調査を設計した。

本調査の特徴は以下のようにまとめられる。

1. 時代による変化を把握できる

本調査は、経年変化を把握することを目的として企画されている。質問項目は、時代の変化に応じて追加・削除はあるが、ほぼ同一のものを使用している。なお、調査回によって調査地域や調査対象を拡大して実施しているが、経年変化をみる際は調査地域と調査対象をそろえて比較した。

2. 乳幼児の年齢による違いを把握できる

今回の調査は0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者を対象としており、乳幼児の生活の様子や保護者の子育てに関する意識と実態が、乳幼児の年齢によって、どのように違うのかをとらえることができる。

3. 乳幼児の生活と保護者の子育てに関する幅広い内容を聞いている

乳幼児の基本的な生活時間、メディアとの接触、習い事、遊びなど、乳幼児の生活に関する幅広い内容を調べている。また、乳幼児の生活にとどまらず、保護者の子育てに関する意識と実態についても広範囲で聞いている。

調査概要



1. 調査目的

乳幼児の生活の様子、保護者の子育てに関する意識と実態の把握

2. 調査方法

郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）

3. 調査時期

- 第1回調査 1995年2月
- 第2回調査 2000年2月
- 第3回調査 2005年3月
- 第4回調査 2010年3月
- 第5回調査 2015年2～3月

4. 調査対象

第1回（1995年調査）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者1,692人（配布数3,020通、回収率56.0%）

第2回（2000年調査）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）、および地方都市（富山市、大分市）の1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者3,270人（配布数5,600通、回収率58.4%）

* 地方都市の回答を分析から除外し、首都圏の1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者1,601人を対象とする。

第3回（2005年調査）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者2,980人（配布数7,200通、回収率41.4%）

* 20年間の経年比較を行う際など、0歳6か月～1歳5か月の乳幼児をもつ保護者の回答を分析から除外し、1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者2,297人を対象とする場合がある。

第4回（2010年調査）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者3,522人（配布数7,801通、回収率45.1%）

* 20年間の経年比較を行う際など、0歳6か月～1歳5か月の乳幼児をもつ保護者の回答を分析から除外し、1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者2,918人を対象とする場合がある。

第5回（2015年調査）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者4,034人（配布数11,384通、回収率35.4%）

* 20年間の経年比較を行う際など、0歳6か月～1歳5か月の乳幼児をもつ保護者の回答を分析から除外し、1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者3,466人を対象とする場合がある。

5. 調査項目

子どもの基本的な生活時間／習い事／メディアとのかかわり／遊び／幼児の発達状況／母親の教育観・子育て観／子どもの将来への期待／今、子育てで力を入れていること／母親の子育て意識／夫婦の家事・子育て分担／子育て支援 など

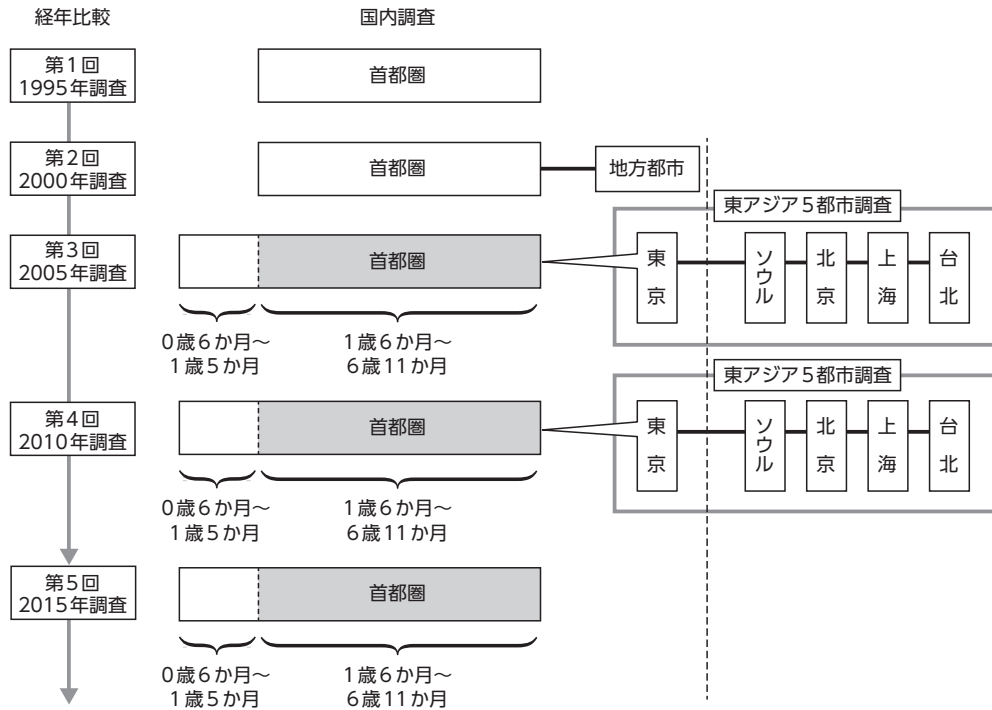
* 調査項目は経年比較が可能なように配慮したが、時代の変化に合わせて、追加・削除などの変更を行っている。



分析の枠組みとサンプル構成

● 分析の枠組み

本報告書の分析の枠組みは次のとおりである。



- ・ 経年での比較を行うために、第2回（00年調査）の地方都市の回答を分析から除外している。
- ・ 20年の経年比較を行う際など、第3回（05年調査）～第5回（15年調査）の0歳6か月～1歳5か月の乳幼児をもつ保護者の回答を、分析から除外する場合がある。

● サンプル構成

本報告書のサンプル数は、以下のとおりである。

(人)

調査回	調査年	年齢 性別	0歳児 ※1	1歳児			2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児	サンプル数
				月齢不明	1歳前半※2	1歳後半※3						
第1回	95年	男子	—	—	—	57	226	154	182	110	90	1,692
		女子	—	—	—	71	233	152	206	108	103	
第2回	00年	男子	—	—	—	91	246	123	128	125	130	1,601
		女子	—	—	—	84	235	128	98	105	108	
第3回	05年	男子	161	12	170	152	374	164	162	152	143	2,980
		女子	165	11	164	151	366	176	150	174	133	
第4回	10年	男子	150	—	132	143	245	271	291	243	264	3,522
		女子	172	—	150	127	247	276	288	265	258	
第5回	15年	男子	143	—	146	172	263	290	303	334	356	4,034
		女子	130	—	149	147	320	336	307	337	301	

※1：0歳6か月～0歳11か月 ※2：1歳0か月～1歳5か月 ※3：1歳6か月～1歳11か月

* 95年は2歳児・4歳児、00年は2歳児、05年は0歳児・1歳児に対して、他の年齢よりも質問紙を多く配布している。

ウェイトについて

- データの精度を高め、経年での比較を可能にするため、比推定を用い、調査対象の属性別構成比を現実に合わせた。
- 本報告書で使用したウェイトは、調査票1枚が代表する人数、つまり、「推計人口」/「幼児の生活アンケート回答者数」を、以下のように母集団を複数の区分に分割して計算することにより作成されたものである。
- 第3回（05年調査）～第5回（15年調査）については、1歳6か月以上の年齢層で分析する場合と、0歳6か月以上の年齢層で分析する場合とがある。分析対象の年齢層に合わせ、以下のような異なるウェイトを作成して使い分けしているため、ウェイトの相違により集計値は異なる。なお、年齢別の分析においても、同様である。

● 1歳6か月～6歳就学前の年齢層で分析する際

子どもの性別（2区分）×子どもの年齢別（6区分）

※第1回（95年調査）、第2回（00年調査）、第3回（05年調査）、第4回（10年調査）、第5回（15年調査）

● 0歳6か月～6歳就学前の年齢層で分析する際

子どもの性別（2区分）×子どもの年齢別（7区分）

※第3回（05年調査）、第4回（10年調査）、第5回（15年調査）

- 第1回（95年調査）および第2回（00年調査）のウェイト作成にあたっては、4都県（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の国勢調査人口を利用した。第3回（05年調査）については、2003年（神奈川県、千葉県、埼玉県）および2004年（東京都）の人口推計を利用した。第4回（10年調査）については、2003年から2009年の人口動態統計（厚生労働省）から、4都県の各歳の出生数と死亡数を用いて推計人口を算出して利用した。第5回（15年調査）については、2008年から2014年の人口動態統計（厚生労働省）から、4都県の各歳の出生数と死亡数を用いて推計人口を算出して利用した。
- 1歳6か月以上の年齢層での分析を行う場合、「1歳後半児」は1歳6か月～1歳11か月の幼児を指す。また、第3回（05年調査）～第5回（15年調査）において、0歳6か月以上の年齢層で分析を行う場合、「0歳児」は0歳6か月～0歳11か月の乳児を指している。これらの年齢層については、ウェイトの作成にあたって、「推計人口」の性別の該当年齢人口の半数を割りあてた。
- ウェイトを作成するにあたり、子どもの年齢および子どもの性別不詳者は「幼児の生活アンケート回答者」から除外している。結果、本報告書の分析からも除外されている。

● 本報告書を読む際の注意点

本報告書を読む際の注意点は次のとおりである。

1. 比較のデータについて

- ・本報告書の95年、00年、05年、10年、15年の各調査の比較は、すべて「1歳6か月～6歳11か月」の幼児をもつ保護者のデータを分析に用いている。
- ・05年、10年、15年の調査のみの比較、および15年調査のみの分析は、「0歳6か月～6歳11か月」「1歳6か月～6歳11か月」のどちらの範囲でも可能だが、本文や図表内にとくに記載がない場合は「1歳6か月～6歳11か月」の範囲で、これに対応するウェイトを用いて集計・分析している。
- ・すべて東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県のデータを用いている。

2. 年齢区分と就園状況について

- ・本報告書では、本調査の実施時期（3月）における幼児の月齢にもとづき、以下のような年齢区分を設定した。
「低年齢」… 1歳6か月～3歳11か月の幼児→幼稚園児は少ない
「高年齢」… 4歳0か月～6歳11か月の幼児→未就園児は少ない
- ・本報告書では、幼児の月齢と就園状況を考慮し、就園状況別の分析を行う際、「低年齢」の場合には「未就園児」と「保育園児」の保護者の回答のみを、「高年齢」の場合には「幼稚園児」と「保育園児」の保護者の回答のみを分析している場合がある。

3. 回答、分析の対象について

以下の項目について、母親のみを回答の対象者としている（カッコ内は第5回（15年調査）調査票の質問番号）。

- ・子育て支援（Q17）
- ・子どもの父親（Q18-1）
- ・子育て・家事の分担の割合（Q18-2）

以下の項目について、調査票上は全員が回答の対象者であるが、父親と母親で回答傾向が異なると考えられるため、本報告書では母親の回答のみを抽出して分析している（カッコ内は第5回（15年調査）調査票の質問番号）。

- ・教育費の負担感（Q9-2）
- ・しつけや教育に関する情報源（Q10）
- ・子育てで力を入れていること（Q11）
- ・子どもの将来への期待（Q12-1）
- ・子どもの進学に対する期待（Q12-2）
- ・園を選ぶポイント（Q15）
- ・幼稚園・保育園に対する要望（Q16）
- ・祖父母の協力（Q19）
- ・子育てについての意識（Q20）
- ・子育てに関する意見（Q21）
- ・子どもの存在（Q22）
- ・現在の生活や子育ての満足度（Q23）

4. 百分比（％）の算出方法について

百分比（％）は有効回答数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、小数第2位を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、各々の項目の数値の和と合計を示す数値とが一致しない場合がある。

5. 百分比（％）およびサンプル数について

本報告書の百分比（％）は、すべてウェイトをつけて算出されている。また、サンプル数はすべてウェイトをつける前のサンプル数を表している。

6. 報告書の数値について

本報告書では、95年調査および00年調査の集計についても、05年調査の集計結果を算出する際に作成したウェイトを使用している。そのため、『第1回幼児の生活アンケート報告書』（1996年）、および『第2回幼児の生活アンケート報告書』（2000年）とは数値が異なる。



基本属性

ここで説明する基本属性は、1歳6か月～6歳11か月の幼児をもつ保護者1,692人（95年）、1,601人（00年）、2,297人（05年）、2,918人（10年）、3,466人（15年）について、ウェイトづけして算出した数値である。

A 子どもの属性

図 A-1 性別

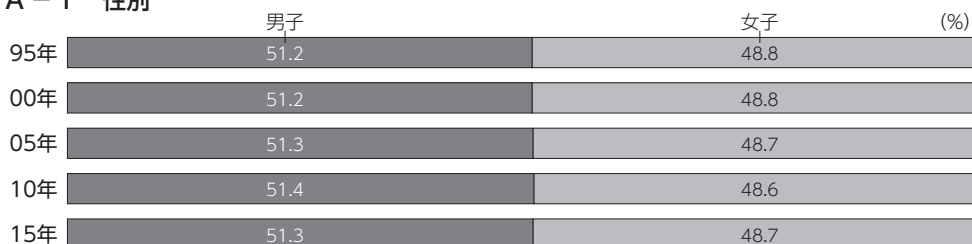


図 A-2 年齢

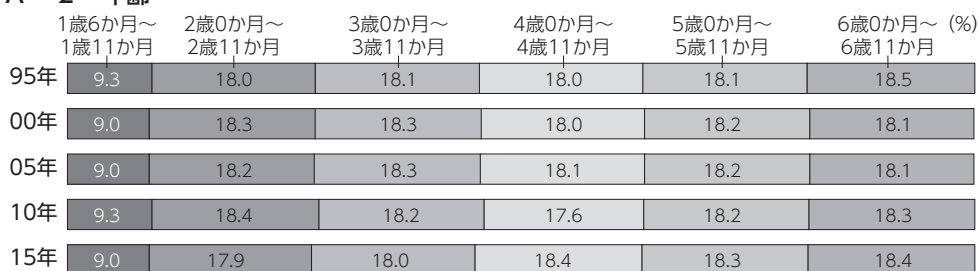


図 A-3 きょうだい数

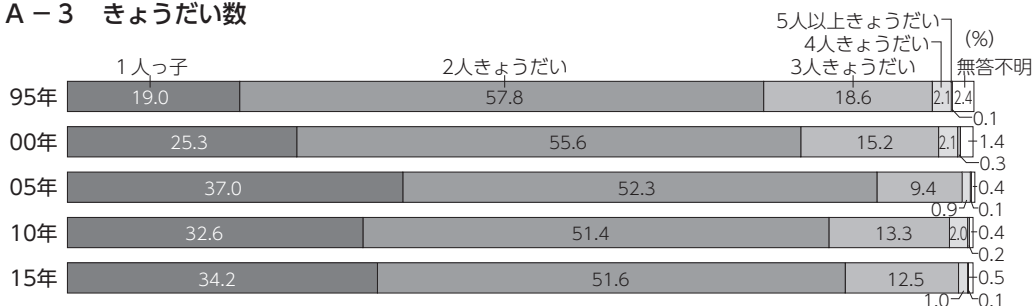


図 A-4 出生順位

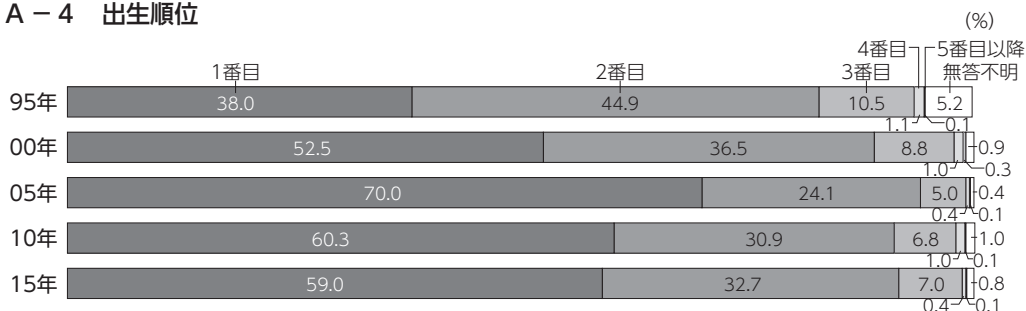
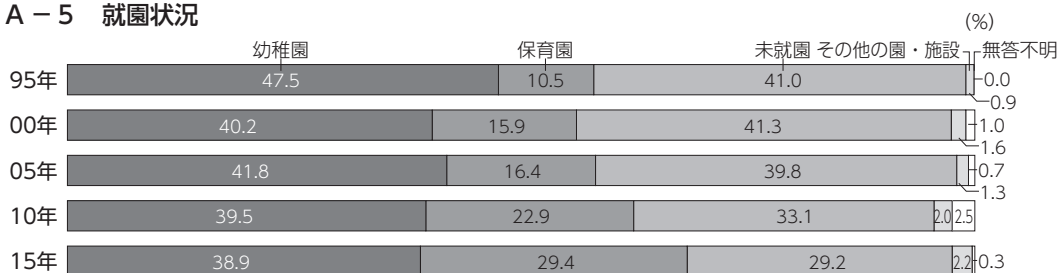


図 A-5 就園状況

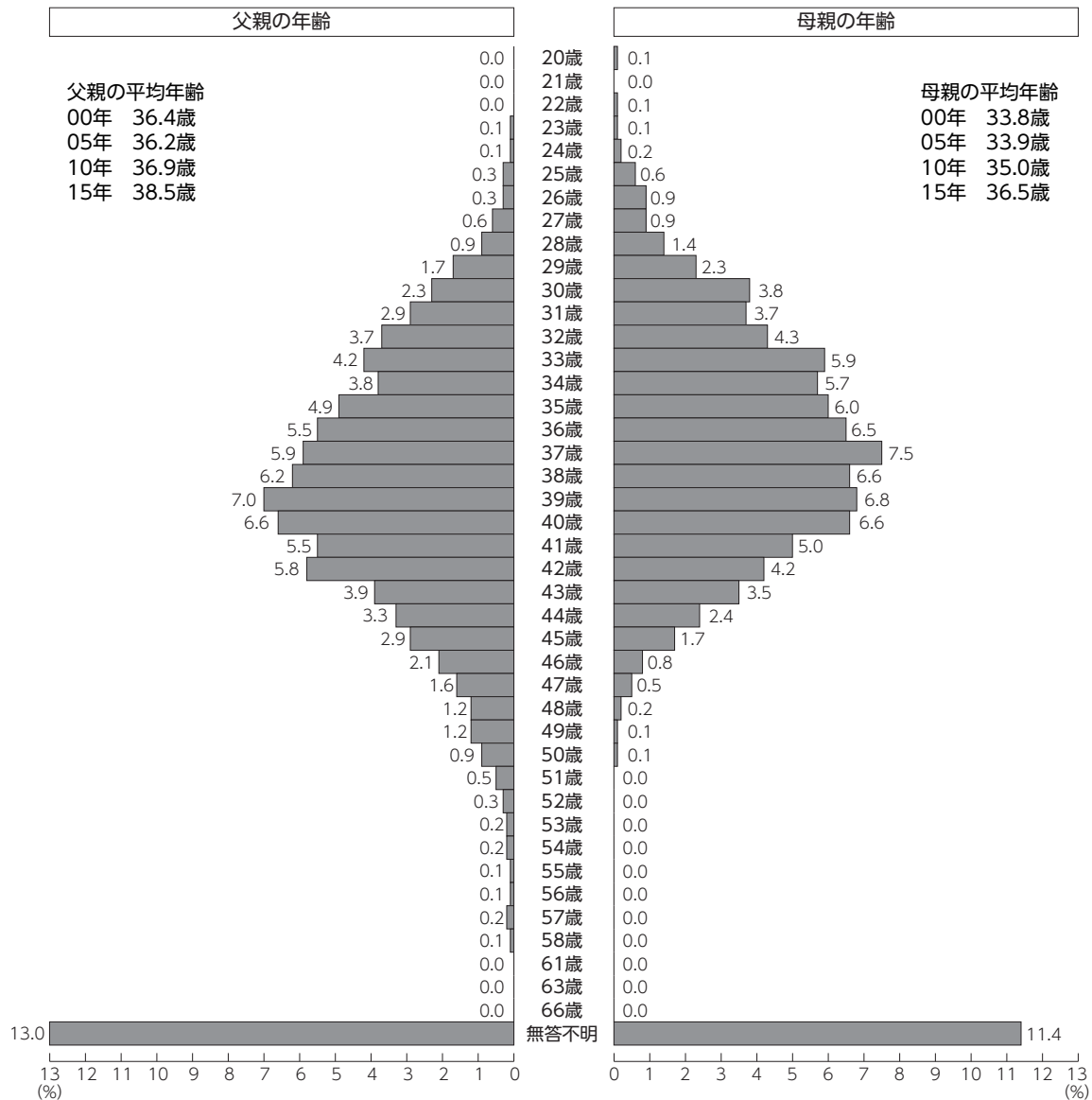


B 保護者の属性

表B 回答者と子どもとの関係

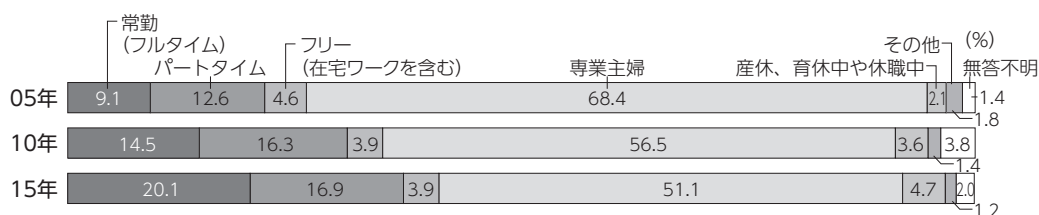
	母親	父親	祖母	祖父	その他	無答不明
95年	98.1	1.6	0.0	0.0	0.0	0.2
00年	98.1	1.0	0.2	0.0	0.1	0.6
05年	98.1	1.2	0.2	0.0	0.1	0.3
10年	97.3	2.1	0.4	0.1	0.0	0.1
15年	94.8	4.5	0.4	0.1	0.0	0.1

図B-1 父親・母親の年齢 (15年)



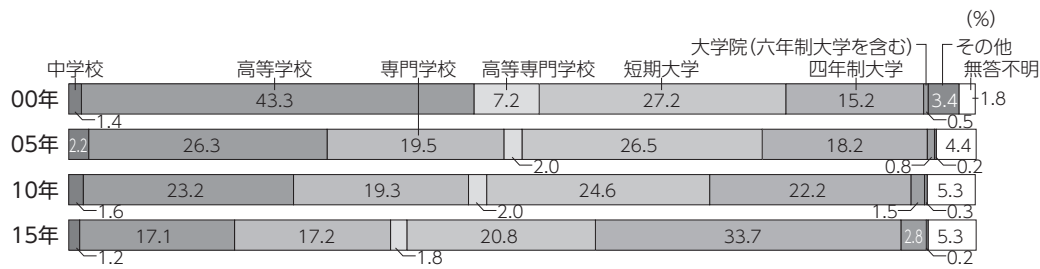
注) 平均年齢について、無答不明の人は、分析から除外している。

図B-2 母親の就業状況



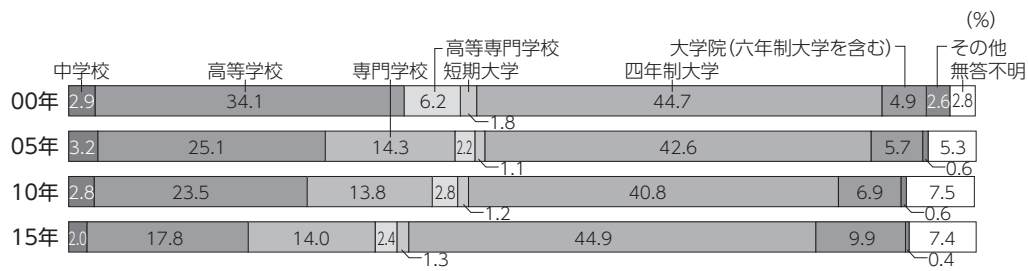
注) 05年調査は、母親のみ回答。10年調査、15年調査は全員回答。

図B-3 母親の最終学歴



注) 00年調査では、「専門学校」はたずねていない。

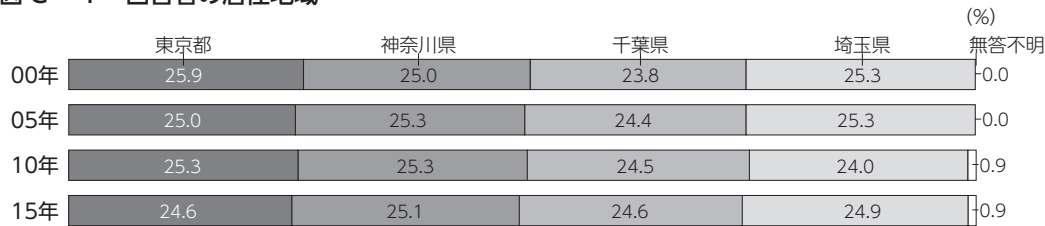
図B-4 父親の最終学歴



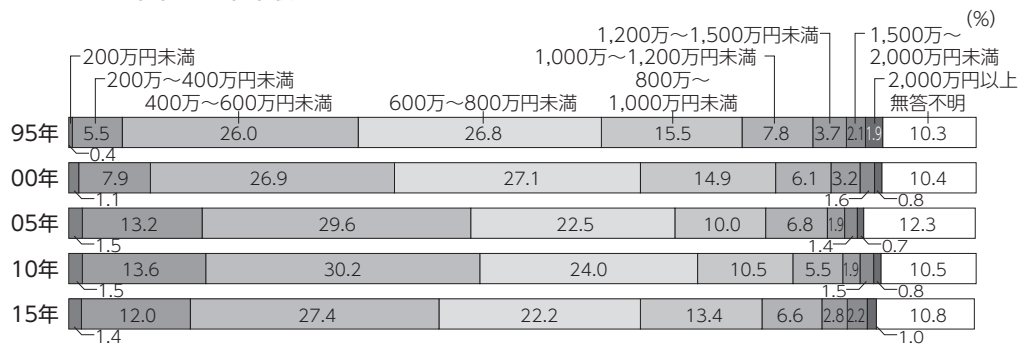
注) 00年調査では、「専門学校」はたずねていない。

C その他

図C-1 回答者の居住地



図C-2 昨年の世帯年収



第1章

幼児の生活



高岡 純子 (1、3～5節)

田村 徳子 (2節)

荒牧 美佐子 (6節)



第1節 生活リズム

20年間で早寝早起き傾向がさらに強まっている。また、幼稚園児、保育園児ともに家を出る時刻は早まる一方であり、園児が家の外で過ごす平均時間は20年間で長くなっている。
この節では睡眠や食事などの基本的な幼児の生活リズムをみていきたい。

●平日の起床時刻は早まっている

はじめに、平日の起床時刻をみてみよう(図1-1-1)。15年では、幼児の3割弱が7時より早い時間に起床している。5年前と比べると「6時半頃」以前の時間帯が増加した。20年間の変化をみてみると、「6時半頃」以前に起きている比率は、95年8.9%、00年10.6%、05年14.4%、10年21.3%、15年28.9%と増加しており、この20年間で幼児はますます早起きになっており、とくにこの10年間でその傾向が強まっていることがわかる。起床時刻を低年齢(1歳6か月～3歳11か月)・高年齢(4歳～6歳11か月)の年齢区分ごとに、就園状況別でみてみよう(表1-1-1)。低年齢では幼稚園児はごくわずかであるため、未就園児と保育園児で比較を、高年齢では未就園児はごくわずかであるため、幼稚園児と保育園児で比較を行う。低年齢では「6時半頃」以前

に起床すると回答した保育園児が42.1%、未就園児が18.6%と保育園児のほうが起床時刻が早かった。高年齢では、保育園児が43.3%に対し、幼稚園児は26.6%と保育園児のほうが早い傾向であった。

●20年間で早寝傾向がみられる

次に就寝時刻をみてみよう(図1-1-2)。15年では「21時頃」から「21時半頃」に就寝する幼児が約半数を占めている。21時台がピークとなる全体傾向は20年間で変わらない。比較的遅いと考えられる「22時頃」以降に寝る幼児の比率を合計してみると、95年32.1%、00年39.0%、05年28.5%、10年23.8%、15年24.0%と20年前からは8.1ポイント、10年前からは4.5ポイント減少しており、この20年間で幼児の早寝が増えてきたことがわかる。年齢区分ごとに、就園状況別で

図1-1-1 平日の起床時刻(経年比較)

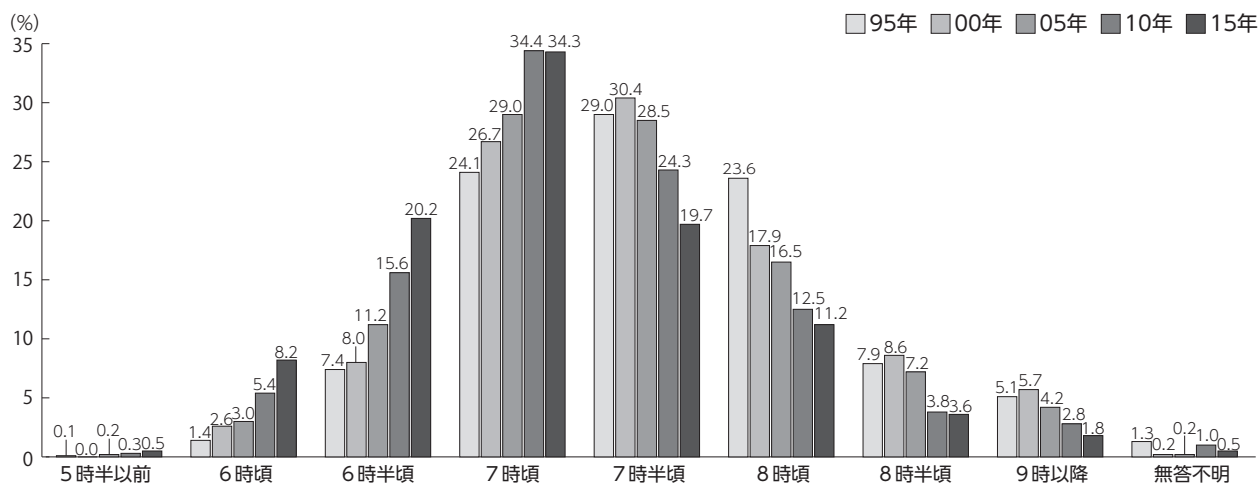


表1-1-1 平日、「6時半頃」以前に起床する割合(年齢区分別・就園状況別 15年)

低年齢		高年齢	
未就園児 (948)	保育園児 (482)	幼稚園児 (1,317)	保育園児 (533)
18.6	42.1	26.6	43.3

注1) ()内はサンプル数。

注2) 「5時半以前+6時頃+6時半頃」の%

注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。

保育園児(低年齢): 1歳6か月～3歳11か月の保育園に通っている幼児。

幼稚園児(高年齢): 4歳～6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢): 4歳～6歳11か月の保育園に通っている幼児。

みてみると(表1-1-2)、低年齢では22時頃以降に就寝すると回答した保育園児が36.2%、未就園児が25.1%と保育園児のほうが就寝時刻が遅く、高年齢では、保育園児が40.5%に対し、幼稚園児は11.1%と保育園児のほうが遅い傾向であった。保育園児は、未就園児・幼稚園児に比べて起床時刻は早く、就寝時刻は遅い傾向

がみられた。

●食事をする時刻の傾向

朝食の時刻を20年間で比べたものが図1-1-3である。起床時間と同様に年々早くなっており、特にここ

図1-1-2 平日の就寝時刻(経年比較)

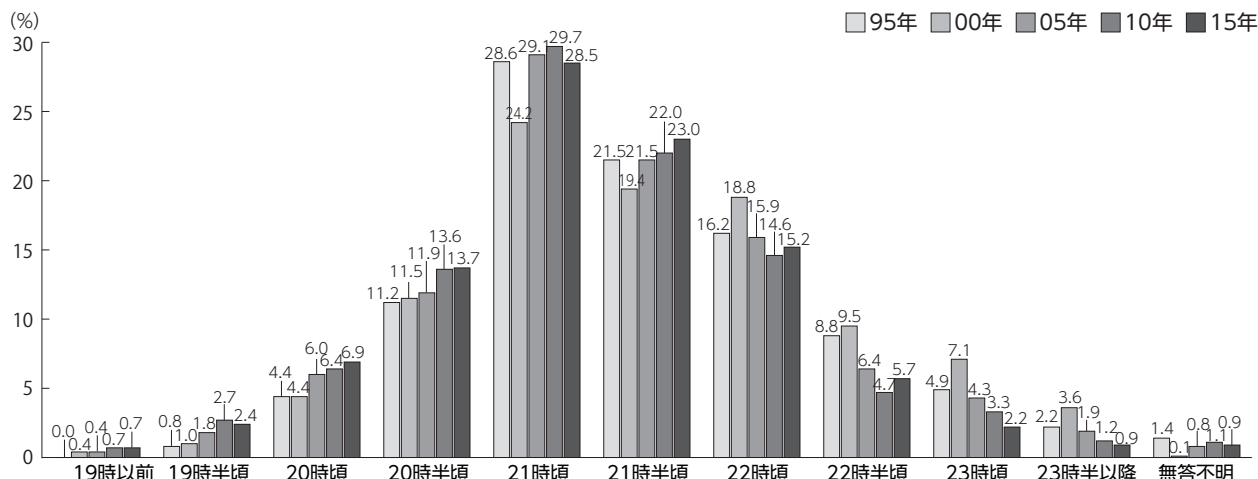


表1-1-2 平日、「22時頃」以降に就寝する割合(年齢区分別・就園状況別 15年)

低年齢		高年齢	
未就園児 (948)	保育園児 (482)	幼稚園児 (1,317)	保育園児 (533)
25.1	36.2	11.1	40.5

注1) ()内はサンプル数。
 注2) 「22時頃+22時半頃+23時頃+23時半以降」の%。
 注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。
 保育園児(低年齢): 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。
 幼稚園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

図1-1-3 平日の朝食時刻(経年比較)

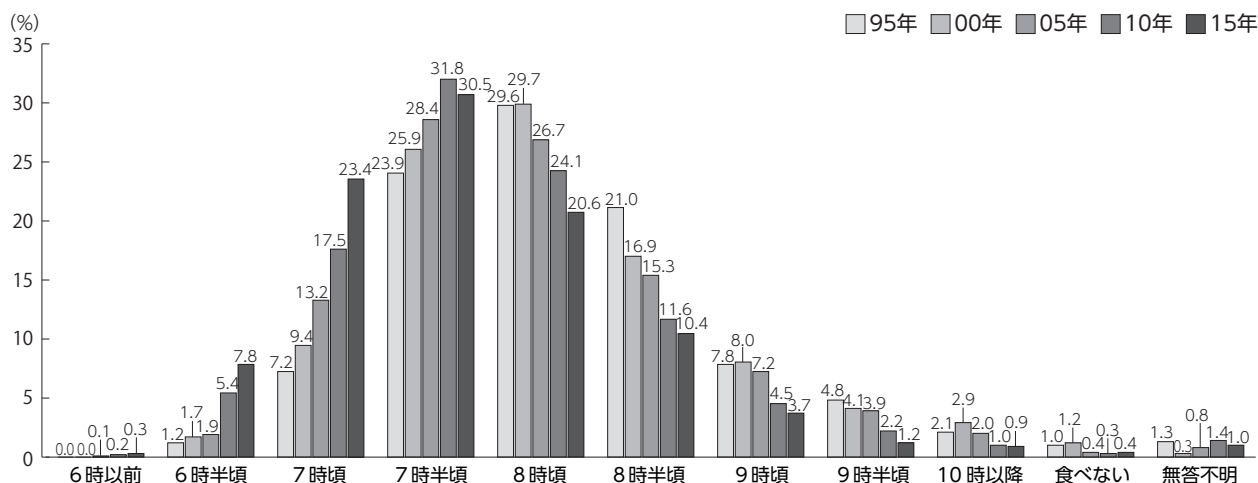


表1-1-3 平日、「7時半頃」以前に朝食をとる割合(年齢区分別・就園状況別 15年)

低年齢		高年齢	
未就園児 (948)	保育園児 (482)	幼稚園児 (1,317)	保育園児 (533)
36.1	82.6	67.8	80.1

注1) ()内はサンプル数。
 注2) 「6時以前+6時半頃+7時頃+7時半頃」の%。
 注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。
 保育園児(低年齢): 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。
 幼稚園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

5年間で比べると「7時頃」で5.9ポイント増加した。「7時半頃」以前に朝食をとる比率を年齢区分別・就園状況別でみると(表1-1-3)、低年齢では保育園児が82.6%、未就園児36.1%、高年齢でも保育園児80.1%、幼稚園児67.8%が「7時半頃」以前に朝食をとることがわかった。起床時刻と同様に多くの保育園児が早い時刻に朝食をとっていることがわかる。

次に、夕食の時刻を20年間で比べたのが図1-1-4である。夕食の時刻は20年間変わらず「18時頃」から「19

時頃」に集中している。15年の調査において「19時半頃」以降に夕食をとる比率を子どもの年齢区分・就園状況別にみてみよう(表1-1-4)。低年齢では保育園児が23.6%、未就園児11.9%、高年齢では保育園児30.5%、幼稚園児9.8%が「19時半頃」以降に夕食をとると回答していた。保育園児のほうが未就園児や幼稚園児にくらべて、朝食が早く、夕食は遅い傾向にあるといえるだろう。

図1-1-4 平日の夕食時刻(経年比較)

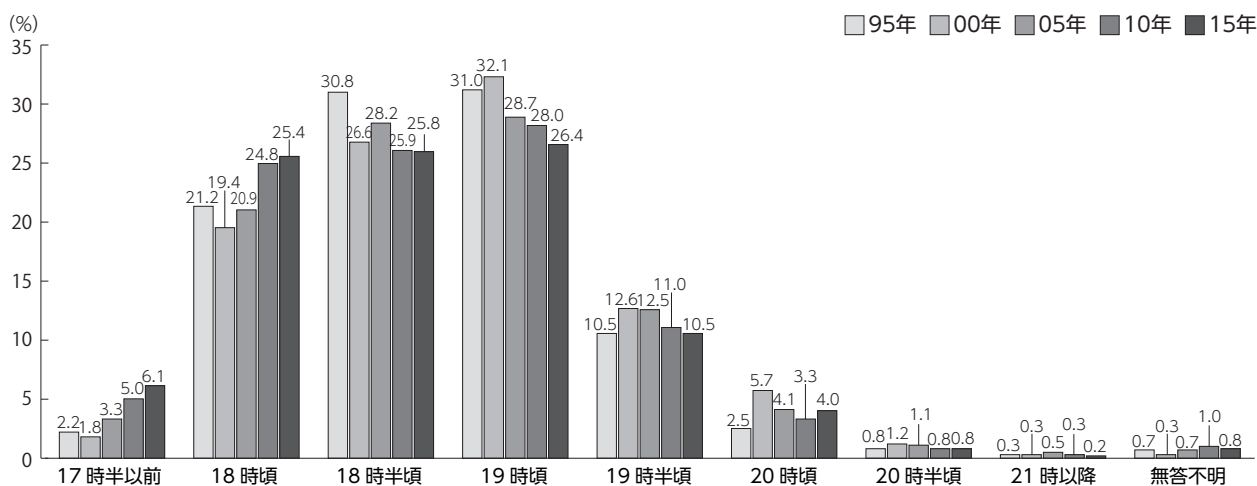


表1-1-4 平日、「19時半頃」以降に夕食をとる割合(年齢区分別・就園状況別 15年)

低年齢		高年齢	
未就園児 (948)	保育園児 (482)	幼稚園児 (1,317)	保育園児 (533)
11.9	23.6	9.8	30.5

注1) ()内はサンプル数。

注2) 「19時半頃+20時頃+20時半頃+21時以降」の%。

注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。

保育園児(低年齢): 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。

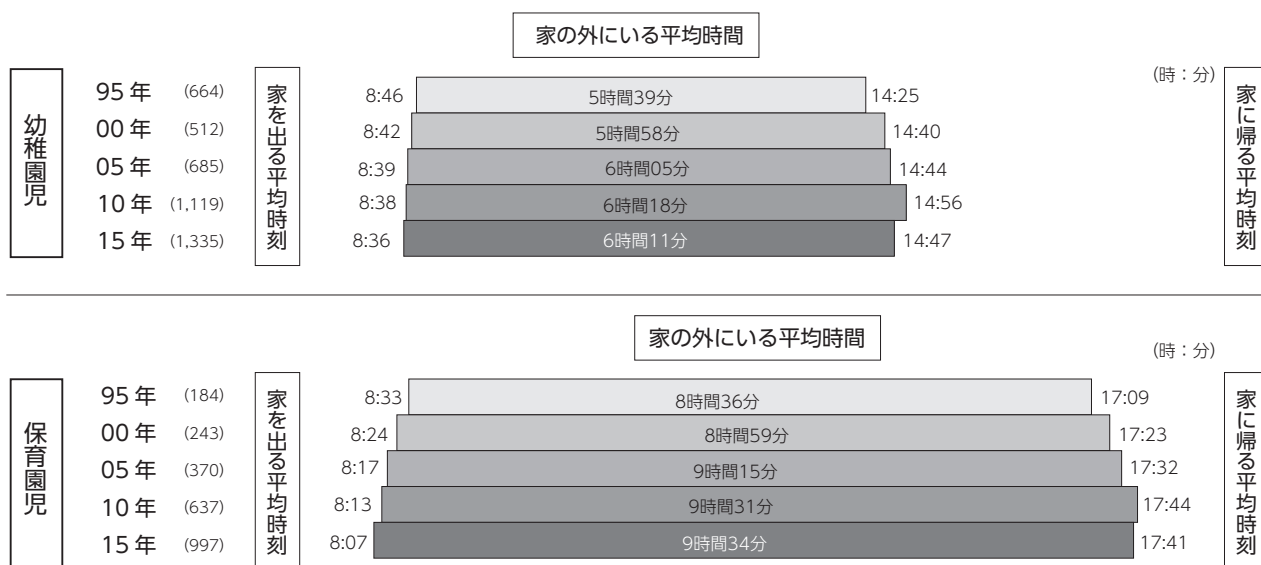
幼稚園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢): 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

●幼稚園児も保育園児も家を出る時刻が早くなっている。

家を出る平均時刻・家に帰る平均時刻と家の外にいる平均時間を就園状況別にまとめたものが図1-1-5である。20年間で、園に向けて家を出る平均時刻は、幼稚園児では10分早くなり、保育園児では26分早くなった。また、家に帰る平均時刻は、幼稚園児では22分、保育園児では32分遅くなった。その結果、家の外にいる平均時間は、幼稚園児は32分長くなり6時間11分に、保育園児は58分長くなり、9時間34分になった。ただし、

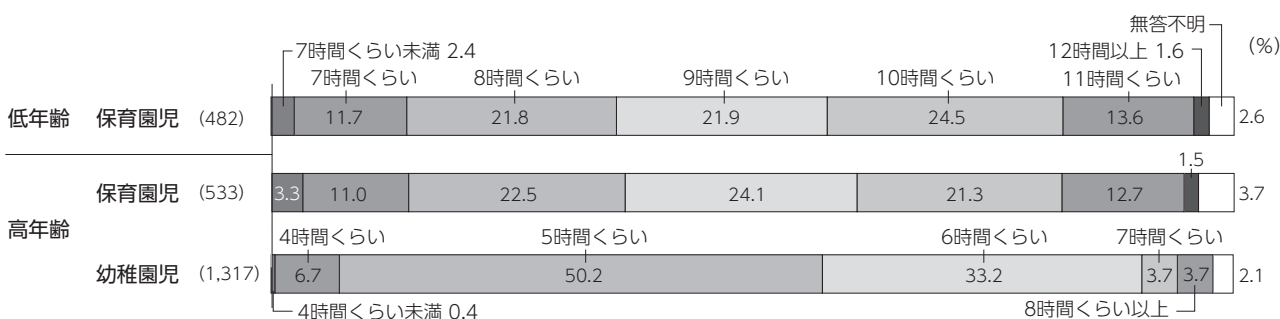
10年から15年にかけては、幼稚園児は若干短くなっている(幼稚園児7分)。20年間で家に帰る時刻が遅くなっている傾向は、就労する母親の増加を背景に、預かり保育や延長保育を実施する園が増加していることも一因だろう。また、園で過ごす平均時間を見てみると(図1-1-6)、保育園児では「8時間くらい」から「10時間くらい」が約7割を占め、幼稚園児では「5時間くらい」(50.2%)と「6時間くらい」(33.2%)で約8割を占めている。また保育園児の14~15%は11時間以上、園で過ごしているようである。

図1-1-5 家を出る・家に帰る平均時刻と家の外にいる平均時間(就園状況別 経年比較)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 家を出る時刻、家に帰る時刻のいずれかの質問に対して無答不明のあった人は、分析から除外している。
 注3) 95年調査は、「18時以降」を18時30分、00年調査以降は、「18時頃」を18時、「18時半頃」を18時30分、「19時以降」を19時と置き換えて算出した。
 注4) 家の外にいる平均時間は、家を出る平均時刻と家に帰る平均時刻から算出した。
 注5) ()内はサンプル数。

図1-1-6 園で過ごす平均時間(年齢区別・就園状況別 15年)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。
 保育園児(低年齢)：1歳6か月～3歳11か月の保育園に通っている幼児。
 幼稚園児(高年齢)：4歳～6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢)：4歳～6歳11か月の保育園に通っている幼児。
 注3) 保育園児について「4時間未満」から「6時間くらい」を「7時間くらい未満」に、幼稚園児について「8時間くらい」から「12時間以上」を「8時間くらい以上」としている。
 注4) ()内はサンプル数



第2節 習い事

習い事をしている比率は5年前と変わらないが、高年齢の保育園児で増加傾向だった。低年齢の未就園児では体を動かすもの、保育園児では通信教育と英会話が多い。一方、高年齢の幼稚園児でサッカーと体操の習い事が多かった。

● 習い事をしている比率は5年前と変わらない

1歳6か月～6歳11か月の幼児が習い事をしている比率は、00年が49.4%、05年が57.5%、10年が47.4%、15年が48.6%だった。05年から10年にかけて10.1ポイント減少し、15年はそこからほぼ横ばいだった(表1-2-1)。

次に、子どもの年齢別にみると、年齢が上がるにつれて習い事をしている比率が増加する傾向は、この20年間で変わらなかった。15年に注目すると、習い事をしている比率は3歳児で29.8%、4歳児で47.9%と18.1ポイント上昇していた。経年で比較しても、4歳児以上では05年に次ぐ高い比率で習い事をしてきた。05年は習い事を始める時期の低年齢化が指摘され、10年は全体的に習い事の減少傾向が指摘された。15年の特徴として、3歳児までの低年齢で習い事をする比率が低く、4歳児以降の高年齢で習い事をしている比率が急激に高

まる傾向がみられた。

● 習い事をしている比率は幼稚園児で高い。高年齢の保育園児で増加傾向

子どもの就園状況で習い事をしている比率に差はあるだろうか。表1-2-2で低年齢(1歳6か月～3歳11か月)をみてみよう。15年で未就園児が習い事をしている比率は28.0%、保育園児は18.9%と9.1ポイントの差があり、未就園児の比率がやや高かった。高年齢(4歳0か月～6歳11か月)になると、15年で幼稚園児が習い事をしている比率は73.0%、保育園児は56.7%と16.3ポイントの差がみられ、幼稚園児のほうが習い事をしている比率が高かった。

10年と15年で変化はあっただろうか。低年齢の未就園児と保育園児、高年齢での幼稚園児において比率に差はみられなかった。一方、高年齢の保育園児では10年

表1-2-1 習い事をしているか(子どもの年齢別 経年比較)

	(%)			
	00年	05年	10年	15年
全体	49.4	57.5	47.4	48.6
1歳後半児	23.3	25.1	17.1	17.0
2歳児	26.8	37.3	24.6	25.7
3歳児	42.0	50.9	37.7	29.8
4歳児	47.2	54.9	45.8	47.9
5歳児	68.6	75.1	67.6	71.4
6歳児	75.7	85.5	76.7	82.7

注1) 習い事を「している」の%。 注2) 1歳後半児は、1歳6か月～1歳11か月の幼児。

表1-2-2 習い事をしているか(子どもの年齢区分別・就園状況別 経年比較)

		(%)	
		10年	15年
低年齢	未就園児	29.7	28.0
	保育園児	19.7	18.9
高年齢	幼稚園児	71.3	73.0
	保育園児	46.9	56.7

注1) 習い事を「している」の%。 注2) 網掛けは、10年と15年を比べて、5ポイント以上差があるもの。

注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。

低年齢: 1歳6か月～3歳11か月の幼児。高年齢: 4歳0か月～6歳11か月の幼児。

注4) サンプル数は以下のとおり。

低年齢: 未就園児10年869人、15年948人。保育園児10年297人、15年482人。高年齢: 幼稚園児10年1,121人、15年1,317人。保育園児10年376人、15年533人。

が46.9%、15年が56.7%と半数を超え、9.8ポイント増加した。就園状況別の特徴として、幼稚園児のほうが保育園児より習い事をする比率が高いが、この5年で高年齢での保育園児に増加傾向があるといえよう。

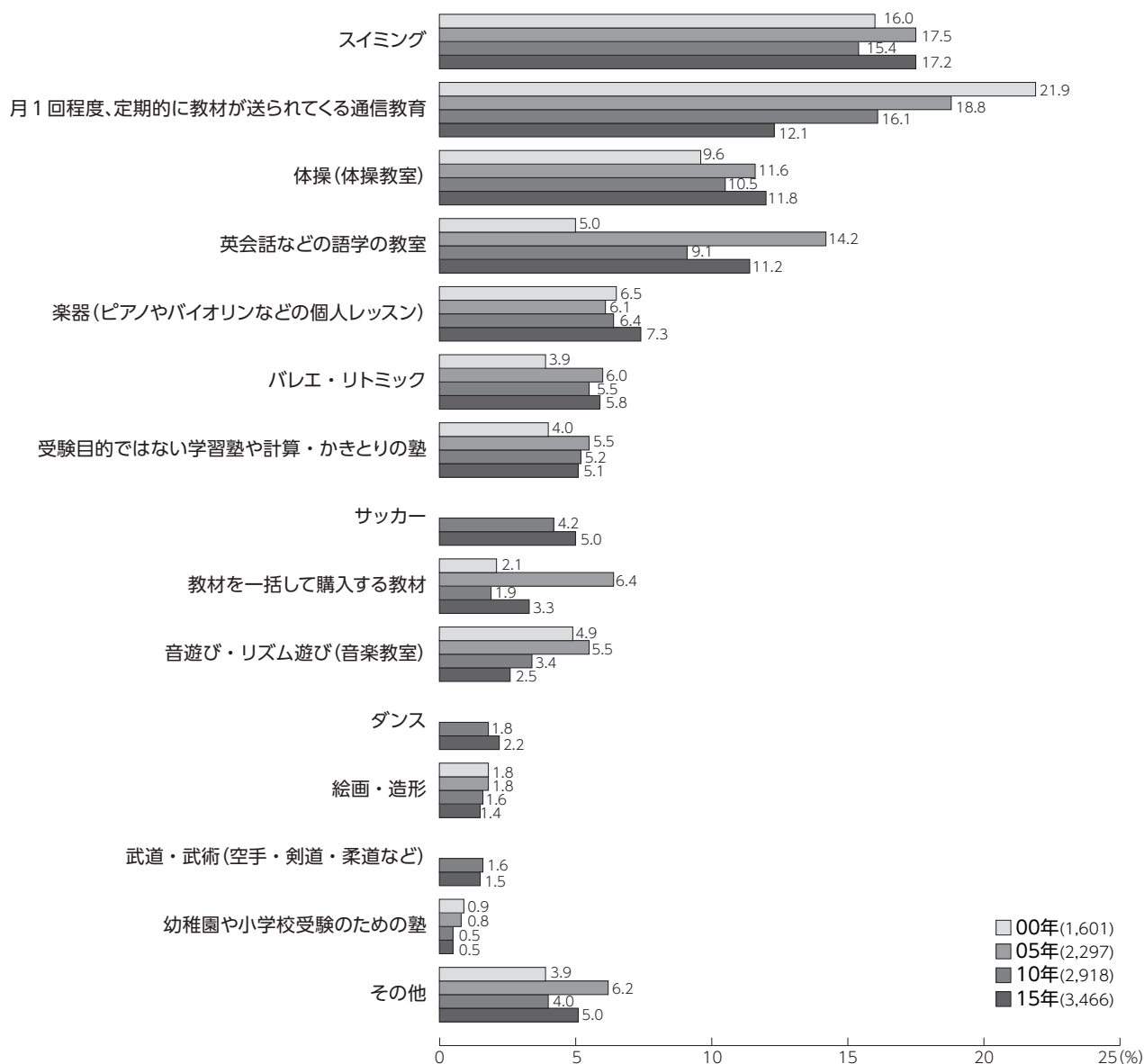
●習い事は、スイミング、通信教育、体操、英会話などの語学の教室が多い

幼児の習い事の種類には、どのような傾向があるか。

10年と15年では、幼稚園・保育園で有料で習っているものと幼稚園・保育園以外で有料で習っているものとに分けてたずねたため、少なくともどちらかで習っていると答えた比率を算出し、20年間の結果をみていきたい。

図1-2-1で15年をみると、多い順に「スイミング」17.2%、「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」12.1%、「体操（体操教室）」11.8%、「英会話などの語学の教室」11.2%だった。05年と10年も順位の入れ替わりはあるが、この4項目の比率が高かった。

図1-2-1 習い事の種類（経年比較）



注1) 複数回答。
 注2) 現在、習い事をしていないと回答した人を含めた全員の回答を母数としている。
 注3) 10年調査以降は、「幼稚園・保育園で有料で習っているもの（保育時間中に習っているものは除く）」と「幼稚園・保育園以外で習っているもの」に分けて、習い事の種類をたずねた。そのため、ここでは少なくともどちらか一方で、習っていると回答した比率を示した。なお、00年調査、05年調査は、どこで習っているかを分けてたずねていない。
 注4) 10年調査で名称を変更した項目、および10年調査以降の項目。05年調査までは「スイミングスクール」→10年調査以降は「スイミング」に変更、同様に「スポーツクラブ・体操教室」→「体操（体操教室）」、「絵画の教室」→「絵画・造形」、「幼児向けの音楽教室」→「音遊び・リズム遊び（音楽教室）」、「バレエ・リトミック」→「バレエ」「リトミック」（集計は経年比較するために合算）。「サッカー」「ダンス」「武道・武術（空手・剣道・柔道など）」は10年調査以降の項目。
 注5) ()内はサンプル数。

●低年齢の未就園児では体を動かすもの、
保育園児では通信教育と英会話が多い

15年を子どもの就園状況別にみた。表1-2-3をみると、低年齢（1歳6か月～3歳11か月）の場合、未就園児では体を動かすもの（「バレエ・リトミック」、「スイミング」、「体操」）と「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」、「英会話などの語学の教室」の比率が高かった。保育園児では「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」、「英会話などの語学の教室」の比率が高く、次いでスポーツ系の習い事をしていった。高年齢（4歳0か月～6歳11か月）の場合、幼稚園児、保育園児ともに「スイミング」の比率がもっとも高かった。次いで、幼稚園児では「体操」、「英会話などの語学

の教室」、「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」、「楽器」の順に並んだ。一方、保育園児では低年齢の場合と同様に「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」、「英会話などの語学教室」が高い比率で続き、「楽器」、「体操」の順に並んだ。

低年齢について、未就園児では体を動かすもの、保育園児では通信教育や英会話教室を習い事を選ぶ傾向があるようだ。高年齢になると幼稚園児で習い事をする比率が増加し、スイミングや体操といった体を動かすものに加えて、英会話や通信教育、楽器も習っていた。保育園児でも幼稚園児ほどではないが習い事をする比率が増え、低年齢で選ばれていた通信教育や英会話教室に加えて、スイミングや楽器も習っていた。

表1-2-3 習い事をしているか（子どもの年齢区分別・就園状況別 15年）

(%)

未就園児 (948)			保育園児 (482)		
低年齢	1. バレエ・リトミック	8.6	低年齢	1. 通信教育	6.7
	2. 通信教育	7.5		2. 英会話	4.5
	3. スイミング	6.3		3. スイミング	4.0
	4. 体操	5.0		4. バレエ・リトミック	2.5
	5. 英会話	4.2		4. 一括購入する教材	2.5
	習い事をしていない	70.1		習い事をしていない	79.4
幼稚園児 (1,317)			保育園児 (533)		
高年齢	1. スイミング	29.3	高年齢	1. スイミング	22.2
	2. 体操	23.2		2. 通信教育	14.1
	3. 英会話	18.7		3. 英会話	12.5
	4. 通信教育	16.6		4. 楽器	10.8
	5. 楽器	13.8		5. 体操	8.1
	習い事をしていない	26.6		習い事をしていない	43.1

注1) 複数回答。

注2) 「その他」を含む16項目の中から上位5項目を掲載。

注3) 現在、習い事をしていないと回答した人を含めた全員の回答を母数としている。

注4) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。

低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。

注5) () 内はサンプル数。

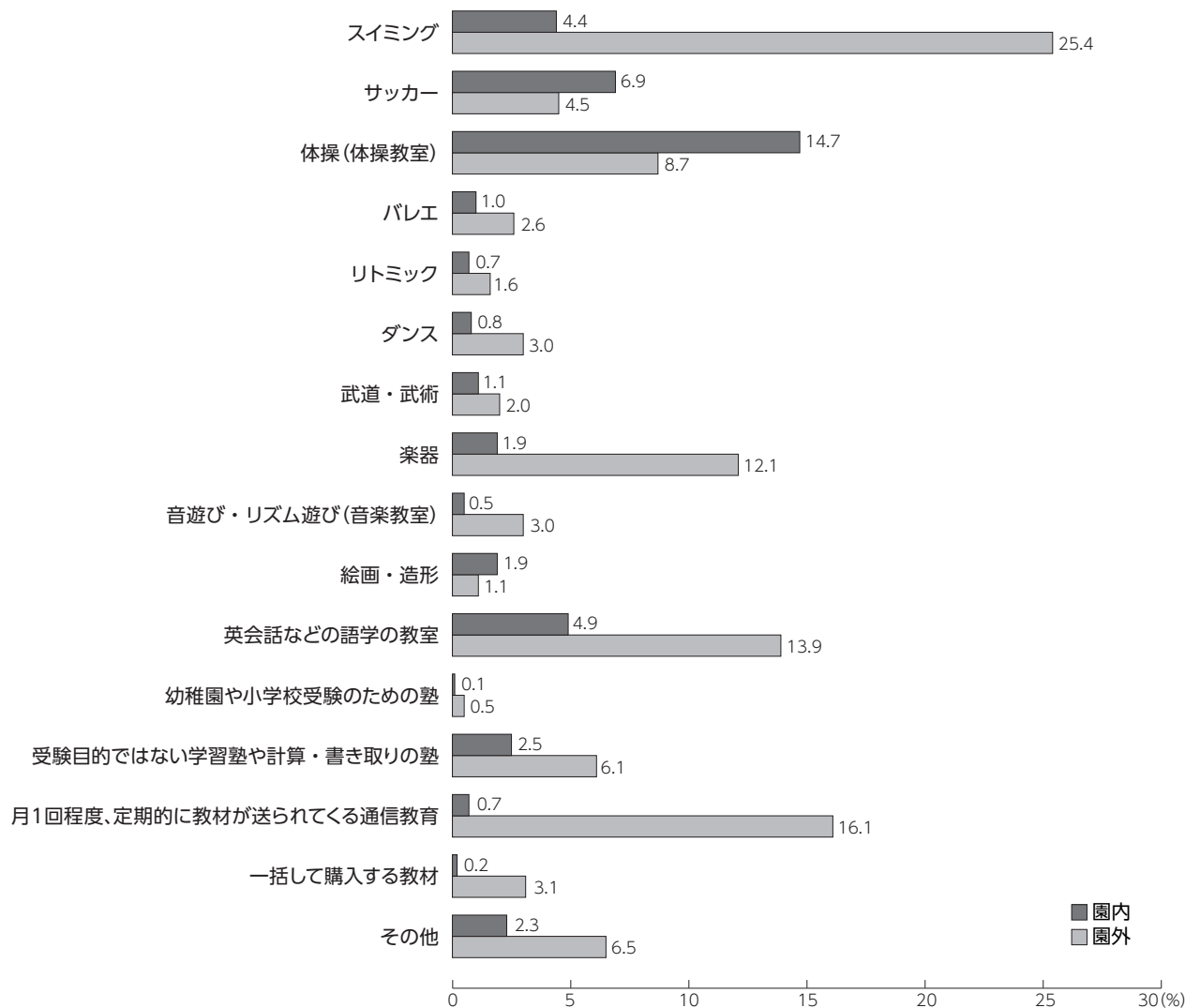
●幼稚園児で、園内の習い事として体操とサッカーが多い。園外では、スイミング、通信教材、英会話などの語学の習い事、楽器が多い。

高年齢の幼稚園児と保育園児の習い事について分析した。図1-2-2は、幼稚園児の園内と園外の有料の習い事についての結果である。

園内で習っている比率が高かったのは、「体操」

14.7%、「サッカー」6.9%だった。これは園外で習うよりも高い比率であり、保育園児と比べても高い比率だった。幼稚園内で体操とサッカーの習い事が多い様子がうかがえる。園外で習っている比率が高かったのは、「スイミング」25.4%、「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」16.1%、「英会話などの語学の教室」13.9%、「楽器」12.1%だった。

図1-2-2 習い事の種類 (幼稚園児・園内外別 高年齢 15年)



注1) 複数回答。
 注2) 現在、習い事をしていないと回答した人を含めた幼稚園に通う人全員の回答を母数としている。
 注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注4) サンプル数は、1,317人。

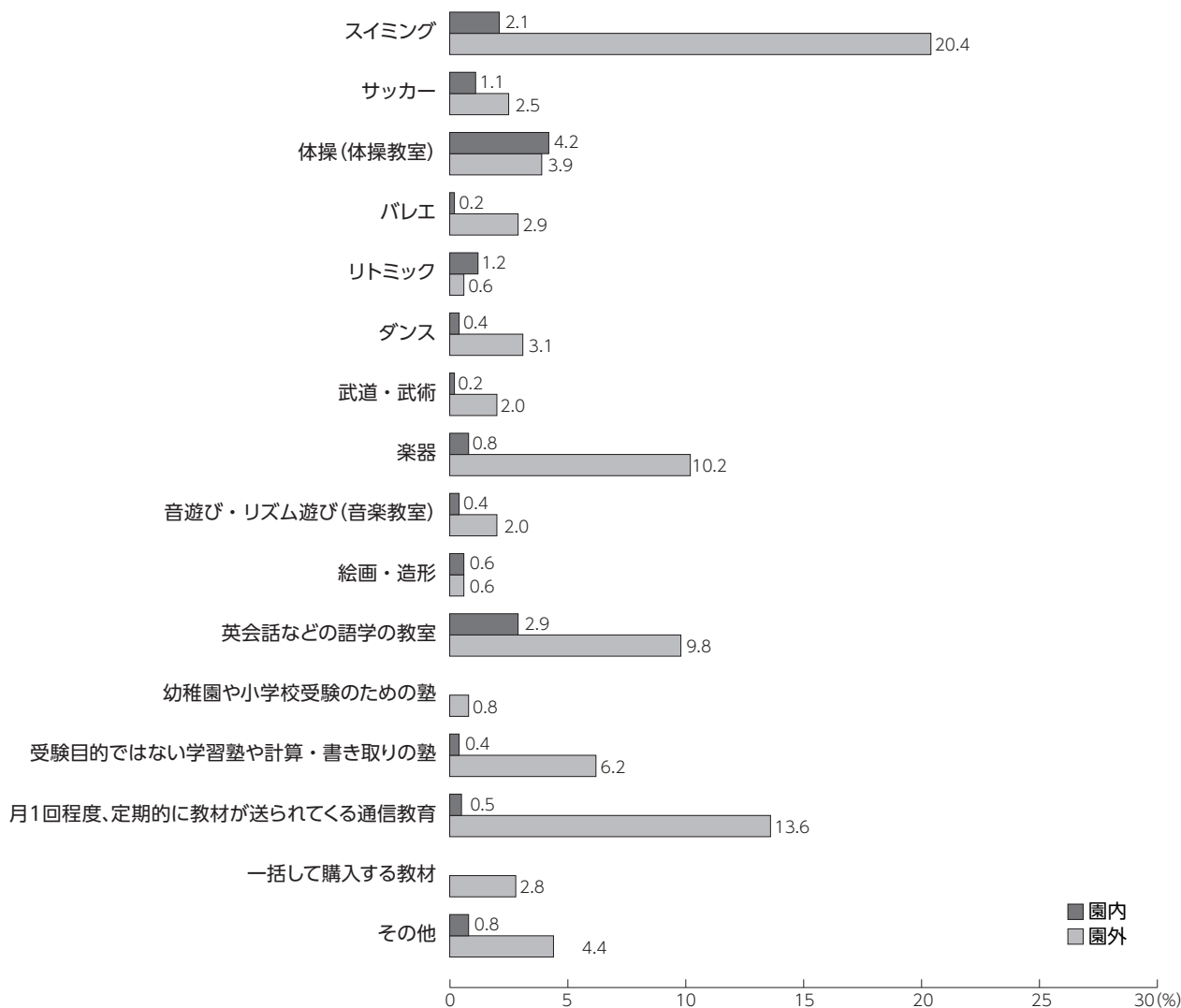
●保育園児で、園内の習い事はいずれも5%以下と少ない。園外では、スイミング、通信教材、英会話などの語学の習い事、楽器が多い。

図1-2-3は、保育園児（高学年）の園内と園外の有料の習い事についての結果である。

園内で習っている比率は、いずれの項目も5%以下であり、保育園児の場合、園内で有料の習い事をあまりしていない様子が見られる。一方、園外で習っている比率が

高かったのは、「スイミング」20.4%、「月1回程度、定期的に教材が送られてくる通信教育」13.6%、「英会話などの語学の教室」9.8%、「楽器」10.2%だった。幼稚園児と保育園児で習う比率の差が5ポイント以上だったのは「スイミング」（幼稚園児25.4%、保育園児20.4%）のみであり、それ以外の項目で差はみられなかった。保育園児の場合、在園時間が長い傾向であることから、園外の習い事を行っている比率が低いと思われたが、幼稚園児とあまり差がみられなかった。

図1-2-3 習い事の種類（保育園児・園内外別 高年齢 15年）



注1) 複数回答。
 注2) 現在、習い事をしていないと回答した人を含めた保育園に通う人全員の回答を母数としている。
 注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注4) サンプル数は、533人。



第3節 家にあるもの

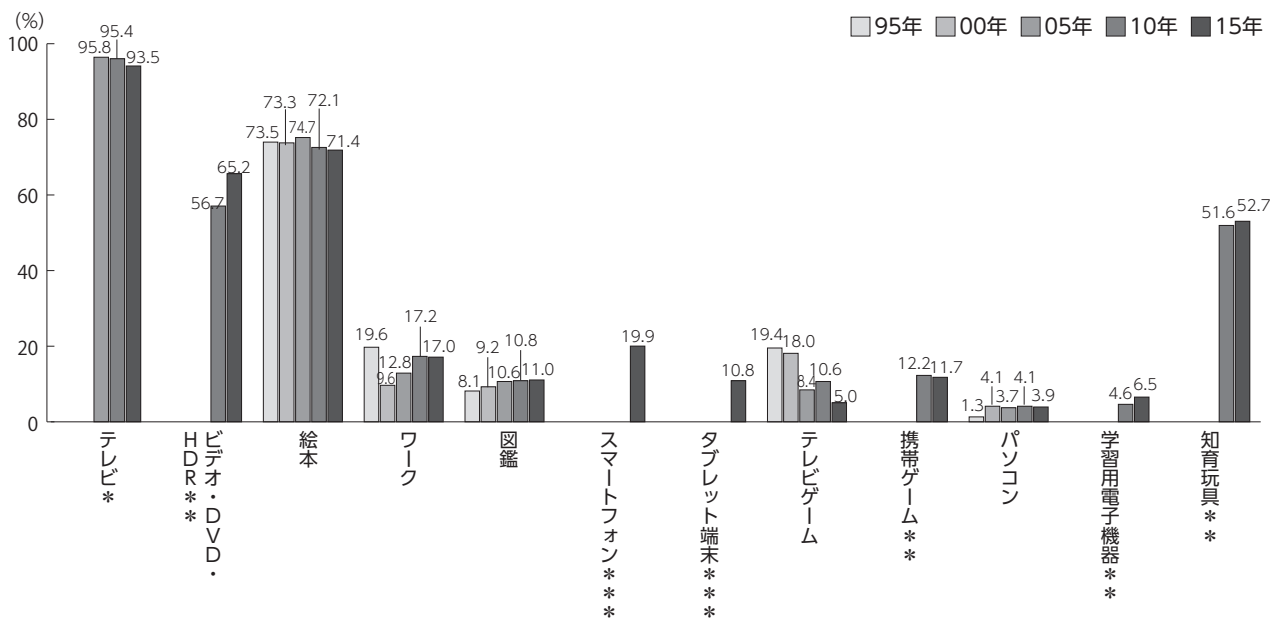
家にあるものをみると、「絵本」「テレビ」などの古くからあるものがよく使われ続けている。「ワーク」を使う頻度が15年間でやや増えた一方で、「テレビゲーム」は20年間で減少している。母親と使う頻度では「ワーク」「図鑑」が増加している。新しいメディアである「スマートフォン」は15年調査において母親と一緒に使う比率が約3割に達していた。

●家にあるものを使う頻度

この節では、幼児の家にあるものと、それを使う頻度、一緒に使う人についての変化をみてみたい。経年での使用頻度の変化を見ると(図1-3-1)、もっとも頻度が高いものはテレビ、次いで絵本であるが、どちらも過去と比較して使用頻度に大きな変化はみられない。一方、

使用頻度が減少しているのはテレビゲームである。95年に19.4%であったが15年に5.0%となり20年間で14.4ポイント減少した。微増したのはワークである。95年から00年にかけては低下したが、それ以降増加傾向となり、00年9.6%、15年17.0%で7.4ポイント増加した。スマートフォンは15年のみの数値であるが19.9%であった。

図1-3-1 家にあるものを使う頻度(経年比較)



注1) 「ほとんど毎日+週に3~4日」の%。

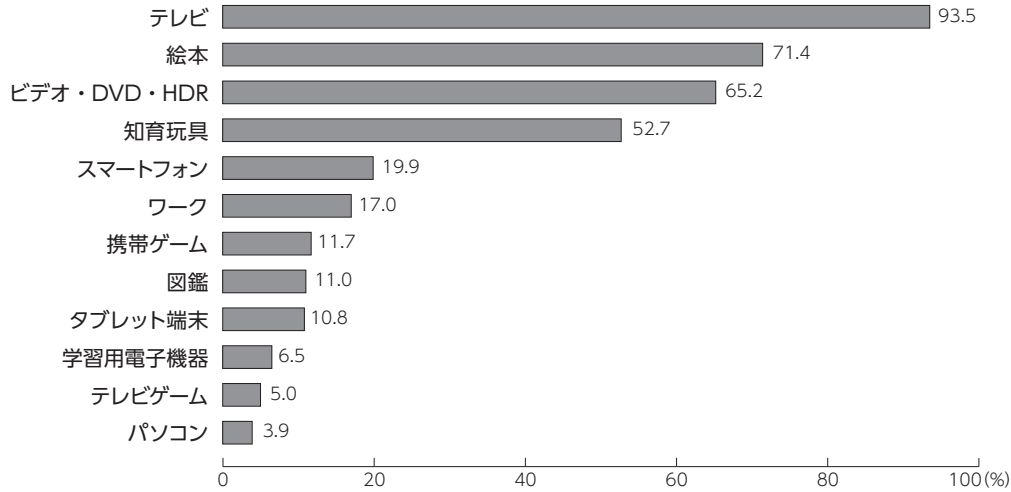
注2) 「*」は05年、10年、15年のみの項目、「**」は10年、15年のみの項目、「***」は15年のみの項目。

注3) HDR: ハードディスクレコーダーの略。

15年のみの使用頻度をみたまものが図1-3-2である。頻度の高い順に、テレビ93.5%、絵本71.4%、ビデオ・DVD・HDR65.2%、知育玩具52.7%である。その他のものはいずれも高頻度で使用する家庭が2割以下であるが、スマートフォンが19.9%と携帯ゲーム11.7%よりも高くなっている。

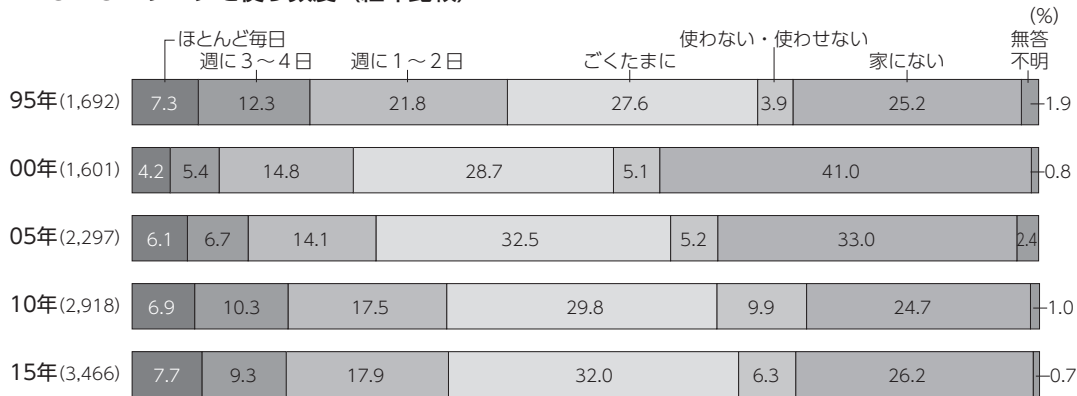
この20年間で変化があった「ワーク」「テレビゲーム」の使用頻度をみたまものが図1-3-3,4である。「ワーク」の使用頻度は、00年調査から徐々に増加している。「家がない」比率が00年から15年にかけて14.8ポイント減少した。また「テレビゲーム」は、「使わない、使わせない」「家がない」比率が増加し15年調査では合わせ

図1-3-2 家にあるものを使う頻度 (15年)



注) 「ほとんど毎日+週に3~4日」の%。

図1-3-3 ワークを使う頻度 (経年比較)

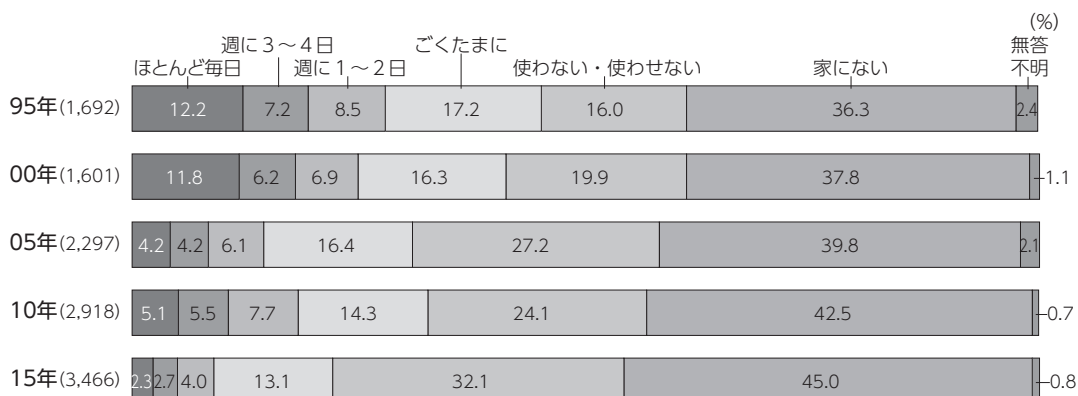


注1) 「使わない・使わせない」は、95年、00年調査では「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない」を、05年調査では「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない・見せない」を合計した数値となっている。

注2) 10年調査では「ぜんぜん使わない・使わせない」になっている。

注3) ()内はサンプル数。

図1-3-4 テレビゲームを使う頻度 (経年比較)



注1) 「使わない・使わせない」は、95年、00年調査では「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない」を、05年調査では「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない・見せない」を合計した数値となっている。

注2) 10年調査では「ぜんぜん使わない・使わせない」になっている。

注3) ()内はサンプル数。

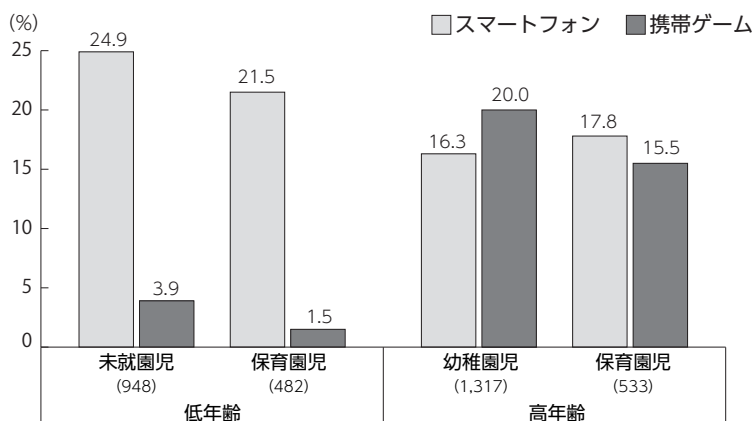
て77.1%となっている。「ほとんど毎日」「週に3~4日」「週に1~2日」を合わせると、95年は27.9%、15年は9.0%と18.9ポイント減少している。

図1-3-5は、15年の調査で子どもの年齢区分別・就園状況別にスマートフォンと携帯ゲームの使用頻度をみたものである。スマートフォンの使用頻度は低年齢児が高く、携帯ゲームは逆に高年齢児が高くなっている。とくに低年齢の未就園児では、約4人に1人が週に3~4日以上の頻度でスマートフォンを使っている。

●母親と一緒に使う頻度が高いのは「絵本」

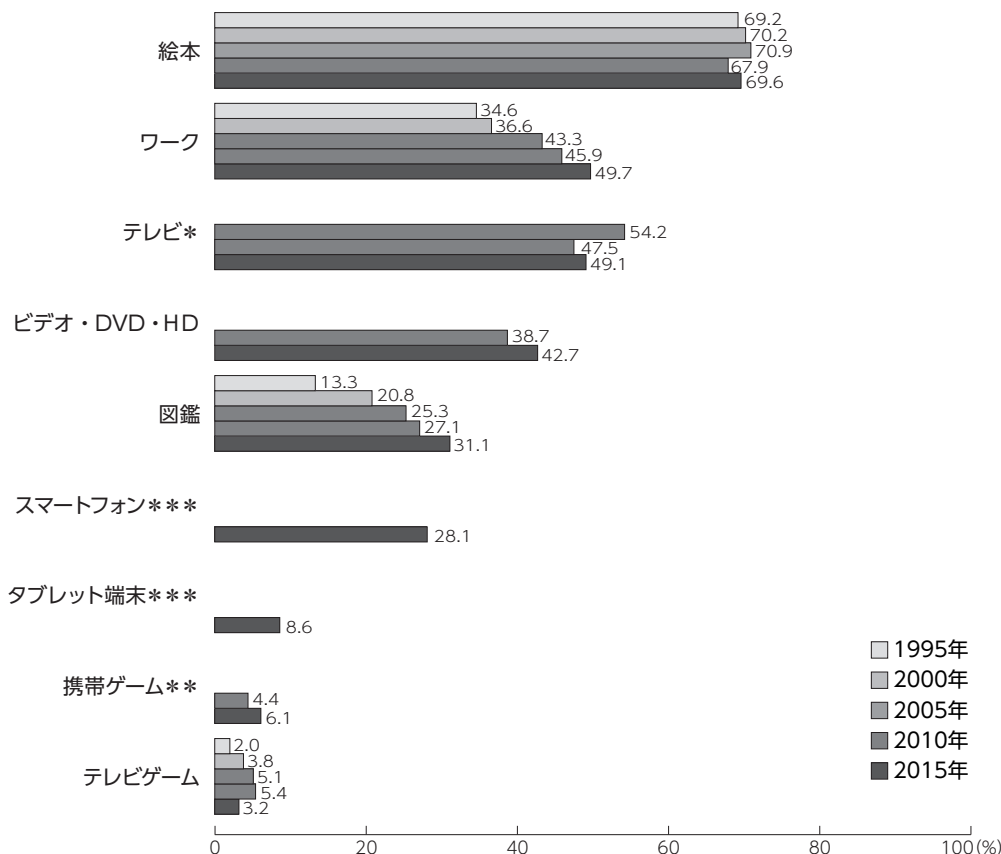
一緒に使う人でもっとも多い母親の比率をみたものが図1-3-6である。「絵本」は20年間で一貫してもっとも高く、7割程度である。母親と一緒に使う比率が20年間で増加したものが「ワーク」と「図鑑」である。「ワーク」は、95年34.6%、00年36.6%、05年43.3%、10年45.9%、15年49.7%で、20年間で15.1ポイント増加した。「図鑑」も同様に増加の傾向で、20年間で17.8ポイント増加している。テレビやビデオ・DVD・HDRは4割~5割程度、スマートフォンは28.1%であった。

図1-3-5 スマートフォンと携帯ゲームの使用頻度 (年齢区分別・就園状況別 15年)



注1) 「ほとんど毎日+週に3~4日」の%。
 注2) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。
 保育園児 (低年齢) : 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。幼稚園児 (高年齢) : 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児 (高年齢) : 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。
 注3) () 内はサンプル数。

図1-3-6 母親と一緒に使う頻度 (経年比較)



注1) 「ほとんど毎日+週に3~4日」の%。
 注2) [*]は05年、10年、15年のみの項目、[**]は10年、15年のみの項目、[***]は15年のみの項目。



第4節 メディアとのかかわり

テレビを1日2時間以上みている乳幼児は約5割、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーは約2割である。メディアを一人で操作できる比率では、3歳児ではスマートフォンが約4割、ビデオ・DVD・HDRが約3割であり、6歳児ではスマートフォンが約5割、ビデオ・DVD・HDRが約7割である。

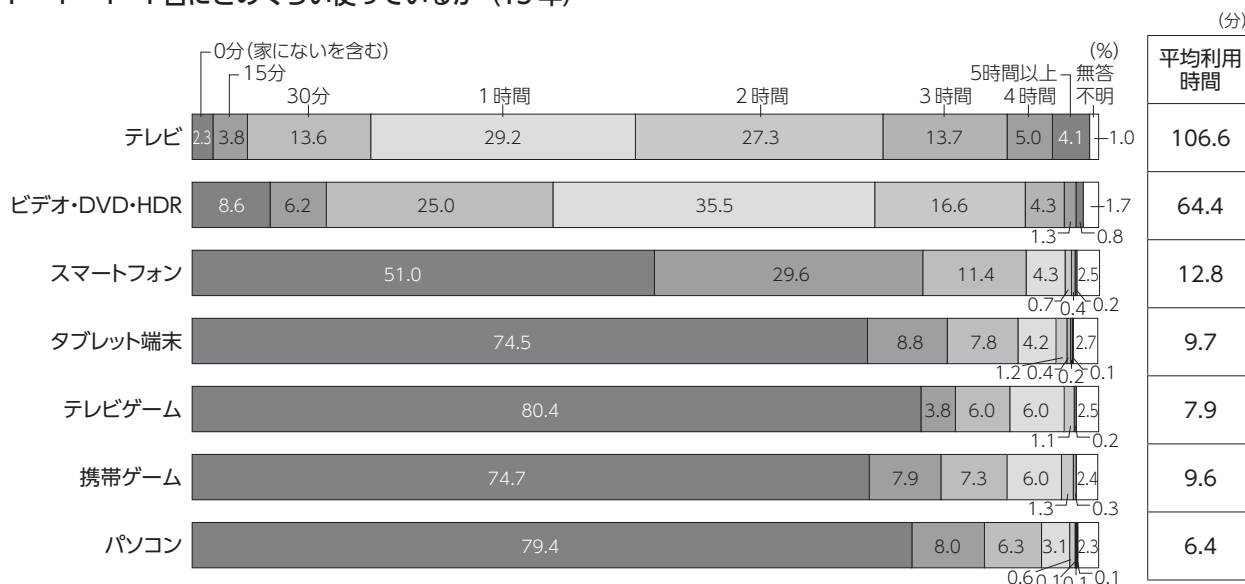
●家にあるものを使う頻度

この節では、テレビ、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー（以下、ビデオ・DVD・HDRと表示）などの電子メディアの使用についてみてみたい。メディアの1日あたりの視聴時間についてみたものが図1-4-1である。テレビの1日の視聴時間は、「1時間」がもっとも多く約3割である。ビデオ・DVD・HDRでは、「1時間」がもっとも多く、35.5%である。スマートフォン、タブレット端末、テレビゲーム、携帯ゲーム、パソコンでは「0分（家がないを含む）」がもっとも多く、スマー

トフォンでは約5割、他では7~8割を占めている。1日あたりの15年の平均時間をみると、テレビが106.6分、ビデオ・DVD・HDRが64.4分となっている。10年の視聴平均時間（テレビ127.0分、ビデオ・DVD・HDR65.9分）よりもやや減少傾向にあった。

視聴時間は、幼児の年齢や生活スタイルに大きな影響を受けると考えられるため、子どもの年齢区分別・就園状況別にみてみよう。ビデオ・DVD・HDRでは（図1-4-2）、1日3時間以上の視聴はどのグループでも1割以下であるが、2時間以上の視聴では、低年齢未就園児31.7%、低年齢保育園児16.4%、高年齢幼稚園児

図1-4-1 1日にどのくらい使っているか（15年）



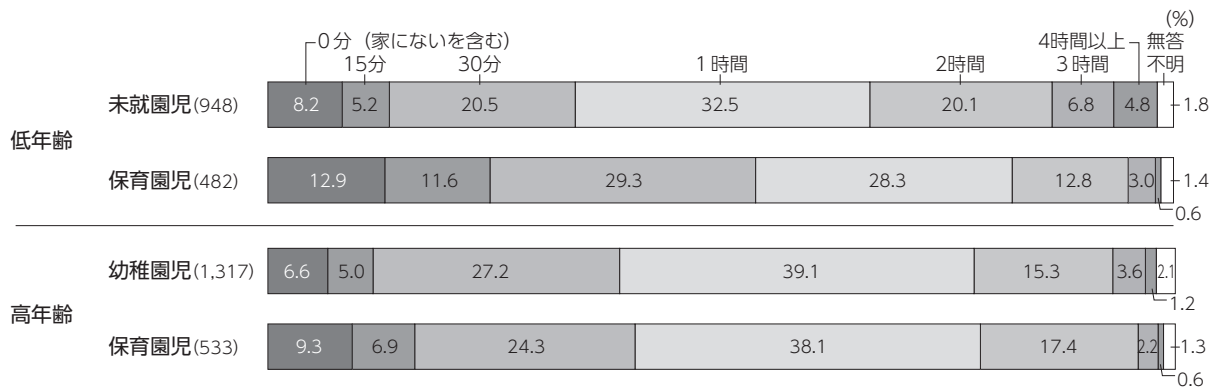
注1) 「5時間以上」は「5時間+5時間より多い」の%。

注2) 平均利用時間は「0分（家がないを含む）」を0分、「5時間」を300分、「5時間より多い」を360分のように置き換えて算出した。

20.1%、高年齢保育園児20.2%であり、低年齢未就園児がもっとも長い。保育園児や幼稚園児は、園にいる時間帯以外の朝と降園後に視聴が限られるが、未就園児にはそのような制約がなく視聴時間帯が自由なため長くなっていると考えられる。図1-4-3は、スマートフォ

ンを年齢区分別・就園状況別にみたものである。いずれも0分が約半数を占めている。年齢や就園状況にかかわらず、1日15分の使用が約3割、30分の使用が約1割である。1日1時間の使用も5%弱となっている。

図1-4-2 ビデオ・DVD・HDRを1日どのくらい使っているか (年齢区分別・就園状況別 15年)



注1) [4時間以上]は[4時間+5時間+5時間より多い]の%。

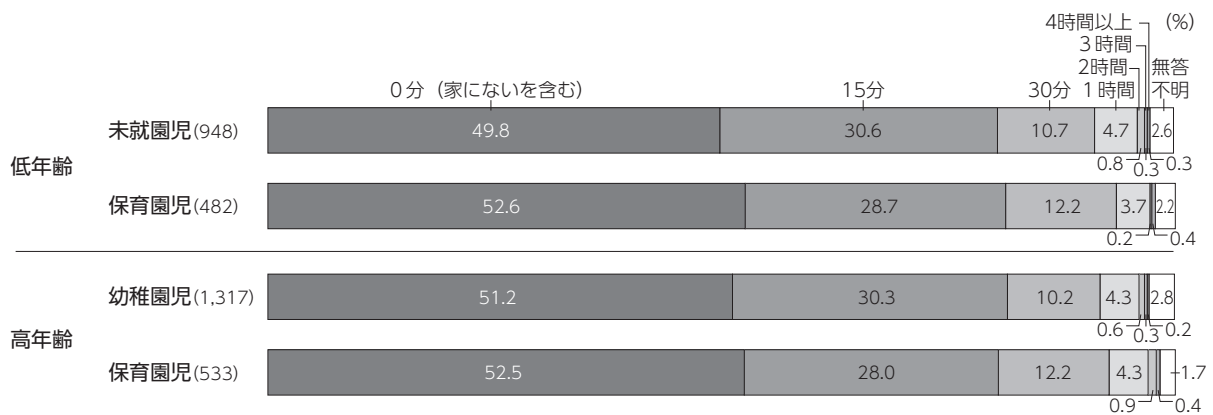
注2) ()内はサンプル数。

注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。

保育園児 (低年齢) : 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。

幼稚園児 (高年齢) : 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児 (高年齢) : 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

図1-4-3 スマートフォンを1日どのくらい使っているか (年齢区分別・就園状況別 15年)



注1) [4時間以上]は[4時間+5時間+5時間より多い]の%。

注2) ()内はサンプル数。

注3) 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。

保育園児 (低年齢) : 1歳6か月~3歳11か月の保育園に通っている幼児。

幼稚園児 (高年齢) : 4歳~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児 (高年齢) : 4歳~6歳11か月の保育園に通っている幼児。

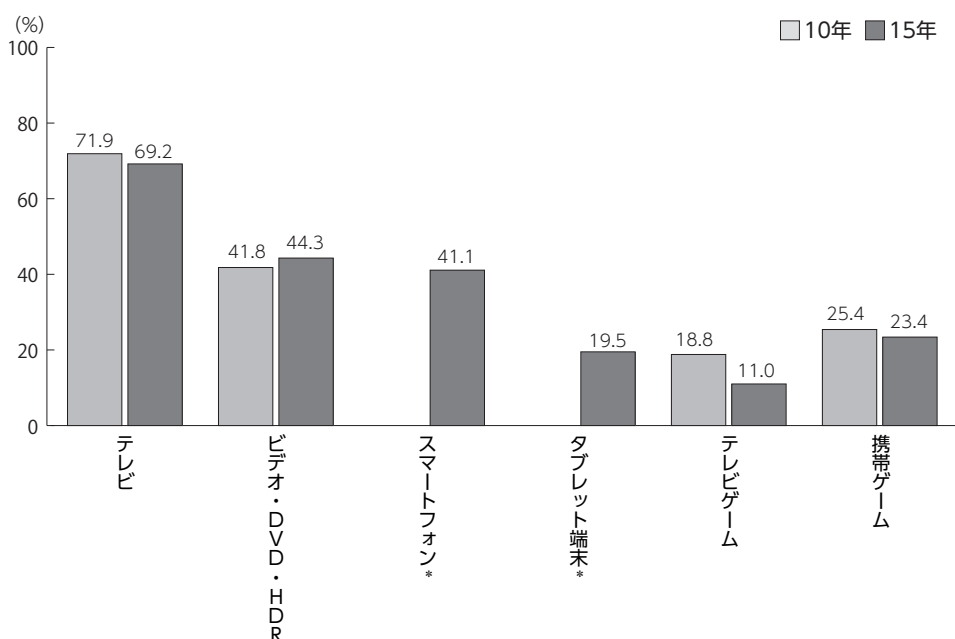
●メディアを一人で操作できる比率

次に、メディアを一人で操作できる比率について10年と15年の比較をみてみよう(図1-4-4)。子どもが一人で操作できる比率は、テレビ約7割、ビデオ・DVD・HDR約4割、携帯ゲーム約2.5割で、5年間の変化はほとんどみられない。テレビゲームは減少傾向で10年18.8%、15年11.0%と7.8ポイント減少している。スマートフォンは、41.1%(15年のみ)でビデオ・DVD・HDRとほぼ同率である。タブレット端末は約2割となっている。

メディアを一人で操作できる比率を年齢別にみたもの

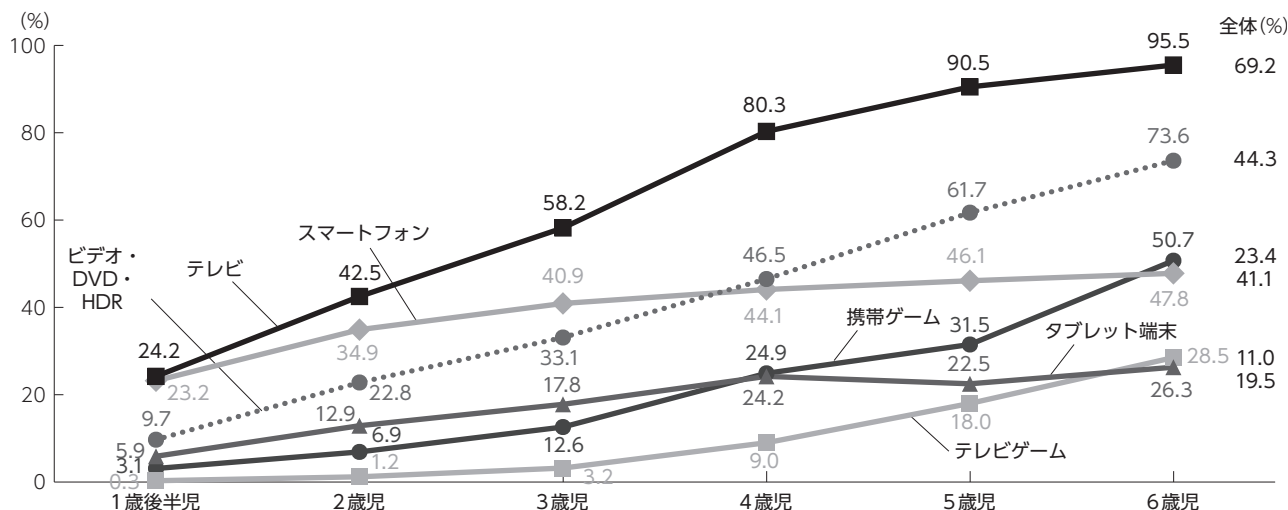
が図1-4-5である。すべての年齢で比率が高いのはテレビであり、1歳後半児で24.2%が一人で操作ができる。6歳児では95.5%となる。スマートフォンは、低年齢ではテレビに次いで一人で操作ができる比率が高い。1歳後半児で23.2%、2歳児34.9%、3歳児で40.9%と増加し、4歳児以降は4割台にとどまる。ビデオ・DVD・HDRは、1歳後半児は9.7%であるが年齢とともに増加し、3歳児で33.1%、6歳児では73.6%になる。携帯ゲームは4歳児以降で比率が高くなり、6歳児で半数を超える(4歳児24.9%、5歳児31.5%、6歳児50.7%)。

図1-4-4 メディアを自分一人で操作できる比率(10年、15年比較)



注1) 複数回答。
注2) 「*」は15年調査のみの項目。

図1-4-5 自分一人で操作できる割合(年齢別 15年)



注1) 複数回答。
注2) 1歳後半児は1歳6か月～1歳11か月の幼児。



第5節 幼児の遊び

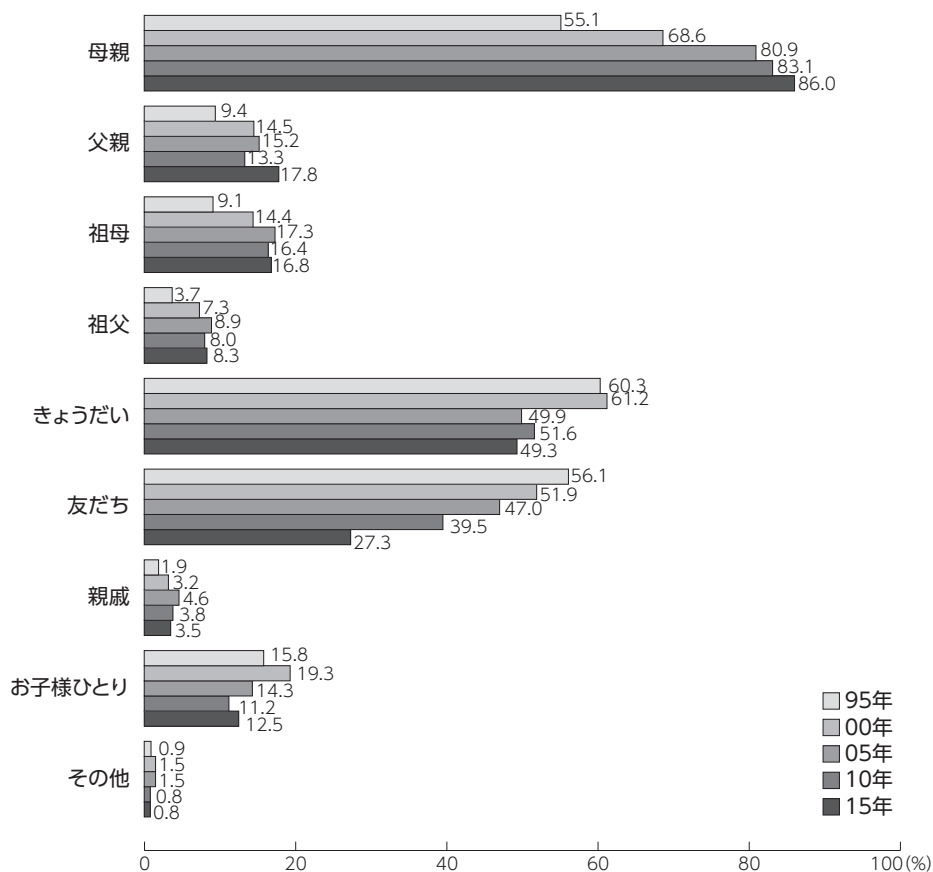
20年間を通して平日、幼稚園・保育園以外で「母親」と一緒に遊ぶ比率が増え、友だち、きょうだいと一緒に遊ぶ比率が減少している。また、幼児のよくする遊びでは、「公園の遊具(すべりだい、ブランコなど)を使った遊び」、「つみ木、ブロック」「人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び」であり、20年間で大きな変化はみられない。

●平日「母親」と一緒に遊ぶ比率が増加

平日、幼稚園・保育園以外で遊ぶときにだれと一緒にいる場合が多かたずねたところ15年でもっとも比率が高いのは「母親」86.0%であり、次いで「きょうだい」49.3%、「友だち」27.3%であった(図1-5-1)。20年間の変化をみると、「母親」が増加しており、95年55.1%、00年68.6%、05年80.9%、10年83.1%、15年86.0%と20年間で30.9ポイント増加している。一方、「友だち」と回答した比率は減少し続けており(95年

56.1%、00年51.9%、05年47.0%、10年39.5%、15年27.3%)、20年間で28.8ポイント減少した。この背景として、共働きの増加により保育園児が増えていることや幼稚園児、保育園児ともに登園のために家の外にいる時間が年々長くなっており、園以外の場所で友だちと遊ぶ時間が減っていることが考えられる。また「きょうだい」と回答した比率をみると、20年間で11.0ポイント減少している。これはこの調査の中で、1人っ子の比率が20年間で15.2ポイント増加したことが影響していると考えられる(10ページの子どもの属性を参照)。

図1-5-1 平日、幼稚園・保育園以外で一緒に遊ぶ相手(経年比較)



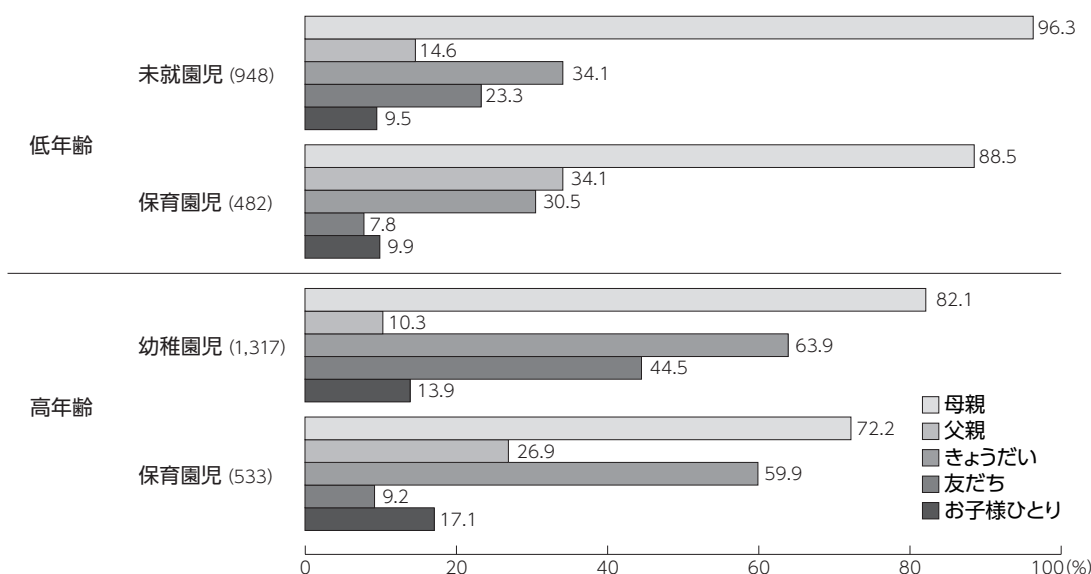
注) 複数回答。

●平日、一緒に遊ぶ相手で就園状況により差があるのは、「きょうだい」と「父親」

15年の調査結果で、平日、園以外で一緒に遊ぶ相手について、年齢区分別、就園状況別にみたものが図1-5-2である。いずれの年齢区分、就園状況においても、「母親」と回答した比率がもっとも高く、母子の密着度の高さは幼児全体の傾向であることがうかがえる。次に注目したいのは「父親」である。「父親」と答えた比率

では、低年齢、高年齢いずれも保育園児のほうが未就園児や幼稚園児よりも高い（低年齢保育園児34.1%、高年齢保育園児26.9%）。図には示していないが、父親の帰宅時間を子どもの就園状況別にみると、低年齢、高年齢ともに保育園児のほうが未就園児、幼稚園児よりも帰宅時間が早かった。保育園児の父親のほうが、家庭で子どもに接する時間が多いと考えられる。また「第3回乳幼児の父親についての調査」（ベネッセ教育総合研究所2014年）では、父親の帰宅時間を聞いているが本調査

図1-5-2 平日、幼稚園・保育園以外で一緒に遊ぶ相手（年齢区分別・就園状況別 15年）



注1) 複数回答。
注2) ()内はサンプル数。

表1-5-1 よくする遊び（経年比較）

	95年	00年	05年	10年	15年 (%)
公園の遊具（すべりだい、ブランコなど）を使った遊び	66.0	68.4	76.1	78.1	80.0
積み木、ブロック	55.0	55.5	63.1	68.0	68.4
人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び	51.2	53.5	56.9	56.6	60.5
絵やマンガを描く	45.0	43.6	57.5	53.5	50.4
ミニカー、プラモデルなど、おもちゃを使った遊び	39.5	43.8	45.5	46.1	49.8
砂場などでのどろんこ遊び	49.5	52.0	57.6	53.6	47.7
ボールを使った遊び（サッカーや野球など）	35.0	33.2	46.8	46.9	46.2
自転車、一輪車、三輪車などを使った遊び	46.3	51.5	53.9	49.5	45.7
マンガや本（絵本）を読む	30.4	28.1	44.9	44.5	43.8
石ころや木の枝など自然のものを使った遊び	26.2	33.8	37.6	40.2	40.3
ジグソーパズル	21.9	17.9	28.8	32.9	33.0
おにごっこ、缶けりなどの遊び	13.9	13.6	20.9	23.0	27.7
カードゲームやトランプなどを使った遊び	19.4	17.8	26.2	25.6	27.7
なわとび、ゴムとび	14.1	12.6	19.3	21.1	20.5
*携帯ゲーム				17.8	18.1
テレビゲーム	24.2	20.2	15.1	17.0	10.5
その他	7.2	9.2	13.2	10.1	9.6

注1) 複数回答。
注2) [*]は10年調査、15年調査のみの項目。
注3) 項目は15年調査結果の降順に図示。

と同様に保育園児の父親のほうが未就園児、幼稚園児の父親よりも帰宅時間が早く、子育てにかかわる比率も高い傾向にある。

一方、「きょうだい」と答えた比率をみると、低年齢では未就園児で34.1%、保育園児30.5%であるのに対し、高年齢では幼稚園児63.9%、保育園児59.9%と約6割を占め、低年齢児よりも高い。第2子と遊ぶ比率が増加するためと考えられる。

●代表的な遊びは 20 年間で変わっていない

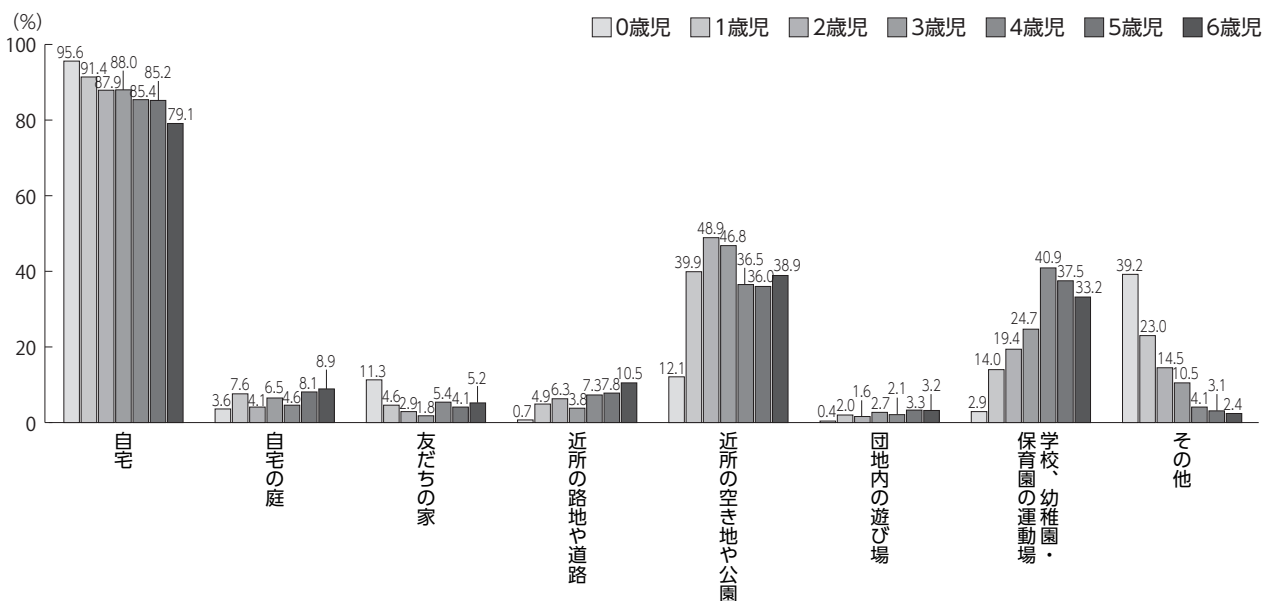
幼児がよくする遊びについて、20年間の変化をみてみよう (表1-5-1)。幼児の全体をみると、5割を超えるものは、「公園の遊具 (すべりだい、ブランコなど) を使った遊び」がもっとも多く、「つみ木、ブロック」、「人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び」、「絵やマンガを描く」が続き、20年間を通して順位に大きな変化はみられない。表に示していないが、年齢別でみると、低年齢

のほうが多い遊びは「つみ木、ブロック」「ミニカー、プラモデルなど、おもちゃを使った遊び」「砂場などでのどろんこ遊び」であり、高年齢では「自転車、一輪車、三輪車などを使った遊び」や集団での遊び(「おにごっこ、缶けりなどの遊び」「なわとび、ゴムとび)、ゲームやカード(「携帯ゲーム」「テレビゲーム」「カードゲームやトランプなどを使った遊び」)があげられる。

●遊ぶ場所でもっとも多いのは「自宅」

平日、園以外で遊ぶ場所について聞いたものが図1-5-3である (2つ選択)。もっとも多いのは「自宅」、次いで「近所の空き地や公園」、「学校、幼稚園・保育園の運動場」と続く。年齢別にみると、年齢があがるほど「自宅」が減少し、4歳児で「学校、幼稚園・保育園の運動場」が4割を占める。2歳児、3歳児では「近所の空き地や公園」が多くなっている。

図1-5-3 遊ぶ場所 (年齢別 15年)



注1) 2つ選択。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ親の回答を分析。
 注3) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。



第6節 幼児の発達状況

10年前と比較して、発達に関する項目全般にわたって、各年齢での達成率が下がりつつある。とくにトイレトレーニングに関する項目においてその傾向が顕著である。

● 10年前に比べて、5、6歳児であってもできない課題が徐々に増えている

幼児の発達状況に関する質問項目は、05年調査以降に加えられたことから、ここでは、05年から15年までの10年間における比較結果をまとめる。表1-6-1は、生活習慣に関する発達について、子どもの年齢ごとに05年調査と15年調査の結果を示したものである。表からみてとれるように、10年間で10ポイント以上、ないし5ポイント以上、達成率が下がったものも少なくない。達成率が5ポイント以上増加したのは、2歳児における「ひとりで洋服の着脱ができる」という項目のみである。とくに、大幅にポイントが減少したのは、「家族やまわりの人にあいさつする」、「おはしを使って食事をする」、「オムツをしないで寝る」の3項目である。

また、05年調査の際には、4歳児以上であれば、すべての項目において達成率が80%を超えていたが、15年

調査では、5歳児、6歳児でも80%未満の項目が残されたままである。つまり、以前に比べて、ほとんどの子どもができるようになるまでに時間のかかる課題が増えているといえる。

● 家族やまわりの人にあいさつする習慣が薄らいでる

表1-6-1においてとくに達成率の減少が著しかった項目の一つに、「家族やまわりの人にあいさつする」があげられる。

図1-6-1は、05年、10年、15年までの10年間における子どもの各年齢での達成率の推移を表したものである。この図から、05年では、1歳児であっても、45.9%と約半数の子どもたちがあいさつできていたのに対して、15年では35.6%にまで落ち込んでいるのがわかる。その後、2歳児においても10年間で10ポイント以上の開きがあり、3歳児、4歳児でも5ポイント以上

表1-6-1 生活習慣に関する発達 (子どもの年齢別 経年比較) (%)

	1歳児		2歳児		3歳児		4歳児		5歳児		6歳児	
	05年	15年	05年	15年	05年	15年	05年	15年	05年	15年	05年	15年
	(660)	(614)	(740)	(583)	(340)	(626)	(312)	(610)	(326)	(671)	(276)	(657)
コップを手で持って飲む	69.5	65.8	98.4	94.8	98.2	96.3	98.1	93.5	97.8	94.0	96.0	92.7
スプーンを使って食べる	64.8	62.3	97.4	95.0	98.2	96.3	98.1	93.5	97.8	94.0	95.7	92.4
家族やまわりの人にあいさつする	45.9	> 35.6	83.5	> 72.6	92.5	> 87.4	93.6	> 87.3	91.8	87.9	91.7	88.0
歯をみがいて、口をすすぐ	14.8	> 9.3	73.3	> 59.1	91.6	> 84.2	95.2	> 88.0	97.5	> 91.6	95.3	91.2
おしっこをする前に知らせる	3.3	4.7	25.2	> 18.4	86.3	> 75.4	97.8	> 90.4	96.9	> 91.9	94.6	90.7
自分でパンツを脱いでおしっこをする	1.2	1.3	17.7	13.0	79.1	> 70.1	98.1	> 90.9	97.3	> 91.9	94.9	90.3
自分でうんちができる	5.6	6.4	24.4	> 18.9	78.8	> 64.4	95.2	> 85.9	96.7	> 90.4	94.6	90.3
ひとりで洋服の着脱ができる	1.4	2.4	18.4	< 23.7	62.0	64.9	92.3	87.5	96.3	> 91.0	93.8	90.7
おはしを使って食事をする	4.5	4.1	32.0	35.2	62.0	58.3	83.7	> 72.1	94.2	> 83.8	93.5	88.9
決まった時間に起床・就寝する	55.6	56.1	62.2	64.4	72.6	68.0	82.4	79.2	85.8	> 77.5	84.4	> 78.2
ひとりで遊んだあとの片付けができる	17.0	16.5	46.8	46.3	64.7	61.7	85.6	> 74.5	88.1	> 80.5	85.1	83.9
オムツをしないで寝る	0.6	1.0	6.3	3.8	45.9	> 35.0	81.1	> 66.0	84.8	> 79.0	90.2	> 83.6

注1) 「できる」の%。

注2) 満1歳以上の子どもをもつ人のみ回答。

注3) 05年、15年調査の結果を比較し、10ポイント以上の差があったものは濃い網掛け、5ポイント以上10ポイント未満の差があったものは薄い網掛けをしてある。

注4) () 内はサンプル数。

注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

減少している。そして、6歳児でも10年前の水準を下回ったままになっている。

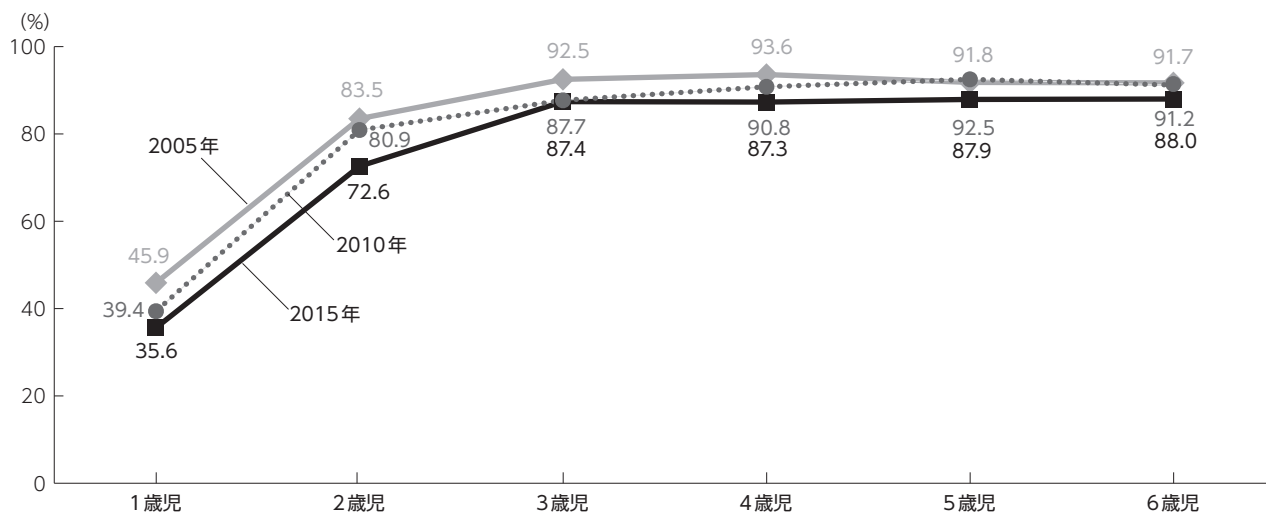
家族やまわりの人へのあいさつは、年齢の上昇とともに、子どもが自発的に行うようになるものというよりも、各家庭で徐々に習慣づけられていくものであり、子どもたちが親や周囲のおとなたちの様子を見様見真似で獲得していくスキルであると考えられる。したがって、ここ10年間におけるこうした結果の背景には、家庭内において、「おはよう」「おやすみ」といった日常的なあいさつをかわす習慣自体が、薄らいでいる可能性があるのではないかと思われる。

家族間において、礼儀正しくあいさつすること自体が重視されなくなっているのか、あるいは、在園時間の長時間化などを背景に、朝晩ともに慌ただしく過ごし、一日の生活の折々において落ち着いてあいさつするゆとりが失われつつあるのか、今後の検証が必要である。

●10年前よりも、4歳児以降においておはしを使える子どもの割合が減少している

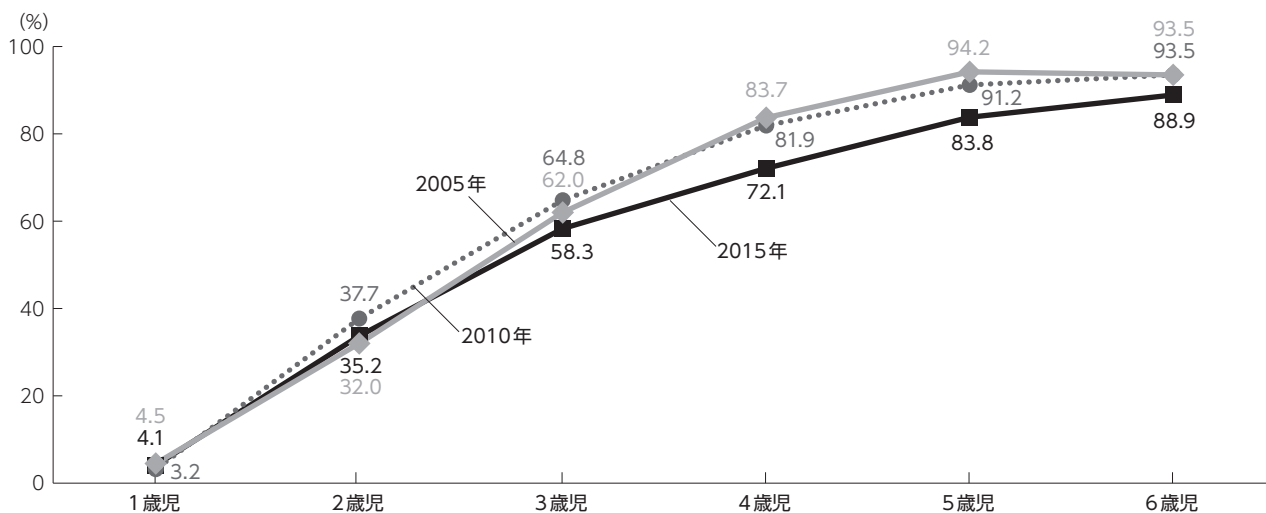
続いて、図1-6-2では、「おはしを使って食事をする」ことができる割合の推移についてまとめた。

図1-6-1 「家族やまわりの人にあいさつする」の達成率(子どもの年齢別 経年比較)



注1) 「できる」の%。
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

図1-6-2 「おはしを使って食事をする」の達成率(子どもの年齢別 経年比較)



注1) 「できる」の%。
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

10年間に於いて、2歳児まではあまり大きな変化はないが、3歳児から徐々に差が開きはじめ、4歳児、5歳児では10ポイント以上減少している。

おはしの使用に関しても、あいさつと同様、おはしを使って食事をするとした習慣自体が薄らいでいるのかもしれない。おはしの代わりにフォークやスプーンを使う機会が増えているとすれば、食事の内容自体も変わりつつあり、おはしを使わずに食べられるメニューが食卓に並ぶ機会が増えている可能性も考えられる。

●夜間のオムツ使用への依存が高まっている

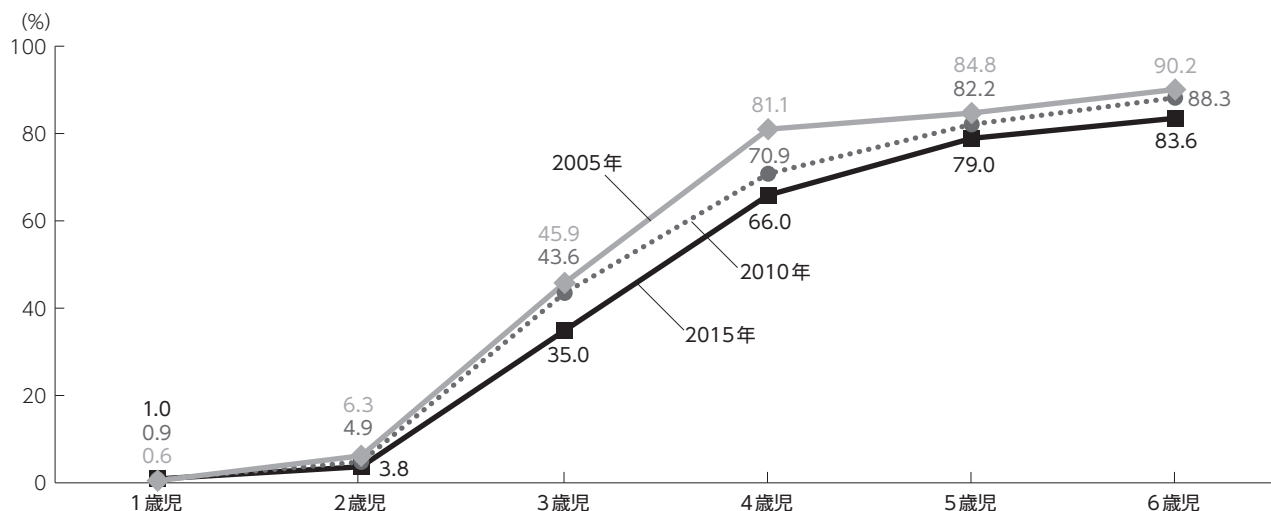
前回の10年調査において、顕著に変化がみられたのが、4歳児での「オムツをしないで寝る」子どもの割合が10ポイント以上減少していた点である(図1-6-3)。

具体的には、05年では81.1%であったのが、10年では70.9%にまで落ち込んだ。そして、今回の調査においてもその傾向は続いており、15年では66.0%まで減少している。さらに、6歳児においても05年調査よりも5ポイント以上の減少がみられていることから、ここ10年間で夜間のオムツ使用への依存は大きく高まっているようである。

また、今回の調査ではこうした傾向が3歳児でもみられ、10年では43.6%だったのが、15年では35.0%となっている。つまり、夜間のオムツを使用するかしないかの分岐点となる年齢が5年前よりも早まっているといえる。

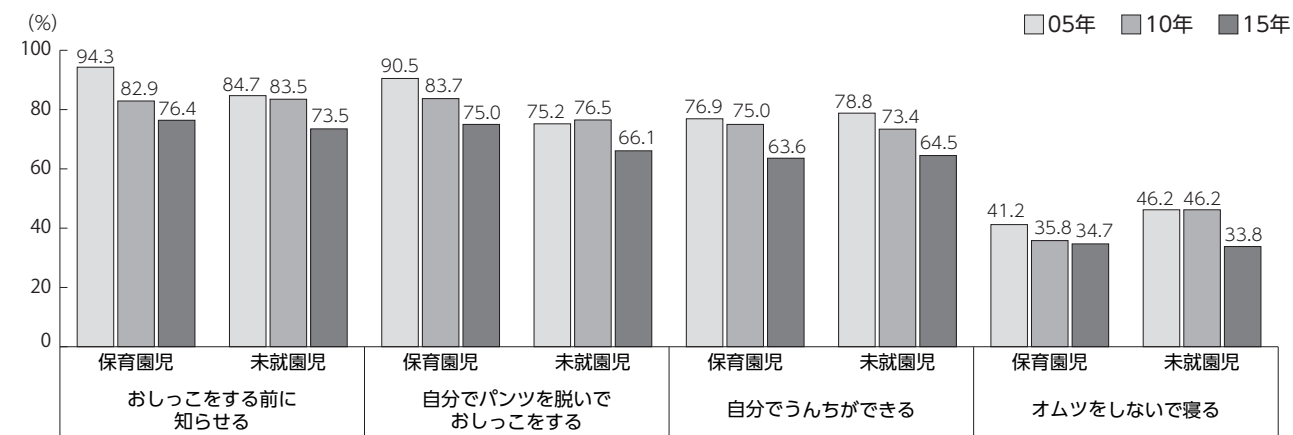
こうした流れを受けて、図1-6-4では、3歳児に限定して、トイレトレーニングに関する課題において、子どもの就園状況による差があるかどうかを検証した結果を表した。

図1-6-3 「オムツをしないで寝る」の達成率(子どもの年齢別 経年比較)



注1) 「できる」の%。
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

図1-6-4 3歳児におけるトイレトレーニングに関する発達(就園状況別 経年比較)



注1) 「できる」の%。
注2) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。
注3) サンプル数は、05年(保育園53人、未就園258人)、10年(保育園136人、未就園330人)、15年(保育園224人、未就園340人)。

10年調査までは、とくに夜間のオムツ使用率においては、未就園児よりも保育園児のほうが高かったが、今回の調査結果によると、就園状況の違いによらず、全体的にトイレトレーニングに関する各課題の達成率の減少傾向が確認できる。「おしっこをする前に知らせる」、「自分でパンツを脱いでおしっこをする」、「自分でうんちができる」、「オムツをしなくて寝る」など、いずれの

項目においても、達成率が下がっている。

こうした背景には、親の意識が強く影響していると推察される。オムツだけではなく、トレーニングパンツなども含め、機能性の向上とともに、トイレトレーニングの煩わしさを回避するという意識が強まっているのではないだろうか。

第2章

母親の教育・子育てに関する意識



真田 美恵子 (1～3、7節)

田村 徳子 (4、6節)

荒牧 美佐子 (5節)



第1節 母親の子育て観

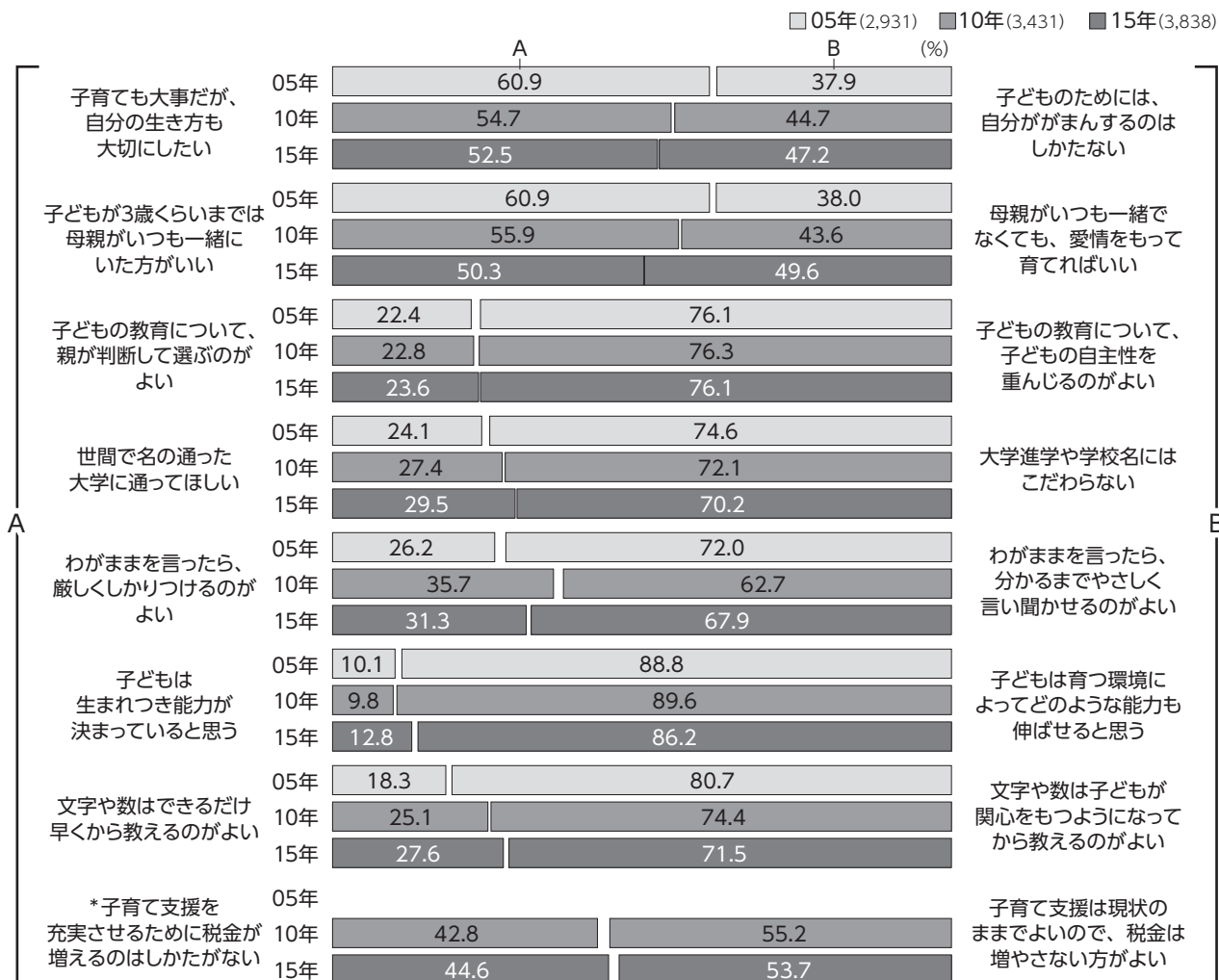
この10年間で、自分の生き方より子育てを優先する母親、子どもといつも一緒になくても愛情をもって育てればよいと考える母親、文字や数はできるだけ早くから教えるのがよいと考える母親が増加している。

●子育て観が変化している

本節では母親の子育て観に関して、05年からの10年間で、どのような変化があったのかをみていきたい。子育てや子どもの教育に関するAとBの2つの意見のうち、母親の気持ちに近いほうを選択してもらった結果が図2-1-1である。

まず、子育てと自分自身の生き方について、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と考える母親は05年では60.9%だったが、15年では52.5%と8.4ポイント減少した。その一方で、「子どものためには、自分がかまふするのはしかたない」は05年では37.9%だったが、15年では47.2%と9.3ポイント増加した。10年調査と比較して、15年調査ではこの2つの考え方

図2-1-1 母親の子育て観（経年比較）



注1) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注2) 無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。
 注3) *は10年調査以降の項目。
 注4) ()内はサンプル数。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

は同率に近い。子どもや子育てをより重視する母親の気持ちだが、この結果に表れたと考えられる。次に、いわゆる「3歳児神話」に関する項目である「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」を支持する比率は、05年では60.9%だったが、15年では50.3%と10.6ポイント減少した。「母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればよい」は05年では38.0%だったが、15年では49.6%と11.6ポイント増加した。愛情をもって子育てをすれば、3歳まで子どもといつも一緒にいなくても大丈夫であるとする母親が10年間で増加しており、「3歳児神話」を信じている母親とほぼ半数ずつの選択率となった。子育てに向き合う母親の考えが変化してきているといえるだろう。

次に10年間で大きな変化のあった、教育に関する意識をみていく。文字や数の習得について、「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える母親は05年の18.3%から9.3ポイント増加し、15年では27.6%となった。「文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい」と考える母親は05年の80.7%から15年では71.5%に減少した。子どもの進学に対する期待では、「世間で名の通った大学に通ってほしい」と考える母親の比率が増加傾向である(05年24.1%→15年29.5%)。子どもの学歴を重視する傾向や、早い時期から文字や数を教えたほうがよいと考える母親

の比率は、10年間を通して一貫して増加している。「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」を支持する比率が増加していることとあわせて考えると、母親が、自分の生き方よりも子どもの教育や進路をより重視しながら育児をする傾向が高まっていることがうかがえる。

また10年調査で新たに質問項目を追加した、子育て支援のための税金の使い方については、「子育て支援を充実させるために税金が増えるのはしかたがない」という考え方を支持する母親は15年には44.6%で、「子育て支援は現状のままでよいので、税金は増やさない方がよい」と増税に賛成しない母親は53.7%であった。これらの項目については10年から大きな変化はみられず、意見が分かれている。

●「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える0歳児の母親が増加

次に、子どもの年齢別に、母親の子育て観の経年変化を確認してみよう。ここでは、変化が大きかった母親自身の生き方と子育ての方針、文字や数を教える時期に着目し、子どもの年齢別の経年変化を記述する(表2-1-1)。

まず、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切に

表2-1-1 母親の子育て観(子どもの年齢別 経年比較)

		(%)						
		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
A. 子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	05年	57.8	57.6	57.3	60.5	69.0	57.8	65.0
	10年	50.6	55.4	54.4	56.9	53.7	56.0	54.0
	15年	54.9	52.0	51.4	47.3	51.2	56.8	55.4
B. 子どものためには、自分ががまんするのはしかたない	05年	41.6	41.9	41.9	38.3	30.0	39.7	33.5
	10年	49.1	44.0	45.4	42.6	45.6	42.8	45.6
	15年	45.1	48.0	48.2	52.5	48.6	42.6	44.1
A. 文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい	05年	32.9	26.3	22.2	17.2	10.8	11.9	14.3
	10年	40.6	33.3	28.7	21.3	20.9	15.1	22.9
	15年	47.8	37.3	28.5	22.3	20.1	21.9	25.2
B. 文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい	05年	66.5	73.3	77.3	81.9	88.2	85.6	84.6
	10年	59.1	65.6	70.8	78.0	78.6	84.5	76.7
	15年	51.5	62.4	70.4	76.9	79.0	77.1	73.4

注1) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注2) 8対の項目のうち2対の項目を表示。
 注3) 無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。
 注4) 子どもの年齢別のサンプル数は以下のとおりである。

(人)							
	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
05年	324	649	730	333	307	322	266
10年	319	538	479	537	561	494	503
15年	268	588	564	594	581	629	614

注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

たい」を選択した母親の比率をみると、子どもの年齢を問わずに10年前より減少している。その中でもっとも変化が大きかったのが、4歳児の母親であった。05年の69.0%から15年では51.2%へ17.8ポイント減少した。一方で、「子どものためには、自分がかまするのはしかなない」は、05年では30.0%だったのが15年では48.6%と、18.6ポイント増加している。

また、「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える母親は、子どもの年齢を問わずに10年前より増加している。とくに0歳児の母親では、05年の32.9%から15年では47.8%へと14.9ポイント増加した。一方で、「文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい」と考える比率は15年では51.5%に減少しており、この2つの考え方に対する支持が同率に近づいてきている。

●「子どものためには、自分がかまん」と考えるパートタイム、専業主婦の母親が増加

母親の就業状況別の経年変化を表2-1-2にまとめた。「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」については、パートタイムの母親では10年間で70.8%から56.3%へ、専業主婦の母親は57.3%から44.6%へといずれも10年間で10ポイント以上減少した。常勤者の母親は10年間であまり変化がみられない。

その一方で、パートタイム、専業主婦の母親のいずれにおいても、「子どものためには、自分がかまん」と考える層が増加している。この変化の背景には何があるのだろうか。

都市部を中心に待機児童が課題となる中、首都圏を対象にした本調査でも05年から15年の10年間で、働く母親が増え、専業主婦の比率は68.4%から51.1%に減

表2-1-2 母親の子育て観（母親の就業状況別 経年比較）

		(%)		
		常勤者	パートタイム	専業主婦
A. 子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	05年	68.9	70.8	57.3
	10年	64.4	58.2	50.4
	15年	67.8	56.3	44.6
B. 子どものためには、自分がかまんするのはしかなない	05年	31.1	27.5	41.3
	10年	35.0	40.3	49.3
	15年	32.0	43.7	55.2
A. 世間で名の通った大学に通ってほしい	05年	25.5	20.9	24.6
	10年	31.5	20.4	27.9
	15年	35.0	23.9	29.4
B. 大学進学や学校名にはこだわらない	05年	74.5	77.6	73.9
	10年	67.6	79.0	71.9
	15年	65.0	76.0	70.5
A. 文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい	05年	16.4	20.1	18.1
	10年	23.0	23.5	25.1
	15年	28.7	27.7	26.1
B. 文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい	05年	83.6	78.4	80.7
	10年	76.4	75.6	74.4
	15年	70.9	71.9	73.6

注1) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注2) 8対の項目のうち3対の項目を表示。
 注3) 無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。
 注4) 母親の就業状況別のサンプル数は以下のとおりである。

(人)			
	常勤者	パートタイム	専業主婦
05年	248	290	2072
10年	464	491	1966
15年	695	579	1981

注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

少した。そのような状況下で、専業主婦として「あえて」働かないことを選択した一部の母親において、「子どものために」今はがまんするという考えを支持する比率が増えているとはいえないだろうか。

また常勤者の母親については、専業主婦の家庭よりも父親の帰宅時間が早く（図示省略）、子育ての関わりも比較的多い傾向があるため（3章2節より）、ある程度は父親の協力を得ながら仕事と育児の両立をしている状況がうかがえる。

一方、パートタイムの母親については、父親の子育てへの関わりが常勤の母親の家庭よりも少ない（3章2節より）。そのため、仕事をもっている、子育てを中心に生活のバランスをとらざるをえない母親も少なくないと考えられる。さらに、パートタイム世帯の年収は05年調査より減少する傾向があり（図示省略）、家族のために働かざるを得ない母親も増えていることがうかがえる。このような状況が、「子どものためには、自分ががまんする」という比率の増加につながっているのではないだろうか。ただし、いずれも仮説であり、母親の就業状況別の子育て観の変化の違いについては、今後さらなる検証が必要である。

● 「世間で名の通った大学に通ってほしい」「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える常勤の母親が増加

「世間で名の通った大学に通ってほしい」については、いずれの就業状況の母親でも増加傾向がみられた。とくに常勤の母親の選択率は、05年の25.5%から15年では35.0%と約10ポイント増加した。常勤の母親は、パートタイムや専業主婦の母親よりも増加率が大きく、子どもを有名大学に進学させたい志向が強まっている。文字や数を教える時期も、いずれの就業状況の母親でも「できるだけ早く教えるのがよい」と考える比率が増えているが、とくに常勤の母親は05年16.4%から15年28.7%へと12.3ポイント増加した。05年から15年にかけて、常勤の母親の大学卒業率（短期大学・四年制大学・大学院卒業の比率）が上昇している（図示省略）。常勤の母親の考え方の変化の背景には、こうした学歴の変化が関連している可能性があると考えられる。



第2節 今、子育てで力を入れていること

この10年間、他者への思いやりや親子のふれあい、生活習慣に力を入れる比率は一貫して高い水準を維持している。しかし、「友だちと一緒に遊ぶこと」に「とても」力を入れる比率は10年前の調査から5.8ポイント減少した。

●上位に変化はないが、「友だちと一緒に遊ぶこと」が減少、「数や文字を学ぶこと」が増加の傾向

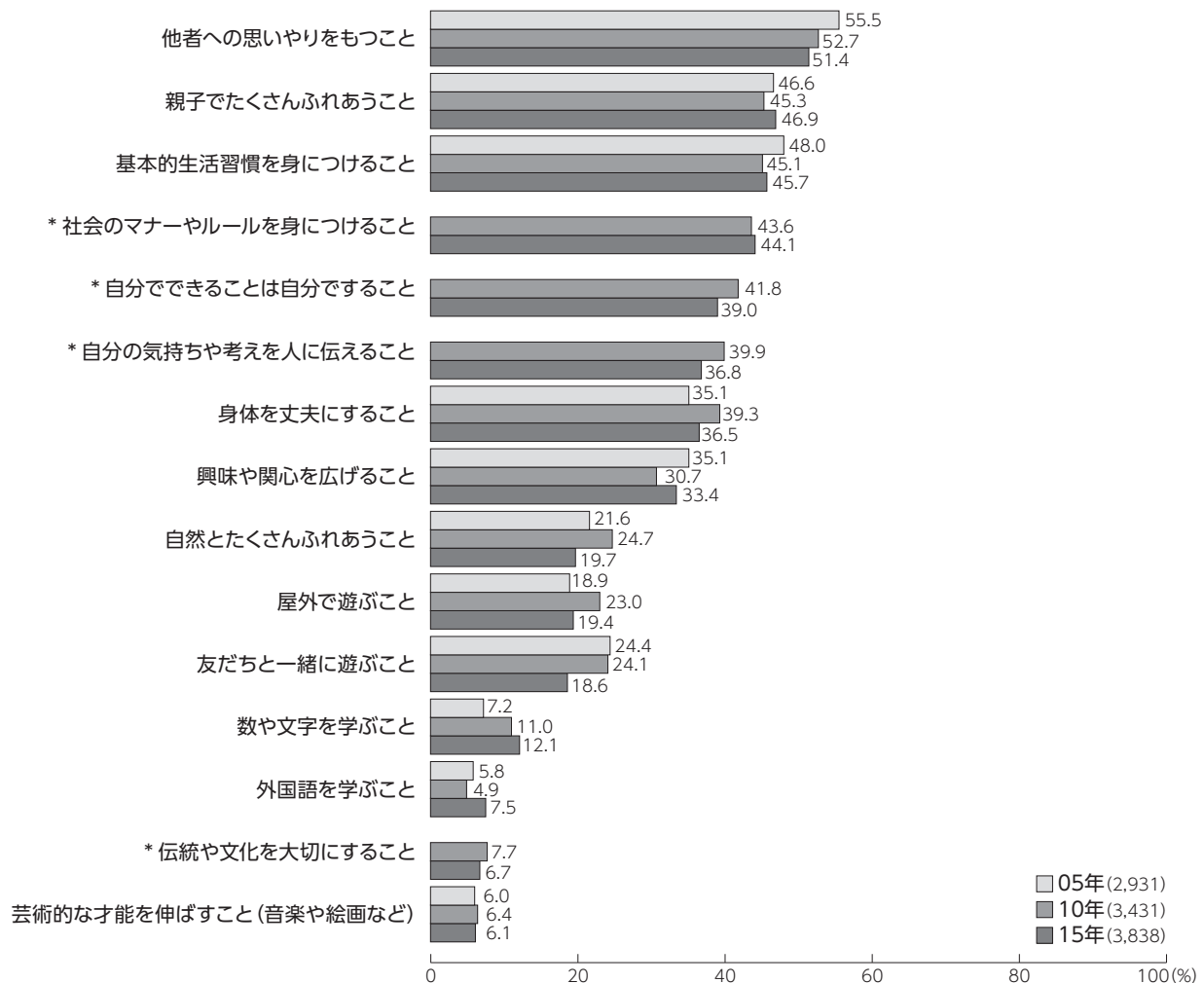
前節では、母親の子育てに関する意識・価値観の経年変化をみた。本節では、母親たちが今、どのようなことに力を入れて子育てをしているのかについて経年比較をする。図2-2-1は母親が子育てで力を入れていることについて、「とても力を入れている」と答えた比率の

10年間の変化を示したものである。その結果、以下の5点の特徴がみられた。

1点目として、上位3項目は10年間で変化がなかった。それは「他者への思いやりをもつこと」(05年55.5%→15年51.4%)、「親子でたくさんふれあうこと」(05年46.6%→15年46.9%)、「基本的な生活習慣を身につけること」(05年48.0%→15年45.7%)である。

2点目として、10年調査で追加した社会ルールの習

図2-2-1 子育てで力を入れていること (経年比較)



注1) 「とても力を入れている」の%。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) *は10年調査以降の項目。
 注4) ()内はサンプル数。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

得、自立、自己の表現に関する項目は10年も15年も約4割の選択率とほぼ変わらず、15項目の中で上位であった。具体的には「社会のマナーやルールを身につけること」「自分でできることは自分ですること」「自分の気持ちや考えを人に伝えること」の項目である。これらの結果から、子育てで力を入れることの上位は、経年で大きな変化はみられないことがわかる。

3点目として、「友だちと一緒に遊ぶこと」が10年前と比較して唯一、5ポイント以上の変化があった項目であった。05年では24.4%であったが、15年では18.6%と5.8ポイント減少した。これは1章5節で示した「平日、(幼稚園・保育園以外で)一緒に遊ぶ人」について「友だち」が減少したと関係があると考えられる。共働き世帯の増加による保育の長時間化や少子化の影響を受け、園以外で友だちと一緒に遊ぶ機会が少なくなったことにより、子どもの友だちづきあいに関する母親の意識が弱くなっている可能性が考えられる。

4点目として、数や文字の学習を重視する母親が増加している。「数や文字を学ぶこと」について、数値は低いものの、05年の7.2%から10年には11.0%、15年には12.1%と増加している。前節で「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」という考えを支持する比率が増加したことを示したが、本調査が示す結果はこうした教育観とも整合的である。幼児の子育てにおいて、数や文字の習得を重視する母親が増えているといえるだ

ろう。

5点目として、05年から10年にかけて、外遊びやからだづくりをより重視する傾向がみられたが、15年には05年時点の水準に戻っている。具体的な項目としては、「自然とたくさんふれあうこと」(05年21.6%→10年24.7%→15年19.7%)、「屋外で遊ぶこと」(05年18.9%→10年23.0%→15年19.4%)、「身体を丈夫にすること」(05年35.1%→10年39.3%→15年36.5%)であった。

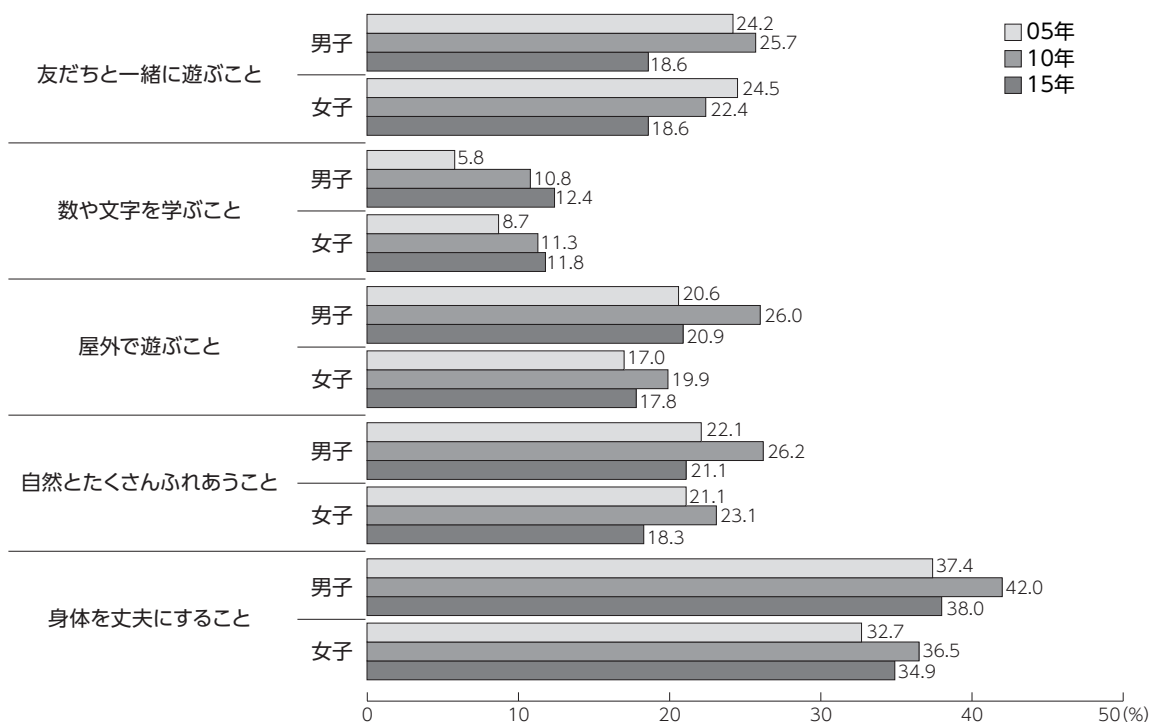
●「友だちと一緒に遊ぶこと」は性別問わずに減少、「数や文字を学ぶこと」は男子の母親で増加の傾向

次に、子育てにおいて重視することについて、子どもの性別での経年変化をみていく。ここでは変化がみられた項目に着目した。図2-2-2から以下のことがわかった。

1点目は、「友だちと一緒に遊ぶこと」に「とても力を入れている」比率について、性差はなく、経年変化においても性別での大きな違いはみられなかった。男女いずれの母親でも、この項目を選択する比率は減少していた。

2点目は、「数や文字を学ぶこと」について、とくに男子の母親で「とても力を入れている」比率が10年間で増加した(05年5.8%→15年12.4%)。女子は05年

図2-2-2 子育てで力を入れていること (性別 経年比較)



注1) 「とても力を入れている」の%。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) 15項目のうち5項目を図示。
 注4) サンプル数は05年男子1,461人、女子1,470人、10年男子1,694人、女子1,737人、15年男子1,890人、女子1,948人。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

では8.7%、15年では11.8%であり、男子の母親の増加率のほうが大きかった。

3点目は、外遊びやからだづくりを重視する傾向は05年から10年にかけてとくに男子の母親において増加したが、10年から15年にかけては減少して、05年時点の水準に戻った。「自然とたくさんふれあうこと」については、女子の母親も10年23.1%から15年18.3%へ4.8ポイント減少した。

●「友だちと一緒に遊ぶこと」は子どもの年齢を問わずに減少、「数や文字を学ぶこと」は0歳児と5歳児でとくに増加

子育てにおいて重視することについて、子どもの年齢別に経年変化をみていく(表2-2-1)。「友だちと一緒に遊ぶこと」は、いずれの年齢でも15年の数値がもっとも低かった。とくに、1~4歳児においては、10年

から15年にかけて5ポイント以上減少した。他に「屋外で遊ぶこと」「自然とたくさんふれあうこと」も、年齢を問わずに10年から15年にかけて減少している。

一方で、「数や文字を学ぶこと」は、10年間で、いずれの年齢でも「とても力を入れている」比率が高くなっていった。とくに0歳児では、05年2.2%だったが、10年5.8%、15年10.1%と10年間で7.9ポイント増加した。また5歳児でも、05年7.6%、10年12.4%、15年14.4%と10年間で6.8ポイント増加した。

「親子でたくさんふれあうこと」「基本的生活習慣を身につけること」は、2歳児以上では5年間であまり変化がないが、0歳児、1歳児では増加傾向がみられる。「数や文字を学ぶこと」も0歳児で増加傾向がみられたことから、子育てを始める初期の段階で、数や文字の習得、親子のふれあい、基本的生活習慣の確立などに力を入れる母親が増えていることがうかがえる。

表2-2-1 子育てで力を入れていること (子どもの年齢別 経年比較)

		(%)						
		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
友だちと一緒に遊ぶこと	05年	14.3	20.8	23.0	25.7	26.7	27.0	27.8
	10年	14.7	20.3	24.3	26.3	27.3	25.0	26.2
	15年	10.8	15.0	17.1	18.2	19.6	21.5	24.2
数や文字を学ぶこと	05年	2.2	4.1	5.5	7.6	8.8	7.6	12.1
	10年	5.8	7.8	9.4	10.2	13.7	12.4	15.4
	15年	10.1	9.5	10.0	10.4	12.6	14.4	16.7
屋外で遊ぶこと	05年	12.0	22.4	22.4	18.6	17.9	17.2	18.0
	10年	16.5	24.4	27.7	25.8	21.2	20.3	21.9
	15年	10.4	21.2	22.4	22.1	19.1	16.3	19.4
自然とたくさんふれあうこと	05年	22.6	24.5	23.0	22.5	25.1	18.0	15.8
	10年	20.6	29.0	26.7	24.4	24.3	23.3	22.5
	15年	15.4	23.1	19.4	22.1	19.5	18.1	18.2
親子でたくさんふれあうこと	05年	70.4	64.2	51.9	46.4	43.3	33.5	28.5
	10年	65.3	59.4	52.9	43.8	39.9	35.3	29.7
	15年	74.7	65.8	51.2	47.6	38.7	33.9	30.1
基本的生活習慣を身につけること	05年	36.3	41.4	46.1	45.1	53.8	54.6	52.3
	10年	37.6	41.3	41.8	44.9	47.6	49.5	49.5
	15年	40.0	45.8	40.4	43.8	46.4	51.3	49.5

注1) 「とても力を入れている」の%。
 注2) 0歳6か月~6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) 15項目のうち6項目を表示。
 注4) 子どもの年齢別のサンプル数は以下のとおりである。

(人)							
	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
05年	324	649	730	333	307	322	266
10年	319	538	479	537	561	494	503
15年	268	588	564	594	581	629	614

注5) 0歳6か月~6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。



第3節 子どもの進学に対する期待

母親の子どもに対する高学歴志向はさらに強まり、「高校卒業の母親」も子どもに高学歴を期待するようになってきている。子どもの性別では、男子により高い学歴を望んでいるが、この5年間で女子に「四年制大学卒業まで」を期待する比率が大きく増加した。

母親は、子どもの進学に対してどのような期待をしているのだろうか。また、それはこの20年間でどのように変化しているのだろうか。

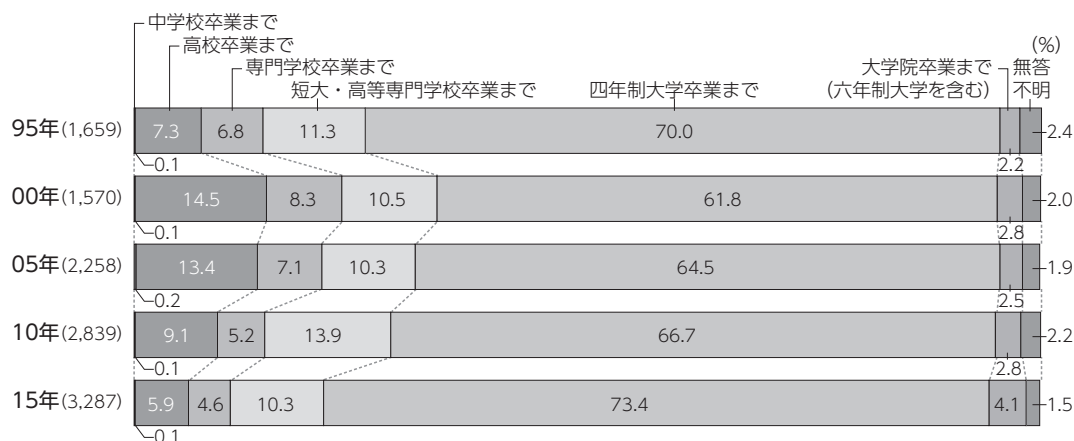
● 73.4%の母親が、子どもに「四年制大学卒業まで」の学歴を期待している

図2-3-1は、母親が子どもをどの学校段階まで進学させたいと思っているかについて、経年比較を行ったものである。これをみると、95年から00年は、「高校卒業まで」の比率が増加し（95年7.3%→00年14.5%、以下同）、「四年制大学卒業まで」の比率が減少したが（70.0%→61.8%）、00年から15年までは一貫して「高校卒業まで」の比率が減少し（14.5%→13.4%→9.1%→5.9%）、「四年制大学卒業まで」の比率が増加している（61.8%→64.5%→66.7%→73.4%）。とくに、10年から15年にかけては、「四年制大学卒業まで」を選択する比率が6.7ポイント増加しており、母親の子どもに対する高学歴志向は強まっているといえよう。

● 母親が女子に「四年制大学卒業まで」を期待する比率が5年間で約10ポイント増加

次に、進学に対する期待が、子どもの性別によってどのように異なるかをみてみよう。図2-3-2をみると、女子に対して「短大・高等専門学校卒業まで」を望む比率は15年では17.8%となり、10年の23.8%から6.0ポイント減少した。一方で、女子に「四年制大学卒業まで」を期待する比率は、00年50.1%→05年52.0%→10年56.8%→15年66.9%となり、00年以降一貫して上昇している。男子についても00年以降、「四年制大学卒業まで」を期待する比率は高くなっており、00年73.0%→05年76.5%→10年76.1%→15年79.7%であった。母親は、依然として男子により高い学歴を期待している。しかし、女子に高学歴を期待する比率が調査をするたびに高くなっているため、性差は徐々に縮まっている。四年制大学卒業以上の学歴を望む比率の性差（男子-女子）については、95年調査から、27.5ポイント差→25.4ポイント差→26.1ポイント差→21.3ポイント差→16.5ポイント差と減少している。

図2-3-1 子どもの進学に対する期待（経年比較）



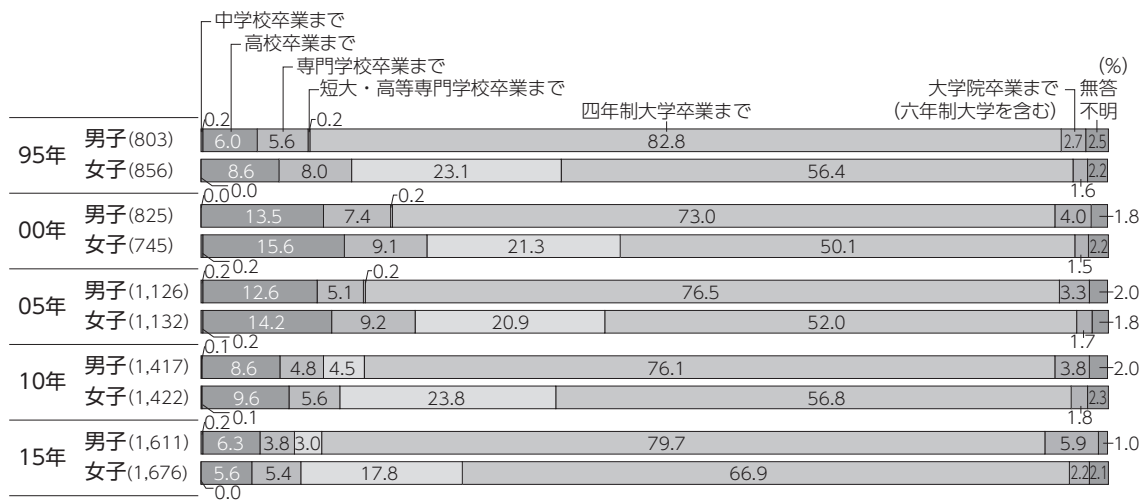
注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) 95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで（六年制大学を含む）」は「大学院卒業まで」とたずねた。
 注3) ()内はサンプル数。

● 「高校卒業の母親」も、子どもに高い学歴を期待するようになっている

次に、子どもの進学に対する期待が、母親の学歴によってどのように異なるかをみてみよう(図2-3-3)。「高校卒業までの母親」(「中学校」「高等学校」「専門学校」を卒業した人)と「大学卒業の母親」(「高等専門学校」「短期大学」「四年制大学」「大学院(六年制大学を含む)」を卒業した人)とを比較すると、95年から15年まで一貫して、「高校卒業の母親」は「大学卒業の母親」と比較して、子どもに「高校卒業まで」「専門学校卒業まで」の学歴を望む比率が高く、四年制大学卒業以上の学歴を望む比率が低い。

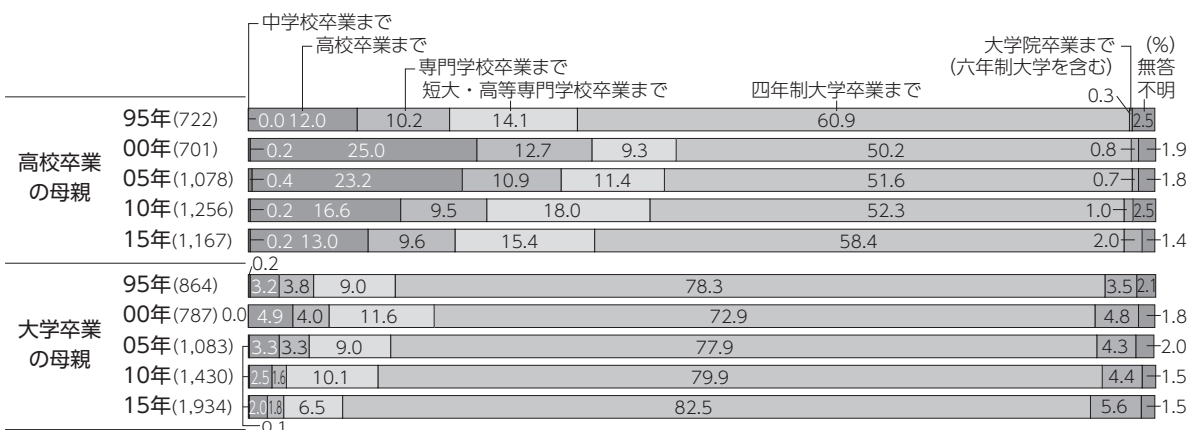
四年制大学卒業以上の学歴を望む比率の差(「大学卒業の母親」-「高校卒業の母親」)は、95年から10年までは、20.6ポイント差→26.7ポイント差→29.9ポイント差→31.0ポイント差と、10年まではやや拡大傾向にあった。しかし15年にはその差が27.7ポイントになり、5年前の調査よりも縮まった。子どもに四年制大学卒業以上の学歴を望む「大学卒業の母親」は10年84.3%→15年88.1%と3.8ポイント増加したのに対して、「高校卒業の母親」では10年53.3%→15年60.4%と7.1ポイント増加した。「高校卒業の母親」も徐々に、子どもに高い学歴を期待するようになっているといえよう。

図2-3-2 子どもの進学に対する期待(性別 経年比較)



注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) 95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」は「大学院卒業まで」とたずねた。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-3-3 子どもの進学に対する期待(母親の学歴別 経年比較)



注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) 95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」は「大学院卒業まで」とたずねた。
 注3) 高校卒業の母親は、「中学校」「高等学校」「専門学校」を卒業した人、大学卒業の母親は、「高等専門学校」「短期大学」「四年制大学」「大学院(六年制大学を含む)」を卒業した人を表す。
 注4) ()内はサンプル数。



第4節 教育費

習い事などにかかる費用は、5年間で変化はみられなかったが、幼稚園児、保育園児ともに園にかかる費用で増加傾向がみられた。幼稚園児の園にかかる費用は世帯年収にかかわらず同程度であり、教育費全体への負担感が高かった。

●習い事などにかかる費用は、この5年間で変化はみられない

子ども1人で1か月あたりにかかる教育費はどれくらいか。「塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用（幼稚園・保育園で有料で習っているものは除く）」と「幼稚園・保育園にかかる費用（保育料や、幼稚園・保育園で有料で習っている習い事の費用を含む）」についてたずねた。（なお、質問文は、調査回によって、若干の変更を行っている。詳細は図2-4-1の注3を参照）。

図2-4-1をみると、習い事などにかかる教育費は「1,000円～5,000円未満」と「5,000円～10,000円未満」の層が大半を占める。この層の比率は、95年が55.0%、00年が55.5%、05年が55.9%、10年が55.3%、15年が53.3%とあまり変化がなかった。一方、「1,000円未満」は、95年が11.3%、00年が18.6%、05年が11.7%、10年が23.3%、15年が24.4%だった。05年から10年にかけて倍増しており、15年はほぼ横ばいとなった。また、10,000円以上は、95年が31.1%、00年が24.7%、05年が31.1%、10年が17.6%、15年が18.2%だった。05年から10年にかけて13.5ポイント

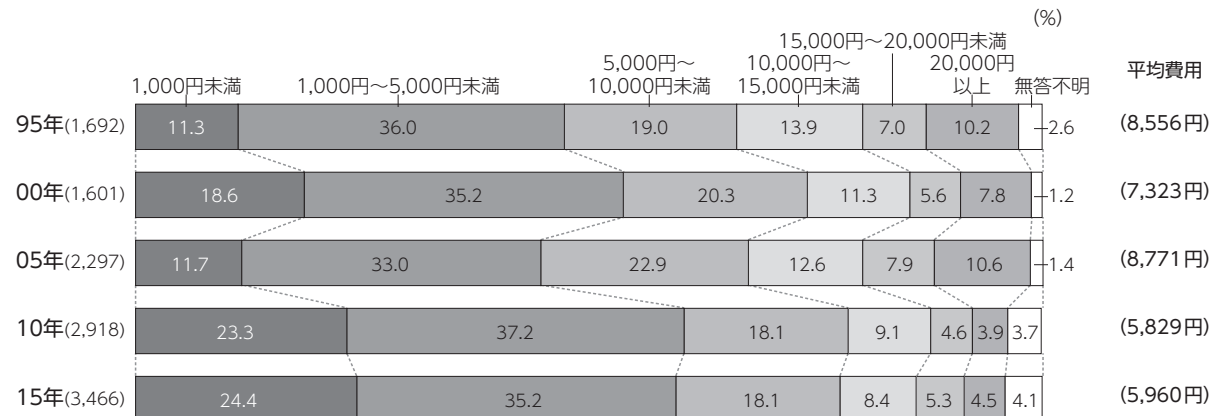
減少し、15年はほぼ横ばいとなった。05年から10年にかけて習い事などにかかる教育費は大きく減少傾向になり、15年はそのまま横ばいの状態だった。

「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円のように置き換えて平均を算出すると、05年が8,771円相当だったのが、10年には5,829円相当と3,000円近く減少し、15年では5,960円相当と、10年とあまり変わらなかった。

●子どもの年齢が上がるにつれて、習い事などにかかる費用は増加

15年で、子どもの年齢別に習い事などにかかる教育費をみた。1歳後半児では、「1,000円未満」が39.3%、「1,000円～5,000円未満」が43.2%であり、これらを合わせて約83%を占めた。平均費用は3,308円相当だった。6歳児になると「1,000円未満」が10.9%、「1,000円～5,000円未満」が24.7%であり、これらを合わせて約36%であり、平均費用は9,235円相当だった。習い事などにかかる教育費は、子どもの年齢と大きく関係しており、10年調査の傾向と変わらなかった（図示省略）。

図2-4-1 ひとりあたりの教育費（経年比較）



注1) 平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。

注2) 「20,000円～25,000円未満」「25,000円～30,000円未満」「30,000円以上」を「20,000円以上」としている。

注3) 95年、00年、05年調査は「幼稚園・保育園にかかる費用（就園補助等も含めて）」を除いた、1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用を教えてください。とたずねている。（ただし、95年は、質問文に「（就園補助等も含めて）」と「絵本・玩具」の部分は含まない）

注4) ()内はサンプル数。

●高年齢で保育園児の習い事にかかる教育費が増加傾向

子どもの就園状況により、習い事などの教育費に違いはあるか。図2-4-2をみると、15年調査では、低年齢で未就園児と保育園児で差はみられなかった。一方、高年齢で幼稚園児と保育園児に差がみられた。「1,000円未満」と「1,000円～5,000円未満」を合わせた比率は、幼稚園児が43.8%、保育園児が52.6%であり、平均費用は幼稚園児が7,848円相当で、保育園児が6,777円相当だった。

10年と15年での平均費用の変化をみると、低年齢ではあまり変化はみられなかった。一方、高年齢では幼稚園児の費用はほぼ変化は見られなかったが、保育園児の費用がやや高くなり、平均費用を比べると10年が6,009円相当、15年が6,777円相当だった。高年齢の保育園児で習い事をしている比率が増加傾向にあることと関連すると思われる。

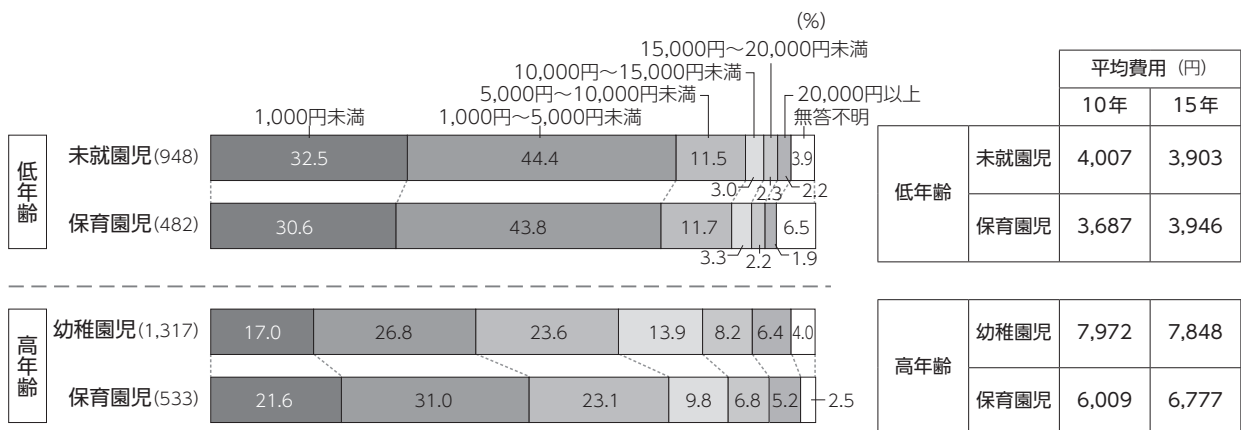
●高年齢で、幼稚園児、保育園児ともに園にかかる費用が増加

幼稚園や保育園にかかる費用をみよう。保育園について、低年齢と高年齢で比較した。

図2-4-3をみると、低年齢でもっとも多かったのは、「50,000円以上」で29.4%だった。平均費用は35,866円相当だった。高年齢でもっとも多かったのは「20,000円～30,000円未満」で39.8%だった。平均費用は25,100円相当であり、低年齢に比べて10,000円ほど差があった。

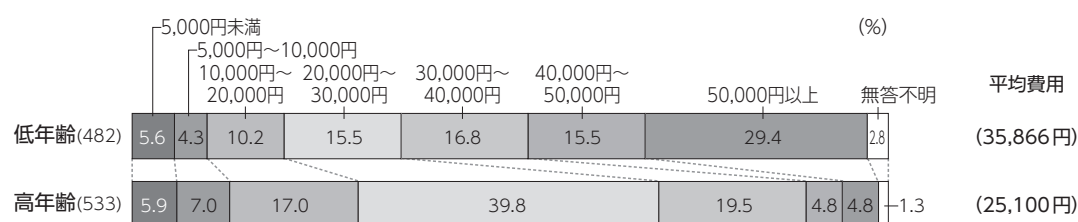
次に、高年齢において、15年での幼稚園と保育園で比較しよう。図2-4-4をみると、幼稚園児で多くを占めたのが、「20,000円～30,000円未満」が31.7%、「30,000円～40,000円未満」が45.7%で、合わせて約77%だった。また、平均費用は30,925円相当だった。一方、保育園児の場合、「20,000円～30,000円未満」が39.8%だったが、幼稚園に比べると費用のばらつきが大きかった。平均費用は25,100円相当だった。

図2-4-2 ひとりあたりの教育費 (子どもの年齢区分別・就園状況別 15年)



注1) 平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
 注2) 「20,000円～25,000円未満」「25,000円～30,000円未満」「30,000円以上」を「20,000円以上」としている。
 注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注4) ()内はサンプル数。

図2-4-3 保育園にかかる費用 (子どもの年齢区分別 15年)



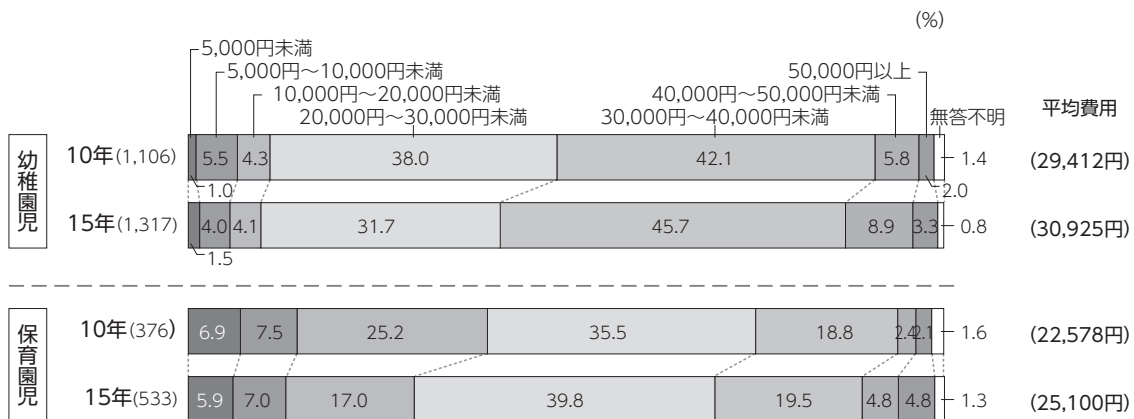
注1) 子どもを保育園に通わせている人のみ回答。
 注2) 平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
 注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注4) ()内はサンプル数。

高年齢での園にかかる費用を10年と15年での変化をみると、30,000円以上の比率は、幼稚園児で10年調査の49.9%から15年調査の57.9%、保育園児で10年調査の23.3%から15年調査の29.1%と増加した。平均費用は、幼稚園児では10年調査が29,412円相当、15年調査が30,925円相当と1,500円ほど高くなっていった。また保育園児では10年調査が22,578円、15年調査が25,100円と2,500円ほど高くなっていった。幼稚園児、保育園児ともに園にかかる費用は増加の傾向がみられた。

●習い事などの教育費は、世帯年収と関連性がみられる。幼稚園児の園にかかる費用は、世帯年収にかかわらず同程度

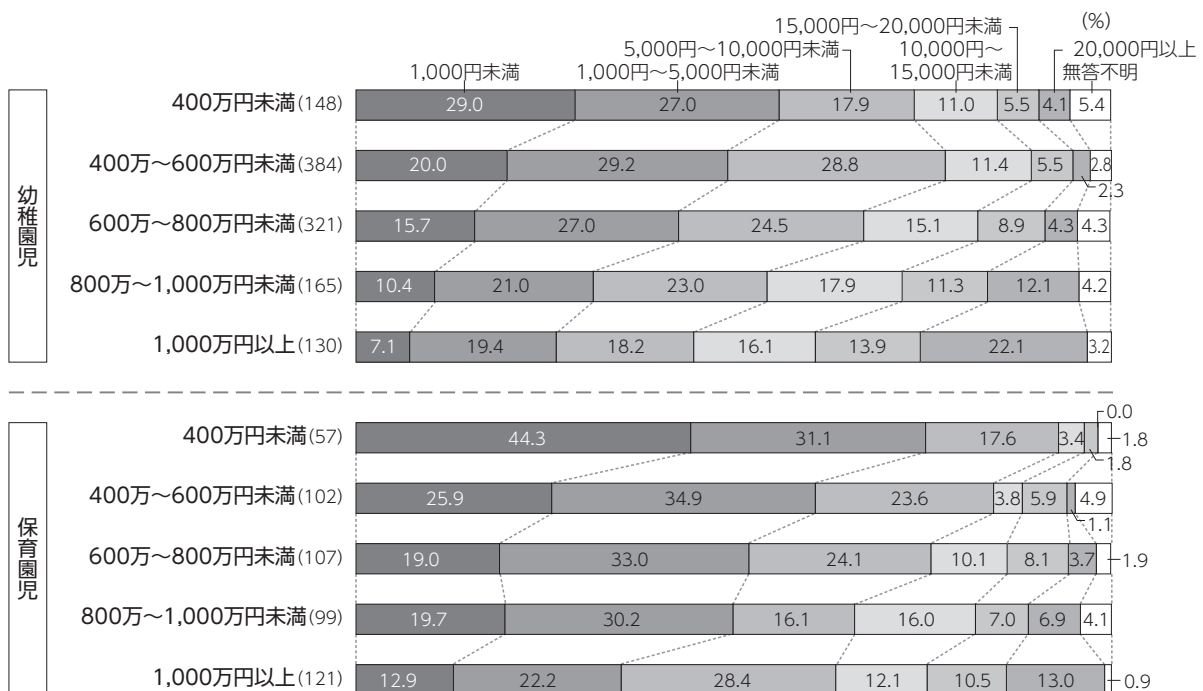
子育てや教育にかかる費用を家計からどれくらい支出するかは、家族にとって大きな問題である。そこで、習い事などの教育費・幼稚園や保育園にかかる費用と世帯年収との関係について分析した。ここでは、幼稚園や保育園に就園している比率の高い高年齢についてみていきたい。

図2-4-4 園にかかる費用(就園状況別(高年齢)経年比較)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 高年齢は、4歳~6歳11か月の幼児。
 注3) 平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円~10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
 注4) ()内はサンプル数。

図2-4-5 ひとりあたりの教育費(就園状況別(高年齢)世帯年収別 15年)



注1) 高年齢は、4歳~6歳11か月の幼児。
 注2) 「20,000円~25,000円未満」「25,000円~30,000円未満」「30,000円以上」を「20,000円以上」としている。
 注3) 平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円~5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
 注4) ()内はサンプル数。

図2-4-5は習い事などの教育費を就園状況別に世帯年収でみたものである。これをみると、就園状況にかかわらず、世帯年収が高いほど、習い事などの教育費を多く支出していることがわかる。

次に、図2-4-6は園にかかる費用を就園状況別に世帯年収でみたものである。これをみると、保育園児の場合、世帯年収が上がるほど園にかかる費用を多く支出していることがわかる。一方、幼稚園児の場合、世帯年収にかかわらず、園にかかる費用が同程度だった。

●教育費の負担感は経年で変わらない。保育園児の負担感は年齢で変わらないが、幼稚園児の負担感が高い

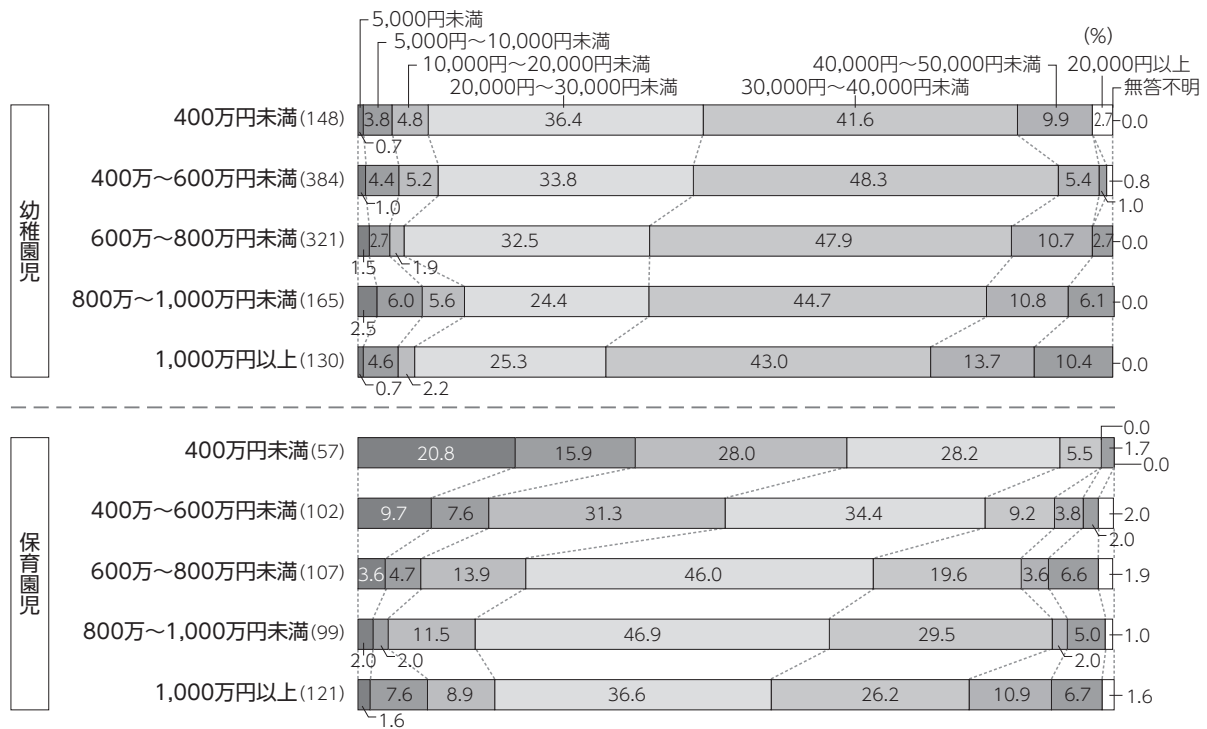
ここまで、習い事や園などの教育費の状況についてみ

てきた。では教育費の支出について保護者はどのように感じているだろうか。ここでは母親の回答のみ分析する。

教育費の負担感について、10年調査と15年調査を比べたのが図2-4-7である。これをみると教育費の負担感に変化はみられなかった。15年では、負担を「とても感じる」が11.6%、「まあ感じる」が42.1%であり、合わせて53.7%と約半数だった。約半数の母親が負担感を感じているといえよう。

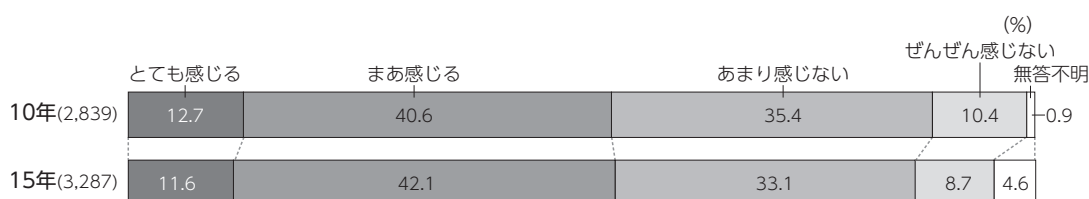
次に、低年齢と高年齢に分けて就園状況別にみた(図示省略)。負担を「感じる(とても+まあ)」比率は、低年齢の場合では未就園児で34.2%、保育園児で47.2%、高年齢の幼稚園児で72.5%、保育園児で48.9%だった。保育園児の場合、低年齢と高年齢であまり負担感が変わらない。一方、高年齢の幼稚園児で負担感が7割以上と高い比率だった。

図2-4-6 園にかかる費用(就園状況別(高年齢) 世帯年収別 15年)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 高年齢は、4歳~6歳11か月の幼児。
 注3) 平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円~10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
 注4) ()内はサンプル数。

図2-4-7 教育費の負担感(経年比較)



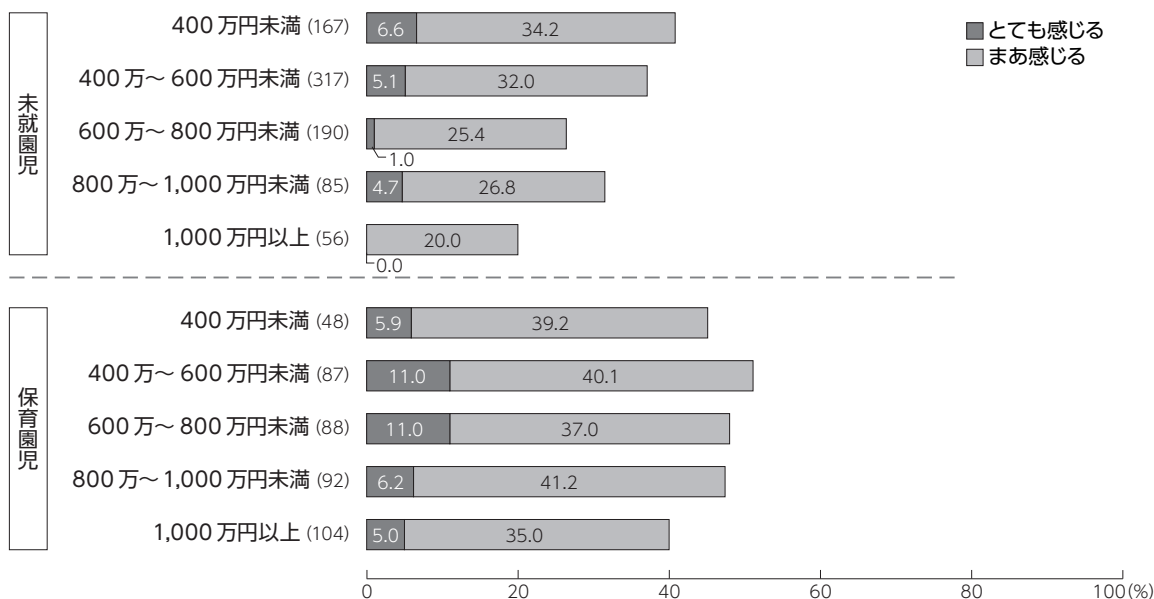
注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) ()内はサンプル数。

さらに、低年齢と高年齢で就園状況別に教育費の負担感をみたのが、図2-4-8、9である。図2-4-8をみると、低年齢の未就園児で負担を「感じる(とても+まあ)」比率は、世帯年収別での傾向がみられなかった。一方、高年齢をみる(図2-4-9)と、負担を「感じる(とても+まあ)」比率は、保育園児の場合、世帯年収が「400万円未満」で55.2%、「400万~600万円未満」で57.4%、「600万~800万円未満」で54.3%、「800万~1,000万円未満」で51.5%、「1,000万円以上」で37.4%であり、800万円未満では大きな差が見られな

かった。一方、幼稚園児の場合、世帯年収が「400万円未満」で83.7%、「400万~600万円未満」で78.4%、「600万~800万円未満」で71.7%、「800万~1,000万円未満」で68.4%、「1,000万円以上」で55.7%であり、比較的差がみられた。

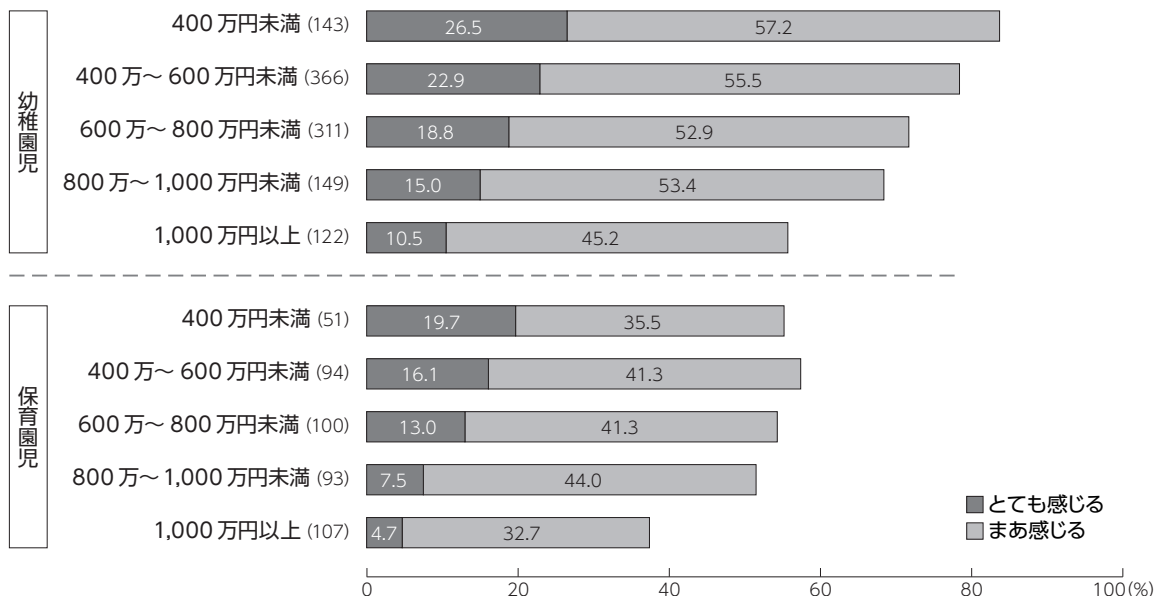
高年齢の幼稚園児の場合、園にかかる費用が世帯年収にかかわらず同程度であり、さらに習い事をしている比率が高かった。このことが負担感につながっているのではないだろうか。

図2-4-8 教育費の負担感(就園状況別(低年齢) 世帯年収別 15年)



注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) 低年齢は、1歳6か月~3歳11か月の幼児。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-4-9 教育費の負担感(就園状況別(高年齢) 世帯年収別 15年)



注1) 母親の回答のみ分析。
 注2) 高年齢は、4歳0か月~6歳11か月の幼児。
 注3) ()内はサンプル数。



第5節 母親の子育て意識

15年前と比較して、子育てへの肯定的感情が高い傾向に変化はない。しかし、子育てにおける将来への不安は高まっている。また、専業主婦における育児への否定的感情が再び高まりつつある傾向がある。

●子育てへの肯定的感情は高いが、子どもの育ちへの不安が高まっている

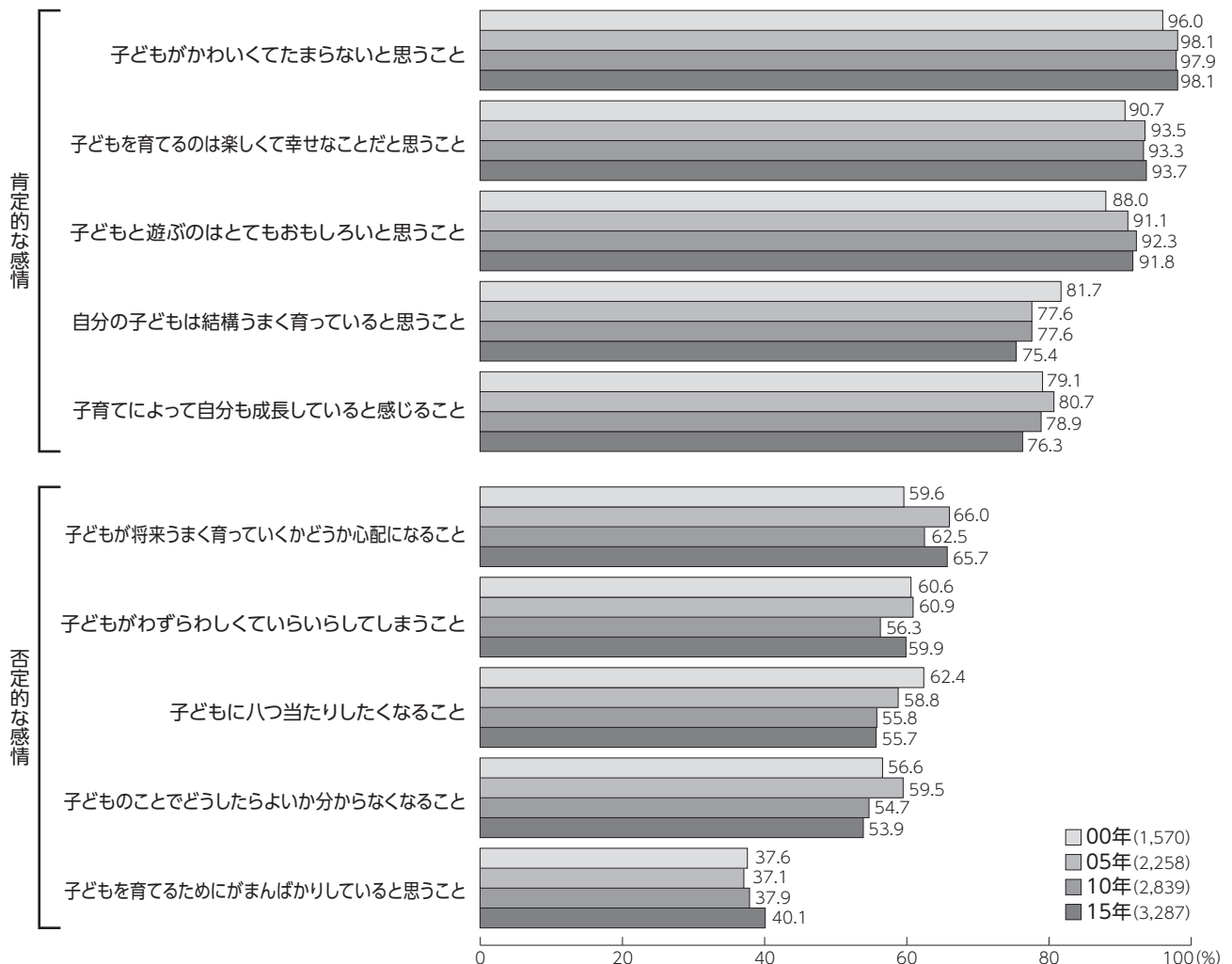
図2-5-1は、母親の子育て意識に関して、00年からの15年間に於ける推移を表したものである。

図の上位5項目は、子育てへの肯定的な感情であり、いずれも「よくある」あるいは「ときどきある」と答えている比率が高いが、「自分の子どもは結構うまく育っ

ていると思うこと」については、15年前と比較して5ポイントほど減少しており、子どもの発達に関する不安は若干高まっていることがわかる。

また、下位5項目は子育てへの否定的感情に関する項目であるが、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」については15年前より5ポイント以上の増加傾向にあり、やはり子どもの発達への不安がうかがえる結果となっている。

図2-5-1 母親の子育て意識（経年比較）



注1) 「よくある+ときどきある」の%。
 注2) 母親の回答のみ分析。
 注3) () 内はサンプル数。

●**専業主婦において、育児への否定的感情が高まっている**

図2-5-2は、子育て意識について、母親の就業状況別に、05年から15年までの10年間の経年比較をした結果を表したものである。

10年調査では、専業主婦では育児への否定的感情に関する数値が減少しつつある一方で、常勤者やパートタイムでは高まっている傾向がみられた。しかし今回の調査では、専業主婦では、否定的感情に関する5項目すべてにおいて、増加傾向にあり、05年の水準かそれ以上に回帰している。

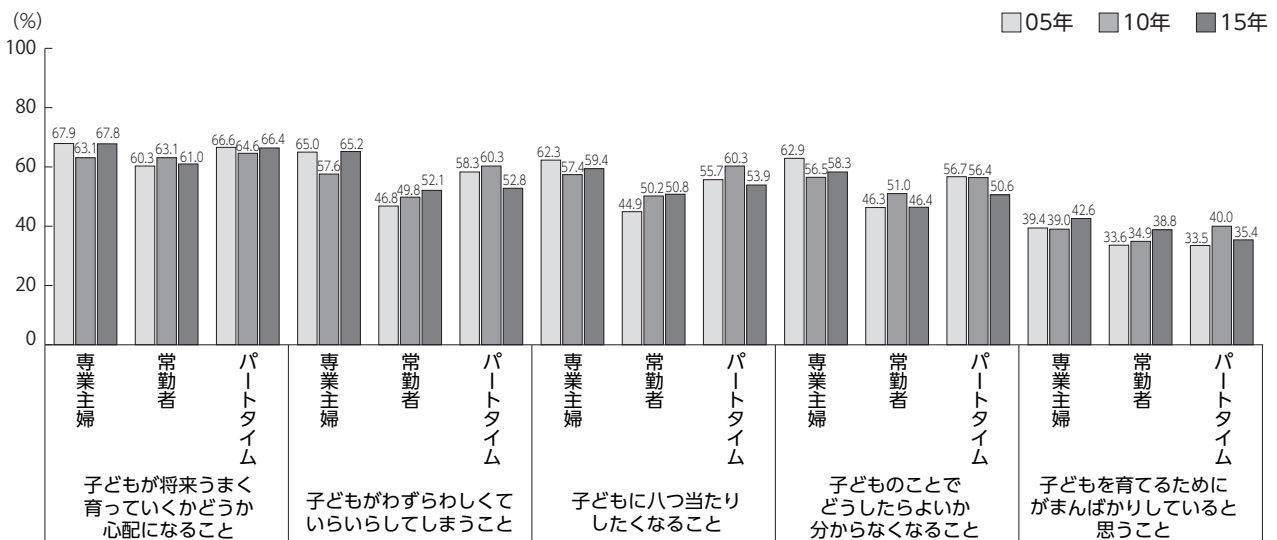
常勤者において変化があったのは、「子どもがわずら

わしくていららしてしまうこと」、「子どもに八つ当たりしたくなること」、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」といった、とくに育児への負担感に関する項目において数値の増加が認められた。これと対照的に、パートタイムではこうした項目において減少傾向がみられた。

●**子どもが低年齢である場合には、未就園児をもつ母親のほうが育児への否定的感情が強い傾向にある**

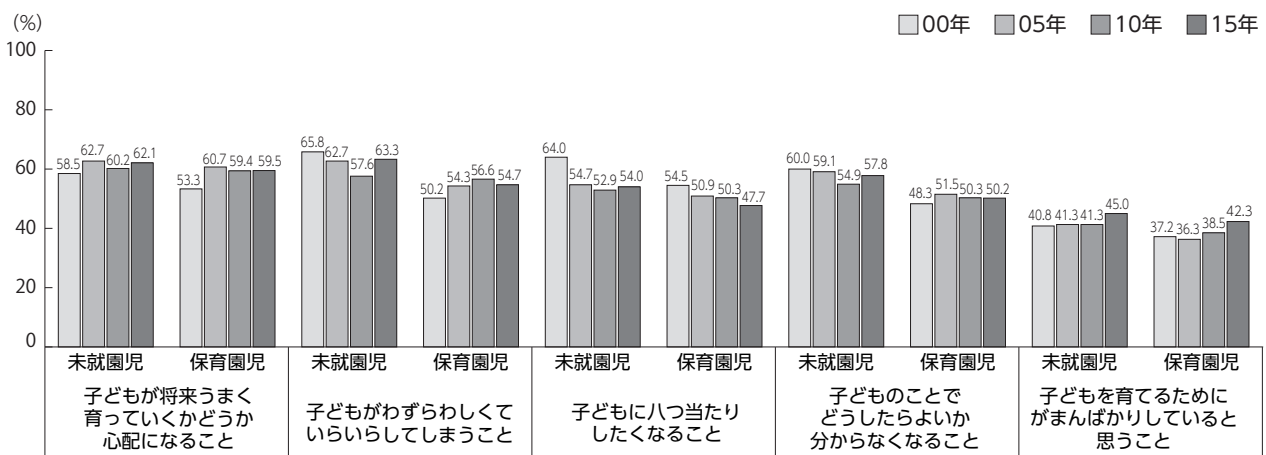
つづいて、図2-5-3、4では、育児への否定的感情について、子どもの年齢による就園状況における違い

図2-5-2 母親の子育て意識 (母親の就業状況別 経年比較)



注1) 「よくある+ときどきある」の%。
 注2) 母親の回答のみ分析。
 注3) 10項目のうち、否定的感情を表す5項目を図示。
 注4) サンプル数は05年(専業主婦1,578人、常勤者213人、パートタイム253人)、10年(専業主婦1,608人、常勤者405人、パートタイム465人)、15年(専業主婦1,701人、常勤者639人、パートタイム556人)。

図2-5-3 母親の子育て意識 (就園状況別 (低年齢) 経年比較)



注1) 「よくある+ときどきある」の%。
 注2) 母親の回答のみ分析。
 注3) 10項目のうち、否定的感情を表す5項目を図示。
 注4) 子どもの年齢は、1歳6か月～3歳11か月。
 注5) サンプル数は00年(未就園児718人、保育園児116人)、05年(未就園児1,100人、保育園児209人)、10年(未就園児850人、保育園児291人)、15年(未就園児920人、保育園児452人)。

に焦点をあて、00年から15年までの15年間の推移をまとめている。

図2-5-3は、1歳6か月から3歳11か月までの低年齢児に絞って、未就園児か保育園児かにおいて比較した結果である。

就園状況によって差のない項目は、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」と「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」の2項目であり、いずれも若干増加傾向にある。

また、未就園児群において変化があったのは、「子どもがわずらわしくていららしてしまうこと」であり、10年調査より5ポイント以上増加している。この項目に関して、保育園児群では、少し減少傾向にある。

全般的に、未就園児をもつ母親のほうが否定的感情は強く、これまでと同様、こうした家庭への支援が必要であるといえる。

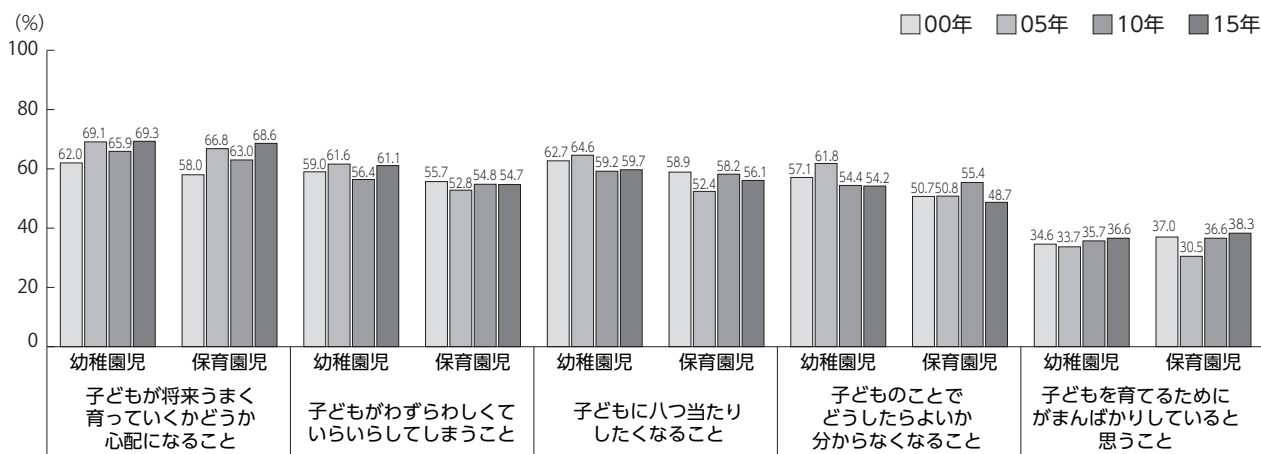
●今、現状での子育ての是非よりも、将来への不安が高まっている

つづいて、図2-5-4では、4歳以上の高年齢児をもつ母親の否定的感情について、就園状況別による比較結果を表している。

ここでも全体的な傾向と同じく、幼稚園児群、保育園児群ともに「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になる」という項目において増加傾向がみられた。

一方で、減少傾向にあったのは、「子どものことでどうしたらよいかわからなくなること」であり、とくに保育園児群では5ポイント以上減っていた。このことから、今この場において、子育てで迷うというよりも、将来のことを見据えた場合、このままでよいのだろうか、といった漠然とした不安にかられる母親が増えているといった状況がうかがえる。

図2-5-4 母親の子育て意識（就園状況別（高年齢） 経年比較）



注1) 「よくある+ときどきある」の%。

注2) 母親の回答のみ分析。

注3) 10項目のうち、否定的感情を表す5項目を図示。

注4) 子どもの年齢は、4歳0か月～6歳11か月。

注5) サンプル数は00年（幼稚園児494人、保育園児120人）、05年（幼稚園児667人、保育園児151人）、10年（幼稚園児1,094人、保育園児355人）、15年（幼稚園児1,253人、保育園児489人）。



第6節 しつけや教育の情報源

しつけや教育の情報源では、「母親の友人・知人」、「インターネットやブログ」の比率が高い。20代の母親は、祖父母とネットでの情報に頼る傾向がみられた。

●しつけや教育の情報源では、「母親の友人・知人」、「インターネットやブログ」の比率が高い

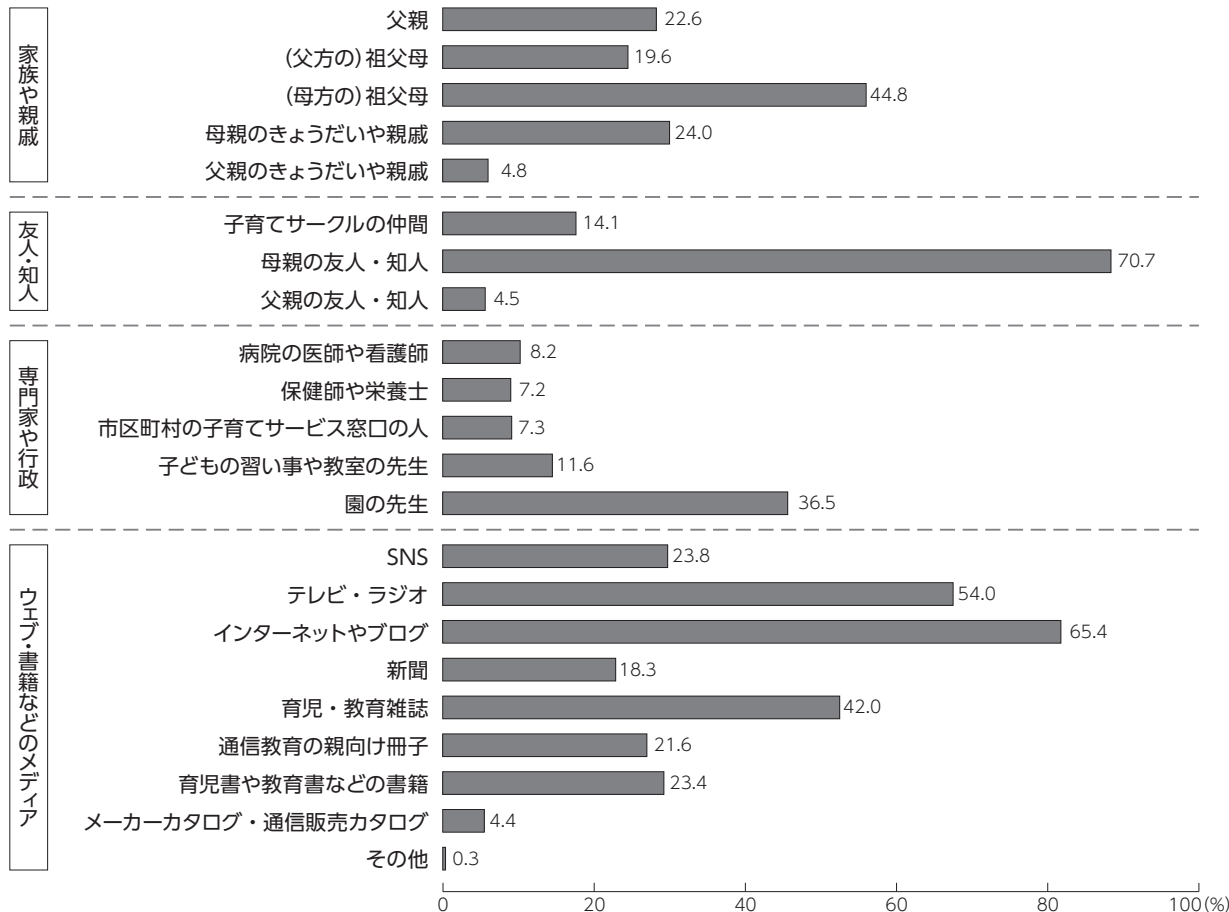
幼児をもつ母親は、子どものしつけや教育の情報をどのように得ているだろうか。調査では「現在、あなたは『お子様のしつけや教育』についての情報をどこから（誰から）得ていますか」と複数回答でたずねた。図2-6-1をみると、しつけや教育の情報源として、多い順に「母親の友人・知人」が70.7%、「インターネットやブログ」が65.4%、「テレビ・ラジオ」が54.0%、「(母方の) 祖父母」が44.8%、「育児・教育雑誌」が42.0%だった。種類別にみると、1位の「母親の友人・知人」は友人・

知人、2位の「インターネットやブログ」、3位の「テレビ・ラジオ」と5位の「育児・教育雑誌」はウェブ・書籍などのメディア、4位の「(母方の) 祖父母」は家族や親戚など、母親は多方面から情報を得ていた。

●0歳6か月～1歳5か月では、多岐にわたって情報を得ている

子どもの年齢により、情報源は異なってくるだろうか。未就園児で0歳6か月～1歳5か月の時点と、1歳6か月～3歳11か月の時点とを比べた。表2-6-1で下線を引いたところが5ポイント以上差の見られたところである。

図2-6-1 しつけや教育の情報源 (15年)



注1) 複数回答。

注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。

注3) 母親のみ分析 (3,838人)。そのため、「(お子様の) 母親」の項目を省略。

注4) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

まず、「(母方の) 祖父母」について、0歳6か月～1歳5か月では54.5%だったのに対して、1歳6か月～3歳11か月では49.3%と5.2ポイント減った。また、専門家や行政では、「病院の医師や看護師」「保健師や栄養士」「市区町村の子育てサービス窓口の人」が減った。ウェブ・書籍などのメディアでは「SNS」「インターネットやブログ」「育児・教育雑誌」「育児書や教育所などの書籍」「メーカーカタログ・通信販売カタログ」が減った。0歳6か月～1歳5か月の時期、多岐にわたる情報源からしつけや教育の情報を得ていることがわかる。一方、子どもの年齢が上がると増えるのが、「子どもの習い事や教室の先生」「新聞」「通信教育の親向け冊子」だった。子どもの成長に伴い、習い事や教育関連で情報源が増えている様子うかがえる。

● 1歳6か月～3歳11か月では、未就園児の母親は多くの人から、保育園児の母親は「園の先生」から情報を得ている

子どもの就園状況で、情報源に差はあるだろうか。1歳6か月～3歳11か月では未就園児と保育園児を、4歳

0か月～6歳11か月では幼稚園児と保育園児を比べた(表2-6-1)。

1歳6か月～3歳11か月で未就園児のほうが保育園児より5ポイント以上高かったのは、「子育てサークルの仲間」(未就園児24.4%、保育園児6.4%、差18.0ポイント)、「市区町村の子育てサービス窓口の人」(未就園児11.9%、保育園児4.1%、差7.8ポイント)、「子どもの習い事や教室の先生」(未就園児11.7%、保育園児3.9%、差7.8ポイント)、「(父方の) 祖父母」(未就園児23.5%、保育園児16.2%、差7.3ポイント)「父親」(未就園児23.6%、保育園児17.8%、差5.8ポイント)、「(母方の) 祖父母」(未就園児49.3%、保育園児43.7%、差5.6ポイント)だった。保育園児のほうが未就園児より高かったのは、「園の先生」(未就園児9.2%、保育園児75.9%、差66.7ポイント)だった。1歳6か月～3歳11か月の場合、未就園児の母親のほうが多くの人から情報を得ていた。また、保育園児の母親は子どものしつけや教育について、園の先生を頼りにしている様子うかがえる。

表2-6-1 しつけや教育の情報源 (子どもの年齢区分別・就園状況別 15年)

(%)

	0歳6か月～1歳5か月	1歳6か月～3歳11か月		4歳0か月～6歳11か月	
	未就園児 (493)	未就園児 (920)	保育園児 (452)	幼稚園児 (1253)	保育園児 (489)
父親	21.3	23.6	17.8	23.2	23.9
(父方の) 祖父母	24.9	23.5	16.2	16.8	17.8
(母方の) 祖父母	54.5	49.3	43.7	38.8	40.2
母親のきょうだいや親戚	25.2	25.3	25.5	22.6	21.8
父親のきょうだいや親戚	6.7	5.7	4.8	4.0	3.6
子育てサークルの仲間	24.8	24.4	6.4	8.2	4.1
母親の友人・知人	64.2	65.4	65.7	80.6	68.8
父親の友人・知人	8.7	3.9	3.0	3.8	4.3
病院の医師や看護師	14.2	8.8	11.9	3.7	6.6
保健師や栄養士	18.7	9.0	5.3	2.7	3.5
市区町村の子育てサービス窓口の人	18.5	11.9	4.1	2.7	2.3
子どもの習い事や教室の先生	4.7	11.7	3.9	17.7	10.0
園の先生	4.8	9.2	75.9	43.4	65.6
SNS	33.2	24.6	23.2	18.7	24.2
テレビ・ラジオ	50.3	54.7	51.1	59.1	47.7
インターネットやブログ	78.4	69.0	69.1	58.7	58.0
新聞	10.2	15.7	16.6	23.2	19.4
育児・教育雑誌	65.0	41.9	44.4	35.4	34.4
通信教育の親向け冊子	17.4	22.4	18.1	23.9	23.3
育児書や教育書などの書籍	33.3	23.9	21.5	20.7	19.4
メーカーカタログ・通信販売カタログ	9.4	4.4	4.5	2.9	3.1
その他	0.2	0.0	0.7	0.2	0.6

注1) 複数回答。

注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。

注3) 母親のみ分析。そのため、「(お子様の) 母親」の項目を省略。()内はサンプル数。

注4) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

注5) 下線は、0歳6か月～1歳5か月の未就園児と、1歳6か月～3歳11か月の未就園児で5ポイント以上差のある項目の大きいもの。

注6) 網かけは、1歳6か月～3歳11か月では未就園児と保育園児、4歳～6歳11か月では幼稚園児と保育園児で5ポイント以上差のある項目で大きいもの。

●4歳0か月～6歳11か月では、幼稚園児の母親は知人・友人から、保育園児の母親は知人・友人と園の先生から情報を得ている

続いて、4歳0か月～6歳11か月で幼稚園児のほうが保育園児より5ポイント以上高かったのは、「母親の友人・知人」(幼稚園児80.6%、保育園児68.8%、差11.8ポイント)、「テレビ・ラジオ」(幼稚園児59.1%、保育園児47.7%、差11.4ポイント)、「子どもの習い事や教室の先生」(幼稚園児17.7%、保育園児10.0%、差7.7ポイント)だった。保育園児のほうが幼稚園児より高かったのは、「園の先生」(幼稚園児43.4%、保育園児65.6%、差22.2ポイント)、「SNS」(幼稚園児18.7%、保育園児24.2%、差5.5ポイント)だった。4歳0か月～6歳11か月の場合、幼稚園児の母親は「母親の友人・知人」から情報を得ることが多く、保育園児の母親は「母親の友人・知人」と「園の先生」から同じくらい情報を得ているようだ。また、メディアについて幼稚園児の母親は「テレビ・ラジオ」から情報を得ることが多く、保育園児の母親は「SNS」からも情報を得ることが多かった。情報を得る場面として、幼稚園児の母親は在宅でテ

レビやラジオを見る機会が多く、保育園児の母親は外出先でSNSを利用する様子が見える。

●20代の母親は、祖父母とネットから情報を得る傾向

母親の年代区別で情報源に差があるか。子どもが小さいほど母親の年齢も若いいため、年代区別による差をみるために、子どもの年齢を1歳6か月以上に限定してみよう。20代の母親と40代以上の母親を比べて差が10ポイント以上のものをみた(表2-6-2)。20代の母親が情報を得る比率が高かったのは、「(父方の)祖父母」(20代22.4%、40代以上12.3%)、「(母方の)祖父母」(20代61.6%、40代以上32.2%)、「SNS」(20代38.1%、40代以上14.8%)、「インターネットやブログ」(20代71.7%、40代以上56.8%)だった。20代の母親は祖父母とネットから情報を得る傾向がみられた。

一方、40代以上の母親が情報を得る比率が高かったのは、「母親の友人・知人」(20代56.0%、40代以上73.0%)、「園の先生」(20代30.6%、40代以上45.1%)「新聞」(20代4.7%、40代以上26.3%)だった。

表2-6-2 しつけや教育の情報源 (母親の年代区別 15年)

	(%)		
	20代 (219)	30代 (1,864)	40代以上 (826)
(お子様の) 父親	18.9	23.7	21.5
(父方の) 祖父母	22.4	21.4	12.3
(母方の) 祖父母	61.6	46.6	32.2
母親のきょうだいや親戚	21.8	24.4	22.9
父親のきょうだいや親戚	3.7	4.4	4.1
子育てサークルの仲間	15.5	13.5	9.4
母親の友人・知人	56.0	72.4	73.0
父親の友人・知人	4.1	4.0	3.0
病院の医師や看護師	11.2	7.2	6.6
保健師や栄養士	5.2	6.1	3.5
市区町村の子育てサービス窓口の人	6.3	6.1	4.5
子どもの習い事や教室の先生	6.9	12.6	15.7
園の先生	30.6	41.3	45.1
SNS(Facebook, Twitter, LINEなどのソーシャルメディア)	38.1	24.9	14.8
テレビ・ラジオ	52.0	54.8	54.7
インターネットやブログ	71.7	65.4	56.8
新聞	4.7	17.6	26.3
育児・教育雑誌	38.9	39.4	35.1
通信教育の親向け冊子	18.3	22.8	23.1
育児書や教育所などの書籍	16.9	21.5	23.4
メーカーカタログ・通信販売カタログ	2.2	3.8	3.4
その他	0.4	0.3	0.2
無答不明	0.0	0.0	0.0

注1) 複数回答。

注2) 母親のみ分析。そのため、「(お子様の) 母親」の項目を省略。()内はサンプル数。

注3) 網かけは、年代区別で10ポイント以上の差がある項目の最大値。



第7節 幼稚園・保育園への要望

幼稚園・保育園に対する要望をみると、前回までの調査と比較して増加傾向にあるのは「知的教育を増やしてほしい」「保育終了後におけいこ事をやってほしい」「子どもが病気のときに預かってほしい」である。

●園に知的教育やおけいこ事を求める母親が増加

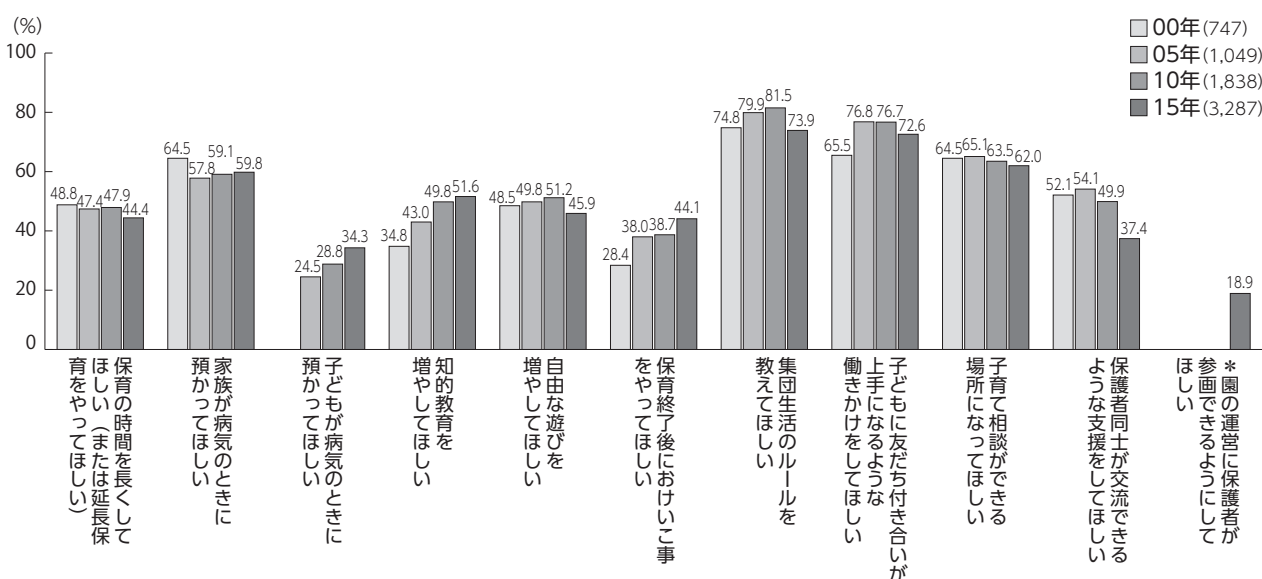
子どもたちが幼稚園や保育園で過ごす時間が増え、幼児の生活の中で、園の存在感はますます大きくなっている。それでは、母親たちは園に何を期待しているのだろうか。本節では、幼稚園・保育園への要望について、母親の回答結果を分析した(図2-7-1)。

上位(「とてもそう思う+まあそう思う」の%)の項目は15年間で大きな変化はない。約7割の母親が園に対して「集団生活のルールを教えてほしい」「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」と思っている。次いで、約6割の母親が「子育て相談ができる場所になってほしい」「家族が病気のときに預かってほしい」と思っている。

また、15年前の00年から一貫して増加傾向にある項目は、「知的教育を増やしてほしい」(00年34.8%→05

年43.0%→10年49.8%→15年51.6%。以下同)、「保育終了後におけいこ事をやってほしい」(28.4%→38.0%→38.7%→44.1%)である。05年から新たに追加した項目である「子どもが病気のときに預かってほしい」も10年間で増加傾向にある(05年24.5%→10年28.8%→15年34.3%。以下同)。逆に、この10年間で減少傾向にあるのは「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」(54.1%→49.9%→37.4%)であった。また、この5年間で減少したのは「自由な遊びを増やしてほしい」(10年51.2%→15年45.9%。以下同)、「集団生活のルールを教えてほしい」(81.5%→73.9%)であった。全体をみると、園では社会性を身につけてほしいと考える母親が多いものの、遊びや日常の保育だけではなく「知的教育」「おけいこ事」もと要望が多様になっていることがうかがえる。また「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」の減少については、すでに

図2-7-1 幼稚園・保育園への要望(経年比較)



注1) 「とてもそう思う+まあそう思う」の%。
 注2) 母親の回答のみ分析。
 注3) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注4) 「子どもが病気のときに預かってほしい」は00年ではたずねていない。
 注5) *は15年調査のみの項目。
 注6) ()内はサンプル数。

多くの幼稚園・保育園でそうした機会を用意しているために「もう十分である」と考えている母親や、保護者同士の人間関係の難しさから交流を敬遠する母親がいることが背景にあるだろう。

●幼稚園児よりも保育園児、高年齢よりも低年齢の子どもをもつ母親の要望が高い

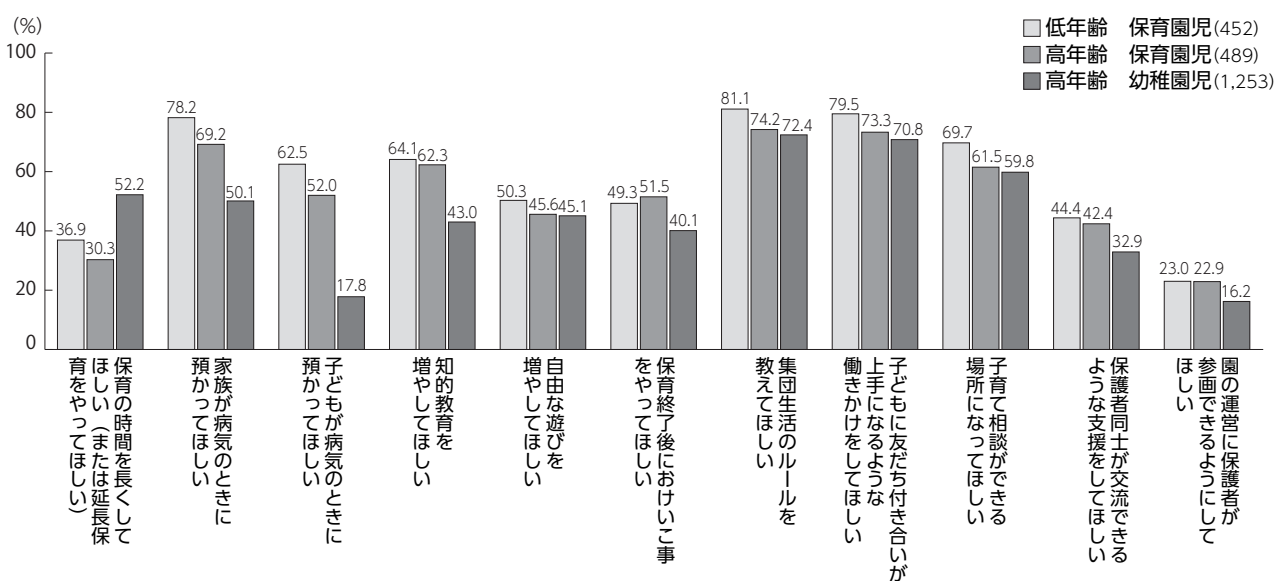
次に、子どもの就園状況別、年齢区分別に園への要望をみた結果が図2-7-2である。まず、同じ年齢区分の幼稚園児と保育園児（高年齢）の母親の結果を比較したところ、幼稚園児よりも保育園児（高年齢）のほうが要望としてあげる項目が全体的に多かった。保育園児（高年齢）のほうが10ポイント以上高かった項目は「家族が病気のとときに預かってほしい」（高年齢保育園児69.2%、幼稚園児50.1%。以下同）、「子どもが病気のとときに預かってほしい」（52.0%、17.8%）、「知的教育を増やしてほしい」（62.3%、43.0%）、「保育終了後においこ事をしてほしい」（51.5%、40.1%）であった。差がみられなかったのは「自由な遊びを増やしてほしい」（45.6%、45.1%）、「集団生活のルールを教えてほしい」（74.2%、72.4%）、「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」（73.3%、70.8%）など社会性に関する項目と、「子育て相談ができる場所

になってほしい」（61.5%、59.8%）であった。幼稚園児のほうが高かったのは「保育の時間を長くしてほしい（または延長保育をやってほしい）」（30.3%、52.2%）のみであった。

次に、保育園児の低年齢と高年齢の母親の結果を比べると、総じて低年齢の母親のほうが選択率が高かった。「保育の時間を長くしてほしい」（低年齢保育園児36.9%、高年齢保育園児30.3%。以下同）、「家族が病気のとときに預かってほしい」（78.2%、69.2%）、「子どもが病気のとときに預かってほしい」（62.5%、52.0%）、「集団生活のルールを教えてほしい」（81.1%、74.2%）、「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」（79.5%、73.3%）、「子育て相談ができる場所になってほしい」（69.7%、61.5%）であった。低年齢では子どもが病気にかかりやすいことや、子どもの年齢が幼いほうが、母親に「ママ友」が少なく、子育ての悩みを園で相談したいと考える母親がより多く存在する可能性が背景として考えられる。

これらの分析結果からは、幼稚園児よりも園で過ごす時間が長い保育園児の母親において、園への要望が多様であること、さらに高年齢よりも低年齢の子どもをもつ保育園児の母親のほうが、園に対する要望が多いことが明らかとなった。

図2-7-2 幼稚園・保育園への要望（就園状況別・年齢区分別 15年）



注1) 「とてもそう思う+まあそう思う」の%。
 注2) 母親の回答のみ分析。
 注3) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注4) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。
 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注5) ()内はサンプル数。

第3章

父親のかかわりと子育て支援



田村 徳子 (1、2節)



第1節 支援する人・機関・サービス

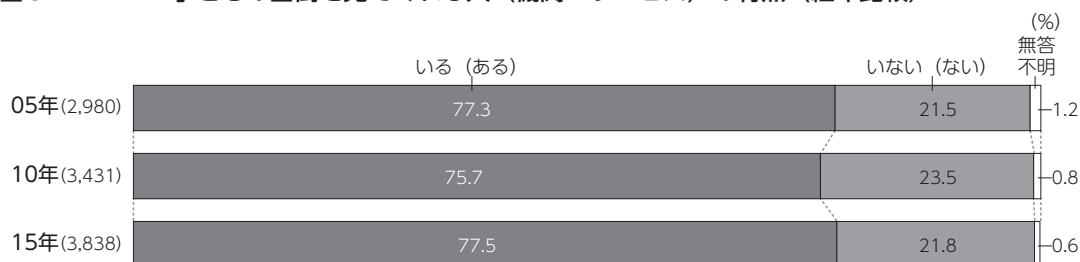
母親が家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人がいる比率に変化はないが、「父親」が増加していた。1歳6か月～3歳11か月で「祖父母やきょうだい、親戚」が減り、「父親」が増える傾向が見られた。

●母親が家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人がいる比率に変化はない

子育てを取り巻く環境は、どのように変化しているだろうか。母親を対象に「あなたが家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）がいますか。

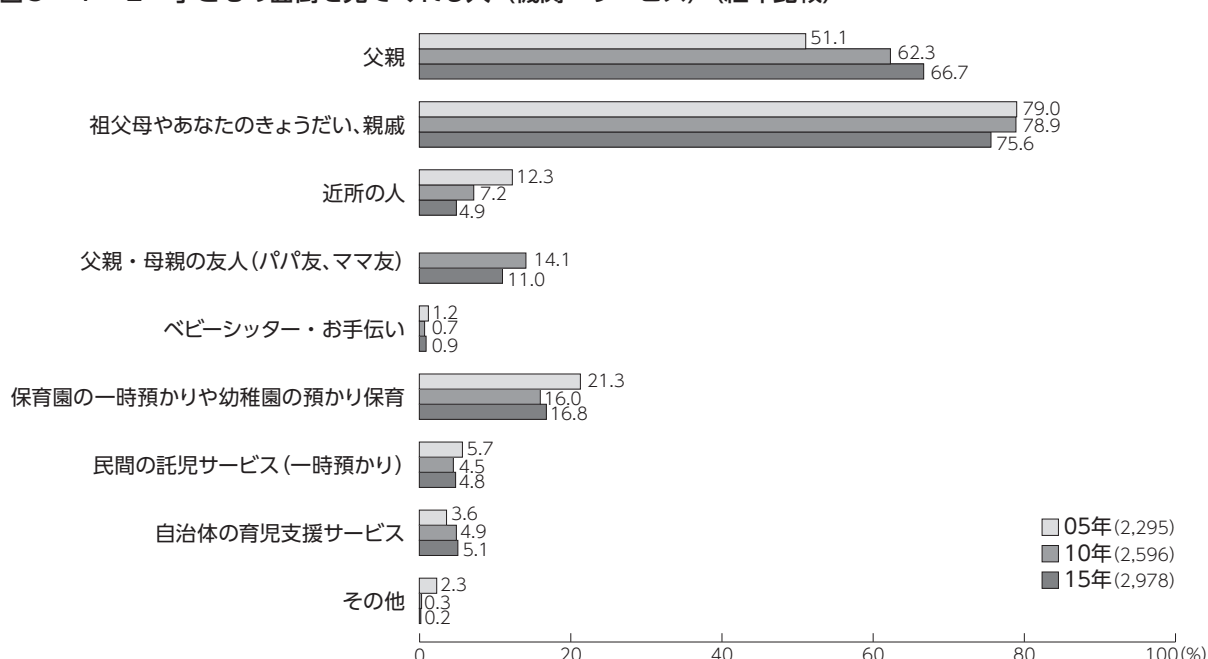
通常、幼稚園・保育園にお子様を通わせている時間は除いてお答えください」とたずねた。図3-1-1をみると、「いる（ある）」比率は、05年が77.3%、10年が75.7%、15年が77.5%だった。この10年で変化はみられなかった。

図3-1-1 子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）の有無（経年比較）



注1) 母親のみ回答。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) 05年調査は、「あなたが仕事以外で家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）はいます（あります）か」とたずねている。
 注4) () 内はサンプル数。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

図3-1-2 子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）（経年比較）



注1) 複数回答。 注2) 母親のみ回答。子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）が「いる（ある）」と回答した人のみ回答。
 注3) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。 注4) 「父親・母親の友人（パパ友、ママ友）」は、10年調査以降の項目。
 注5) 10年調査までは「祖父母や親戚」→15年調査は「祖父母やあなたのきょうだい、親戚」と項目名を変更した。 注6) () 内はサンプル数。
 注7) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

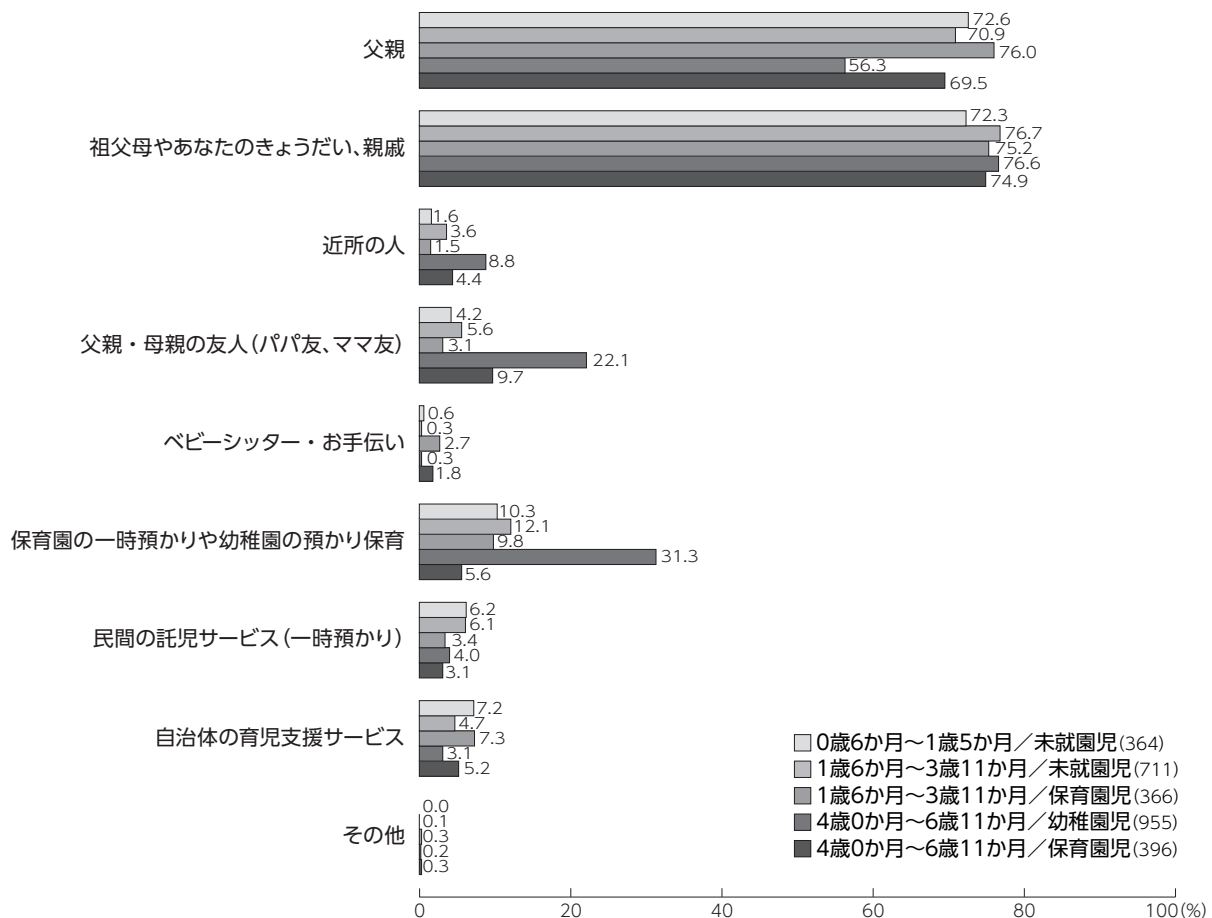
●子どもの面倒を見てくれる人として「父親」が増加し、「近所の人」は減少

「いる(ある)」と答えた人に、どのような人(機関・サービス)に子どもを預けているかについて、複数回答でたずねた。図3-1-2がその結果である。15年をみると、「祖父母やあなたのきょうだい、親戚」が75.6%で、もっとも高い比率であり、次いで「父親」が66.7%と6割以上だった。さらに、「保育園の一時預かりや幼稚園の預かり保育」16.8%、「父親・母親の友人」11.0%と続くが1割台だった。園以外で子どもを預けるとき、まず家族や親族に預ける傾向がうかがえる。経年で比べると、この「祖父母やあなたのきょうだい、親戚」は、この10年を通してもっとも比率が高かった。変化が大きかったのが「父親」である。「父親」は05年には51.1%と約半数だったが、10年では62.3%、15年では66.7%と増える傾向にある。一方、「近所の人」は05年には12.3%だったのが、10年では7.2%、15年では4.9%と減る傾向がみられた。

●保育園児の場合、未就園児と幼稚園児より「父親」の比率が高い

子どもの年齢区分別・就園状況別に「子どもの面倒を見てくれる人(機関・サービス)」を見たのが図3-1-3である。「祖父母やあなたのきょうだい、親戚」は、いずれの年齢区分・就園状況でも比率は変わらなかった。「父親」は、全体を通して保育園児が未就園児と幼稚園児に比べて高い比率だった。とくに4歳0か月~6歳11か月では幼稚園児が56.3%だったのに対して、保育園児は69.5%と13.2ポイントの差があった。一方、4歳0か月~6歳11か月の幼稚園児で保育園児に比べて比率が高い傾向がみられたのが「保育園の一時預かりや幼稚園の預かり保育」(4歳0か月~6歳11か月:幼稚園児31.3%、保育園児5.6%)、「父親・母親の友人」(4歳0か月~6歳11か月:幼稚園児22.1%、保育園児9.7%)だった。幼稚園児の母親は、家族や親族だけでなく、園の預かりや友人に預けながら、さまざまな用事をこなしていると思われる。保育園児の母親の場合、父親に子どもを預けて、さまざまな用事をこなす時間を捻出しているの

図3-1-3 子どもの面倒を見てくれる人(機関・サービス)(子どもの年齢区分別・就園状況別 15年)



注1) 複数回答。
 注2) 母親のみ回答。子どもの面倒を見てくれる人(機関・サービス)が「いる(ある)」と回答した人のみ回答。
 注3) 0歳6か月~6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注4) ()内はサンプル数。
 注5) 0歳6か月~6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

だろう。また、日曜日など園がないときに仕事が入ることもあり、そのときに父親に預けることも考えられる。

●1歳6か月～3歳11か月で、子どもの面倒を見てくれる人は「祖父母やきょうだい、親戚」が減り、「父親」が増える傾向

面倒を見てくれる人で、子どもの年齢区分別・就園状況別に、経年で比較した(表3-1-1)。その結果、0歳6か月～1歳5か月、1歳6か月～3歳11か月で「祖父母やあなたのきょうだい、親戚」が減っていた(1歳6か月～3歳11か月の場合。未就園児：10年82.0%、15年76.7%、5.3ポイント差、保育園児：10年83.6%、15年75.2%、8.4ポイント差)。そして「父親」が増えていた(1歳6か月～3歳11か月の場合。未就園児：10年64.0%、15年70.9%、6.9ポイント差、保育園児：10年68.7%、15年76.0%、7.3ポイント差)。子どもが年齢の低い場合、子どもの面倒を見てくれる人は祖父母やきょうだい、親戚が減り父親が増えている様子が見える。

●祖父母の援助は、就園状況により異なる

祖父母にどのような援助をしてもらっているだろうか。

子どもの年齢区分別・就園状況別にみたのが表3-1-2である。1歳6か月～3歳11か月では未就園児と保育園児、4歳0か月～6歳11か月では幼稚園児と保育園児を比較した。1歳6か月～3歳11か月で未就園児の比率が高かったのは、「子どものことに関する相談(1歳6か月～3歳11か月：未就園児66.5%、保育園児54.9%)」「子どもにかかる費用の援助(未就園児46.3%、保育園児31.0%)」だった。4歳0か月～6歳11か月で幼稚園児の比率のほうが高かったのは「子どもにかかる費用の援助(4歳0か月～6歳11か月：幼稚園児36.1%、保育園児27.4%)」であり、保育園児の比率のほうが高かったのは、「家事の手伝い(4歳0か月～6歳11か月：幼稚園児20.1%、保育園児27.1%)」、「幼稚園・保育園の送り迎え(4歳0か月～6歳11か月：幼稚園児20.0%、保育園児37.3%)」だった。

表3-1-1 子どもの面倒を見てくれる人(機関・サービス)(子どもの年齢区分別・就園状況別 経年比較)

	0歳6か月～1歳5か月		1歳6か月～3歳11か月				4歳0か月～6歳11か月			
	未就園児		未就園児		保育園児		幼稚園児		保育園児	
	10年	15年	10年	15年	10年	15年	10年	15年	10年	15年
父親	64.9	72.6	64.0	70.9	68.7	76.0	55.7	56.3	70.1	69.5
祖父母やあなたのきょうだい、親戚	76.9	72.3	82.0	76.7	83.6	75.2	76.1	76.6	76.6	74.9
保育園の一時預かりや幼稚園の預かり保育	1.6	1.6	5.6	3.6	1.7	1.5	13.5	8.8	5.5	4.4
父親・母親の友人(パパ友、ママ友)	5.1	4.2	8.7	5.5	4.0	3.1	25.5	22.1	13.9	9.7
近所の人	0.2	0.6	0.3	0.3	0.5	2.7	0.5	0.3	2.4	1.8
民間の託児サービス(一時預かり)	6.3	10.3	12.1	12.1	10.8	9.8	28.4	31.3	7.1	5.6
自治体の育児支援サービス	6.4	6.2	5.5	6.1	2.2	3.4	4.2	4.0	3.1	3.1
ベビーシッター・お手伝い	8.2	7.2	5.2	4.7	6.0	7.3	2.7	3.1	5.2	5.2
その他	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.3	0.7	0.2	0.0	0.3

注1) 複数回答。注2) 母親のみ回答。子どもの面倒を見てくれる人(機関・サービス)が「いる(ある)」と回答した人のみ回答。
 注3) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注4) 網かけは、10年と15年で、5ポイント以上の差がある項目の大きいもの。
 注5) ()内はサンプル数。
 注6) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

表3-1-2 祖父母の援助(子どもの年齢区分別・就園状況別 15年)

	0歳6か月～1歳5か月	1歳6か月～3歳11か月		4歳0か月～6歳11か月	
	未就園児(496)	未就園児(917)	保育園児(469)	幼稚園児(1,278)	保育園児(512)
家事の手伝い	28.8	23.7	27.5	20.1	27.1
子どもを預かってもらうこと	42.3	53.0	53.7	52.5	57.4
子どものことに関する相談	62.4	66.5	54.9	53.7	54.5
子どもにかかる費用の援助	45.4	46.3	31.0	36.1	27.4
幼稚園・保育園の送り迎え			33.6	20.0	37.3

注1) 祖父母のいる人へのみの回答。注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) 「よくある」と「ときどきある」の合計。注4) ()内はサンプル数。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。



第2節 夫婦の家事・子育て分担

母親の86.4%が、平日の子育てについて、自分が8割以上分担していると回答した。母親が常勤者である場合、パートタイムや専業主婦よりも父親が家事と子育てを行う比率が高い。子どもの年齢が上がると、就園状況にかかわらず、母親が家事と子育てを担う比率が高くなる。

●母親の86.4%が、平日の子育てについて、自分が8割以上分担していると回答

家事や子育てにおいて、夫婦はどのように分担しているだろうか。配偶者のいる母親に対して、平日と休日の家事と子育てについて、分担の割合をたずねた(図3-2-1)。

母親が10割、つまりすべて担っていると回答した比率は、「平日の家事」で51.5%、「平日の子育て」で37.9%、「休日の家事」で22.0%、「休日の子育て」で3.4%だった。平日は半分以上の母親が家事をすべて担っており、4割弱の母親が子育てをすべてになっている状態だった。

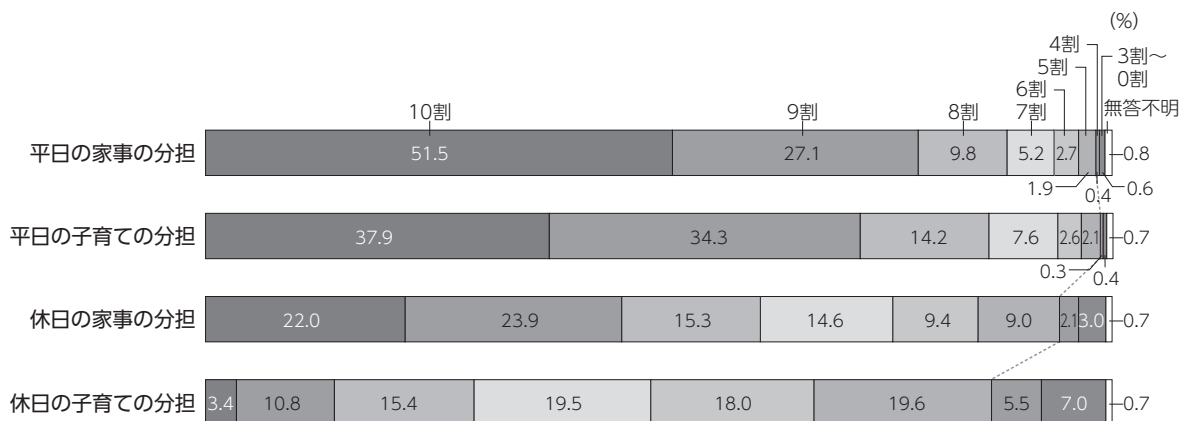
母親が8割以上分担していると回答した比率をみると、「平日の家事」で88.4%、「平日の子育て」で86.4%、「休日の家事」で61.2%、「休日の子育て」で29.6%だった。平日の家事と子育てを母親が多く担っており、休日に父親も家事と子育てにかかわっている傾向がみられた。

●母親が常勤者である場合、パートタイムや専業主婦よりも父親が家事と子育てを行う比率が高い

母親の就業状況別に、平日と休日の家事と子育ての分担について比較を行った(図3-2-2)。

母親が8割以上分担していると回答した比率をみると、常勤の場合、「平日の家事」で67.2%と6割台だった。「平日の子育て」で66.6%、「休日の家事」で44.6%、「休日の子育て」で25.5%だった。パートタイムの場合、「平日の家事」で88.2%、「平日の子育て」で86.1%と8割台だった。「休日の家事」で62.9%、「休日の子育て」で32.0%だった。専業主婦の場合、「平日の家事」で95.4%、「平日の子育て」で92.9%と9割台になっていた。「休日の家事」で68.2%、「休日の子育て」で31.4%だった。母親が常勤であるほうが、パートタイムや専業主婦よりも父親が家事と子育てを行う比率が高い傾向がみられた。とくに、平日の家事と子育てを8割以上行うと回答した比率は、常勤が6割台であるのに対して、パートタイムでは8割、専業主婦では9割と差がみられた。また、休日の家事を8割以上行うと回答した割合については常勤が4割台であるのに対して、専業主婦とパートタイムが7割弱と差がみられる結果だった。

図3-2-1 夫婦の家事・子育て分担 (15年)



注1) 配偶者がいる母親のみ回答 (3,774)。
 注2) 0歳6か月~6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) 「母10割父0割」を「10割」、「母9割父1割」を「9割」、「母0割父10割」を「0割」のように図示している。
 注4) 0歳6か月~6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

●子どもの年齢が上がると、就園状況にかかわらず、母親が家事と子育てを担う比率が高くなる

子どもの年齢と就園状況により、夫婦の分担は違って来るだろうか。子どもの年齢区分別・就園状況別に、平日と休日の家事と子育ての分担について比較を行った(図3-2-3)。

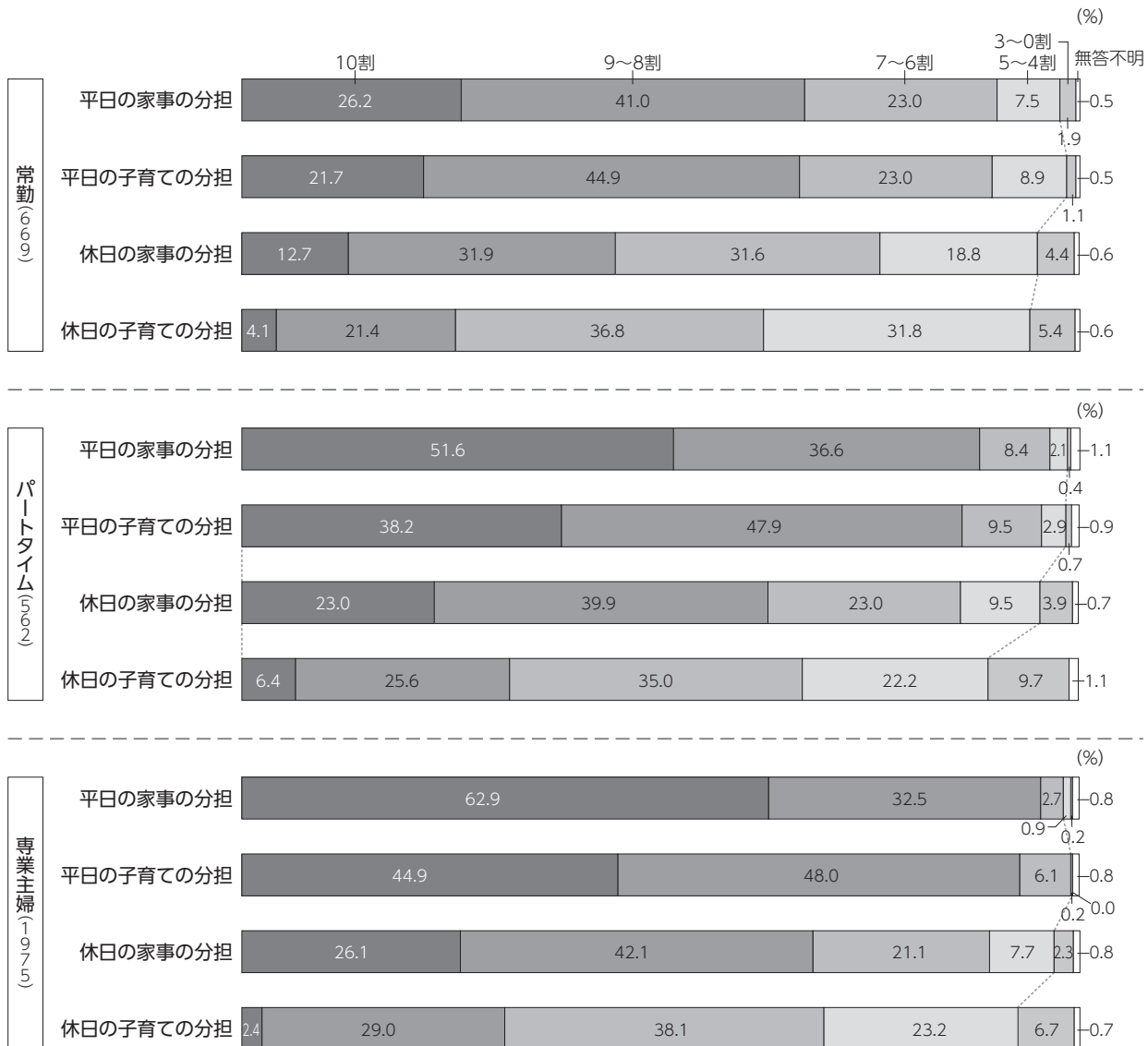
まず、子どもの就園状況別にみると、母親の就業状況別にみたのと同様に、子どもが保育園に通っている場合のほうが未就園児や幼稚園に通っている場合に比べて、父親が家事と子育てを行う比率が高かった。

次に、子どもの年齢区分でみてみよう。0歳6か月～1歳5か月の未就園児と、1歳6か月～3歳11か月の未

就園児を比べた。母親が10割分担していると回答した比率をみると、「平日の家事」について、0歳6か月～1歳5か月では50.8%、1歳6か月～3歳11か月では59.9%と9.1ポイント増えた。「平日の子育て」について、0歳6か月～1歳5か月では34.4%、1歳6か月～3歳11か月では44.9%と10.5ポイント増えた。一方、「休日の家事」については、0歳6か月～1歳5か月では21.4%、1歳6か月～3歳11か月では24.6%であり、「休日の子育て」については、0歳6か月～1歳5か月では2.5%、1歳6か月～3歳11か月では2.5%と変わらなかった。

また、1歳6か月～3歳11か月の保育園児と4歳0か月～6歳11か月の保育園児を比べた。「平日の家事」に

図3-2-2 夫婦の家事・育児分担 (母親の就業状況別 15年)



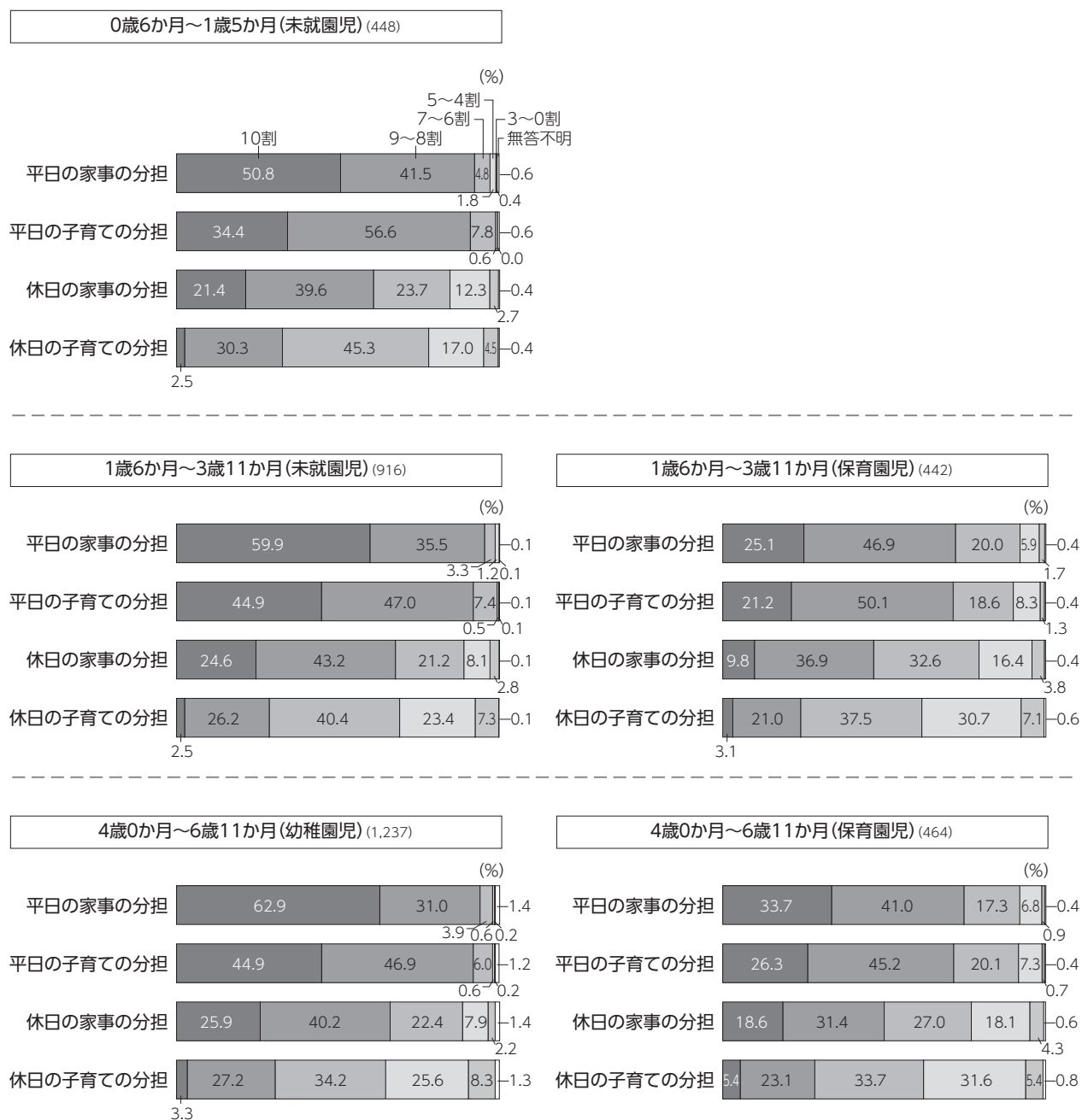
注1) 配偶者がいる母親のみ回答。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) 「母10割父0割」を「10割」、「母9割父1割」と「母8割父2割」を合わせて「9～8割」のように図示している。
 注4) () 内はサンプル数。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

ついて、1歳6か月～3歳11か月では25.1%、4歳0か月～6歳11か月では33.7%と8.6ポイント増えた。「平日の子育て」について、1歳6か月～3歳11か月では21.2%、4歳0か月～6歳11か月では26.3%と5.1ポイント増えた。また、「休日の家事」については、1歳6か月～3歳11か月では9.8%、4歳0か月～6歳11か月では18.6%と8.8ポイント増えた。「休日の子育て」については、1歳6か月～3歳11か月では3.1%、4歳0か月～6歳11か月では5.4とあまり変わらなかった。

子どもの年齢が上がると、就園状況にかかわらず、平日の家事と子育てを母親が担う割合が増える傾向にある

ようだ。子どもが0歳6か月～1歳5か月の時期は子どもがずりばいやはいはいをし、やがて立って歩き始める時期である。大人が子どもからなかなか目を離せなかったり、外出がままならなかったりすることもあり、平日でも夫婦で少しでも分担しないと日々の生活がまわらないだろう。子どもの年齢が上がると、子ども自身でできることも増え、家事や子育てを、夫婦で分担する比率が減ってくると思われる。とはいえ、子どももまだ幼児であり、母親が家事や子育ての多くを担う状況はたいへんと思われる。

図3-2-3 夫婦の家事・子育て分担 (子どもの年齢区分別 就園状況別 15年)



注1) 配偶者がいる母親のみ回答。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) 図では、「母10割父0割」を「10割」、「母9割父1割」と「母8割父2割」を合わせて「9～8割」のように図示している。
 注4) () 内はサンプル数。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。